
仮面ライダー電王LYRICAL A's to Strikers

皆大好

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー電王LYRICAL As to Strike
rs

【Nコード】

N3059Y

【作者名】

皆大好

【あらすじ】

『闇の書事件』及び『ネガタロスの逆襲』から六年が経過した。仮面ライダーと出会った者達はある者は二つの顔を持つ状態に、ある者はその者達を支える立場でありながらも未来へと一步を踏み出していた。

新暦0071年。

同窓会的任務の中で彼女達は会うことになる。

『仮面ライダー』に。

これは心と顔を隠す決意をした一人の戦士の物語。

第一話 「青い仮面ライダー」 (前書き)

皆様。

初めまして。

お久しぶりの方はお久しぶりです。

皆大好きです。

それでは第三部の開幕です！

第一話 「青い仮面ライダー」

新暦0071年。

これはミッドチルダの暦である。

『新』と名がつくという事は一応『旧』もあるということだろうが、今はさしたる問題ではないので取り上げない。

『闇の書事件』及び『ネガタロスの逆襲』から六年が経過した世界。それでも時間は等しく時を刻んでいる。

＊

『時の列車』

それを手にした者はある事を決断しなければならない。

『普通』の生活を捨てるという事を。

＊

空は快晴であり、心地よい風が吹く季節。

時刻は『午後』に差し迫っていた。

市立聖祥大付属中学校あと一時限受けければ学生達にとっては憩いとなる『昼休み』になるのだが、集合時間が迫っているので早退しなければならぬ。

『三年二組』の教室をフェイト・Ｔ・ハラオウンが出ようとしていた。

「じゃフェイト。いつてらっしゃい。授業のノート取っとくからね」「うん。ありがとうアリサ。あといつものでいいんだよね？」

フェイトは学生生活のケアをしてくれているアリサ・バニングスに

感謝しながら代償はいつものものでいいのか確認を取る。

「そうそう。報酬は翠屋のケーキセットでいいわよ」

「わかった」

フェイトは笑みを浮かべて鞆を持って教室を出ていく。

このやり取りだが、最初はアリサが冗談半分で言ったものだがフェイトはそれを本気で受け止めて、『自分達の学生生活があるのはアリサやずずかのお陰』という感謝の意を込めて返した事から始まっている。

学生生活が守られる代償がケーキセットというのは、正直破格な取引といってもいいだろう。

「なのはも！気をつけてね！」

「はぁーい！」

アリサがフェイトと同じ目的を早退しようとする高町なのはにも声をかける。

無論彼女もフェイト同様に学生生活のケアの代価として翠屋のケーキをご馳走するようになっていた。

自分のお小遣いで買っているので、やましい事は何一つない。

フェイトを追うようにして、なのはも教室を出た。

『三年六組』でも同じ様なやり取りが行われていた。

「ほんなら、ずずかちゃん。また月曜にな。お礼は例の物でええんよね？」

「うん。いつもありがとう。はやてちゃんも気をつけてね」

「何言ってるの。私等がこうして学生できるんもみーんなずずかちゃん、アリサちゃんのお陰なんやで。もうありがたくてありがたくて」

八神はやてが仏様を拝むようにしてずずかに手を合わせて拝む。

「は、はやてちゃん！？もうそれはやめてって……」

ちなみにこんなやり取りも日常的に行われているため、クラスメイト達は温かい目で見ていたりする。

はやてが早退し、残りの授業の面倒を月村すずかに頼んでから教室に出ると廊下にはフェイトが歩いていた。

「はやて」

「フェイトちゃん。なのはちゃんは？」

「後から来るから大丈夫だよ」

「そか」

フェイトとはやてが他愛のないやり取りをしていると、

「フェイトちゃん。はやてちゃん」

遅れてなのはが走ってきた。

はやてとフェイトは互いに顔を合わせて笑っていた。

三人は人目のつかない学校の屋上に移動していた。

既に授業が開始しているのか、屋上には三人しかいない。

『三人とも準備は出来てる？忘れ物はない？』

三人が持っているデバイスを紹介して、エイミィ・リミエッタが確認するように言う。

「はい！大丈夫です！」

「私も大丈夫だよ」

「問題ありません」

なのは、フェイト、はやてはそれぞれ返事をする。

『それじゃ、いつもの場所に転送ポートを開くね』

エイミィの言葉に三人は頷き、それぞれ待機状態になっているデバ
イスを掌にとつて翳す。
棒

「レイジングハート！」

『イエス。マイマスター』

なのは
主の声に紅い珠――レイジングハート・エクセリオンが返す。

「バルディッシュュ！」

『イエッサー』

野上良太郎から貰った懐中時計と同じくらいもしかしたら比べては
いけないくらいに大切な物――バルディッシュュ・アサルトに声を

かけ、相棒は即座に返す。

「リインフォース！」

かつて自らの信念と思いを貫いて消えたリインフォースが残した金色の首飾りを掌に取る。

「はい！マイスターはやて！」

リインフォースと酷似した容姿をしながらも、青い瞳に愛嬌のある雰囲気でリインフォースと違い子供な体型をしている掌サイズの少女が出現した。

少女――リインフォース^{ツヴァイ}？（以後：リイン）である。

「セーットアップ！！」

三人が同時に翳した。

その直後に校舎の屋上には三人の姿はなくなった。

なのは、フェイトはバリアジャケットを纏い、はやては騎士服を纏っていた。

リインははやての左肩に乗っかっている。

足場を空に移して互いに顔を見合わせてから、

「ゴオオオオ！！」

と第162観測指定世界の空を駆けた。

*

第162観測指定世界の衛星軌道上に佇んでいる次元航行艦アースラ。

「じゃ改めて今日の任務の説明ね。その世界にある遺跡発掘先を二つ回って発見されたロストロギアを確保。最寄の基地で詳しい場所を聞いてモノを受け取って、アースラに戻って本局までの護送！」

エイミイが第162観測指定世界の空を飛んでいる四人（リイン含む）に告げた。

『平和な任務ですねえ』

飛行の心地よさと任務が血腥くない事になのはは安堵し、どこか平和な声色を出していた。

「まあモノがロストロギアだから油断は禁物だけど、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんの三人が揃ってもう一箇所にはシグナムとザフィーラがいるわけだから、まあ多少の天変地異くらいならなんとかしちゃうよね」

エイミイは信頼を込めて言う。

「よろしく頼む。あと今更君達に説明をする必要はないが一応言っておく。イマジンに出くわしたら迷わずに撤退する事。人命第一だからね」

エイミイの後ろにいるアースラ艦長であるクロノ・ハラウンが現場にいる面々に一言言う。

了解と声が聞こえた。

今日、時空管理局はイマジンに対しては常に後手に回り肝を嘗めさせられている。

イマジン一体と戦うのに何十人の武装局員を用いて戦わなければならないという事実だ。

しかもそれで勝てればいいのだが、現実問題としては十回イマジンと戦って勝てるのは一、二回である。

結果は『快勝』でも『楽勝』でもない『辛勝』なのだ。

個人対個人ならばその結果でもいいだろう。

だが、一部隊対個人の戦いでその結果はあまりに情けないというのが組織の上に立つ者達の意見でもあり、世間の評価でもある。

「彼等の存在が今になって肌身に染みるなんて……」

「本当だね。良太郎君と初めて会った時に言われたんだよね？イマ

ジンは決してそんなに甘い相手ではないって」

「ああ。あの時は単純な過大評価だと思っていたが、こうして仮面ライダー彼等がいない時にイマジンと対峙してみてそれが決して誇張とかではないと理解したよ」

「仮面ライダーっていえばクロノ君。聞いたことない？『青い戦士』とか『青い仮面ライダー』の話」

「何度かは聞いたことあるよ。正体不明で神出鬼没。ここ最近になつてからか。この話が飛び交うようになったのは……」

クロノは腕を組んで正体を考えるが、思い当たる節がない。

エイミイにしても同じだった。

いつまでも雲を掴むような噂話をするよりも任務を遂行している面々の事に話題を切り替えることにした。

「みんな最近忙しいし立場も固まってきたから、こーやって同じ任務に関われるのもあと何回あるのかなあ」

エイミイとしては皆が個々に羽ばたいていく事は悪いとは思っていない。

だが寂しさがあるのもまた否定できないのだ。

「そうだな」

クロノとて表情には出さないが、複雑といえば複雑だったりする。

いつも当たり前と思っていた事が変わっていく。

経験がないわけではないが、正直慣れないし順応する努力をしなければならぬのは常だ。

「あの子達の研修期間が懐かしいやー。あの頃は本当艦内も賑やかでさあ」

「僕は騒々しくてかなわなかったがな」

エイミイとクロノが研修期間の頃を思い出しながら素直な意見を述べていた。

「ま、今日は楽しい同窓会的任務。終わったら賑やかにやりましょ」

「まあ仕方ないな」

二人は一通りの談話を終えると、仕事に集中する事にした。

たとえ内容が楽でも気を抜いていいという理由にはならないからだ。

*

北部定置観測基地に向かう中で四人はある話題が飛び交っていた。現在手ぶらだし、ただ目的地に向って飛んでいくだけでは味気ないので誰からともなく話をする事になったのだ。

「『青い仮面ライダー』の正体が……。良太郎達じゃないことは確かだよ」

フェイトが噂の人物がチームデンライナーではないと断言した。

「侑斗さんやデネブちゃんでもあらへんね」

はやてもチームゼロライナーではないと即断する。

「どうしてなんですかあ？マイスターはやて」

はやての左肩に乗っているリインはフェイトと自分の主があっさりと言い切ることがわからない。

彼女は実をいうと『仮面ライダー電王』や『仮面ライダーゼロノス』の事は聞かされているが、実物を見たことがないので今ひとつピンとこなかったりしていた。

「リインも実物を見たら私とフェイトちゃんがあっさりと違つと言いつけるんもわかるんやけどね」

写真一つ残っていない現在では彼等がこちらに赴いてくれない限り不可能な事だ。

「そうだよねえ。口で細かく言うよりも実際の電王さんやゼロノスさんを見てもらったほうが早いもんね」

なのはも笑みを浮かべながら、はやての意見に賛同する。

「リイン。電王さんはね、赤、青、金、紫とか色々形態を持ってるんだよ。そしてゼロノスさんは緑色と錆びた感じの赤色の二つの色を持ってるんだ」

なのはがリインに電王とゼロノスの装飾しているカラーリングについて説明した。

「でもでもそれだとゼロノスさんには当てはまらなくても電王さんには当てはまっちゃうですよ？」

「リイン。噂の仮面ライダーの色はきつと青色がメインカラーだと思うよ。それに電王にとって青色はあるけどメインじゃないんだよ」
フェイトが補足するようにリインに告げる。

「ふええ〜。そうなんですかあ」

リインは感心していた。

「それで話を戻すけどな。なのはちゃん的には青い仮面ライダーについてどない思う？」

「私？」

「うん。私も聞きたいな」

はやてが話題を戻してなのはにふっかけ、フェイトも意見を求めていた。

「正体不明に神出鬼没。個人でイマジンと戦う戦闘力。私達が出動する前に解決してしまう手際の高さからして変身者は変身していないくても相当強いと思うよ」

なのはは戦技教導官として言う。

「短時間でイマジン不倒せらるって事はそれだけイマジンの生態を知っているという事になるし、相当場慣れしていきやできない事だよ」

そして戦技教導隊で明らかになっている事実を話し始めた。

なのはは戦技教導隊入りした際に、上司に訊ねた事がある。

「魔導師何人がかりでイマジン不倒せますか？」と。

すると上司はこのように答えた。

「イマジン一倒すのに魔導師ランクがC-からA+の魔導師が五十人がかりで三十分以内に仕留めなければ負けは確定。AA-からAA+なら四十人がかりで三十分以内に仕留めなければ負けは確定。AA-からAA+までなら十人がかりで二十分以内に仕留めなければ負けは確定。S-からSSS+までの場合、単体で挑むなら五分以内に仕留めなければ負けは確定」と言われた。

この上司の言葉は定義づけられている魔導師ランクの實力。魔法を使用するのが人間である事を踏まえての事である。

元々、身体機能が人間よりもはるかに優れているイマジンと戦うのだ。多少のズルはやむなしとしてもこれほどの差があるとは思わなかったくらいだ。

「改めて聞かされると……」

「良太郎達が凄いつて思わせられるね」

なのはの説明にはやてとフェイトは素直な感想を述べた。

「あ、目的地ですう」

リインが指差す方向に北部定置観測基地があつた。

目的地に到着すると、三人はバリアジャケットを解除して管理局御用達の制服になる。

「さて基地の方とは……」

なのはが周囲を見回すと、男女一組の管理局員が敬礼していた。知的なイメージがある眼鏡をかけた男性と穏やかな雰囲気を持った眼鏡女性だ。

「遠路お疲れ様です。本局管理補佐官グリフィス・ロウランです！」

「シャリオ・フィニーノ通信士です！」

「ありがとうございます」

なのはは眼鏡男性――グリフィスと眼鏡女性――シャリオに感謝の言葉と敬礼で返す。

「ご休憩の準備をしてありますのでこちらへどうぞ」

「あ、平気だよ。すぐに出るから」

グリフィスが三人を休憩室へ案内しようとするが、なのははやんわりと断った。

「私等、これくらいの飛行じゃ疲れたりせーへんよ。グリフィス君は知ってるやろ？」

はやてはグリフィスと面識があるのか慣れたんだ感じた。

「はい……。存じ上げてはいるのですが……」

グリフィスは重々わかっているが、それでも形式的なことなので引くに引けない。

はやてとグリフィスのやり取りになのはとフェイトは頭上に疑問符を浮かべる。

「ああ、二人は会った事なかったんやったね。こちらの彼はグリフィス君。レティ提督の息子さんやで」

はやてが簡潔にグリフィスの紹介をした。

紹介を聞いた二人は「ああ、なるほどお」とか「確かに似てる」というコメントを返した。

「フィニーノ通信士とは初めてだよな？」

フェイトもなのはもはやても初対面だ。

「はい！でも皆さんの事はすごく知っています！！」

シャリオの表情はアイドルや芸能人を見て酔っている一般市民の表情に似ていた。

「本局次元航行部隊のエリート魔導師。フェイト・T・ハラオウン執務官！」

シャリオが憧憬の眼差しをフェイトに向ける。

「いくつかの事件を解決に導いた本局地上部隊の切り札。八神はやて特別捜査官！」

次に同じ眼差しをはやてに向けた。

「武装隊のトップ、航空戦技教導隊所属。不屈のエース。高町なのは二等空尉！」

最後になのはに向けてきた。

「陸海空の若手トップエースの皆さんとお会いできるなんて光栄ですうー！！」

シャリオが三人を前に頭が落ちてしまうのではないかというほどの勢いで頭を下げていた。

三人はするように誇張されるのはいつまで経っても慣れていないので苦笑いを浮かべるしかない。

「リインフォースさんの事も聞いていますよー。とっても優秀なデ

「バイスだつて」

「ありがとうございます」

「シャリオはリンと握手するために右手の人差し指を出す。リンは人差し指を両手で握った。

握手が一応成立したのだ。

「シャリー。失礼だろう」

「あ、いけない。つい……」

「グリフィスはテンション高めな状態になっているシャリオを窘める。

「シャリーって呼んでるんだ？仲良し？」

「フェイトがグリフィスにシャリオとの関係を訊ねる。

「す、すみません。子供の頃から家が近所で……」

「グリフィスがどのように答えたらいいのかわからない。

「幼馴染だ！」

「なのはが二人の関係を言い当てる。

「いいね。私達も幼馴染だよ」

「フェイトも自分達の間柄を打ち明ける。

「幼馴染の友達は貴重なんだから。大切にしてね」

「「はいっ！」」

「なのはが幼馴染と言う間柄を持つ先輩として後輩二人に指導した。

*

「時空管理局本局に『無限書庫』がある。

「デジタルが主流ではあるが、ここだけはアナログであつたりする。

「日々書物が増え続けるので整理が難しくなるのが特色だ。

「何せ一日に書物化して棚に入るのは一冊ではないのだから。

「それが日々続くのだから、常人なら発狂しかねないだろう。

「なお武装局員に無限書庫の業務をさせた場合。このような感想が返ってきた。

「「出口のない迷路にいるみたいだ。気が変になりそうになる」」

「これなら現場で犯罪者を追い掛け回した方がいい」

「本当に適正不適正が問われる場所」
などである。

上司が聞き分けのない部下に対して、「無限書庫に放り込むぞ」という脅し文句があったりする。

なおこの脅し文句を聞いた部下は素直に上司に従うというエピソードがあつたりする。

現在も無限書庫には管理局の制服を着た司書達が数名、本棚や本と睨めっこをしていた。

『ユーノ。そっちのデータはどうだ？』

クロノが宙にモニターを展開して訊ねてきた。

その中で私服姿の少年がいた。

無限書庫司書長のユーノ・スクライアである。

「もう解析を進めている。なのは達が戻る頃には出揃うよ」

『そうか』

ユーノの返答にクロノは満足していた。

「はいよ。ユーノ」

アルフに似た容姿をした少女が数冊の本を持ってユーノに渡してきた。

「ありがとう。アルフ」

アルフに似た容姿をした少女。コレが現在のアルフの姿である。

「アルフもすっかりその姿が定着しちゃったね」

「ああまーねー」

ユーノの台詞にアルフは感慨深く思う。

「フェイトの魔力を食わない状態を追求していったらこーなっちゃてねえ」

アルフは腕を組んで思い出す。

フェイトの魔力を食わないために試行錯誤した日々をだ。

「あたしはフェイトを守るフェイトの使い魔だけどさ、フェイトはもう十分強いし一人じゃないしね。そばにいて守るだけが守り方じ

やないしさ。家の中のことをやったりするのも結構楽しいし、来年にはクロノとエイミイも結婚する予定だし子供とか生まれたらもつと忙しくなるしね」

『アールフーー！その話はまだ秘密だつて！！』

「えー、まあいーじゃん」

モニターにはエイミイが映し出されて、顔を紅くしていた。後ろにいるクロノも紅くなっていた。

「ええと。おめでとうございます。クロノもやっと決心したんだね……」

いきなり暴露されたエイミイに同情しながらもユーノは祝福の言葉を送った。

『うつ……ありがとう。それよりユーノ君はなのはちゃんと何ともないわけ！？』

エイミイが仕返しとばかりになのはとユーノの関係を訊ねてきた。

「なのはは僕の恩人で大切な幼馴染ですよ。それだけですよ。本当に」

ユーノは即答した。

『この二人はまだ先に進みそうにないか……』

エイミイは苦笑しながらもモニターを閉じた。

「よし！モニター閉じたね。もう解いていいよ」

アルフの声と共にユーノの姿が光りだす。

やがてユーノから男性司書へと姿が変わった。

「ふうー。疲れましたあ。司書長の姿に化けてハラOWN提督と会話するのってこんなに緊張するんですね」

「まあ相手がクロノ達だからね。一見さんなら簡単には見破れやしないさ」

アルフが変身魔法を用いていた司書に労いの言葉を送る。

「アルフさん。司書長、大丈夫でしょうか？」

女性司書がユーノの心配をする。

「アイツが考案したプランA Zを無事に成し遂げるのがあたし達が

ユーノにできる事だしね。後はアイツが無事に帰ってくるのを祈るしかないからねえ」
アルフが天井を見上げて言った。

*

第162観測指定世界に私服姿のユーノと左肩に乗っている白い毛並みに青いメツシユの入ったフェレット……ロッキーがいた。
眼前にはこおろぎ型のイマジンであるクリケットイマジンがいた。
目的が何なのかはわからないが、イマジンが単体で動く時は『契約者の望み』か『はぐれイマジン』の場合は自分の意思と相場が決まっている。

「そこをどけえ。俺は今からロストログアを探すんだからよお」
その言葉からして契約者持ちのイマジンだとユーノは推測できた。

「ロストログアの盗掘が違法だってわかっててやってるんだね？ 君の契約者は……」

となると契約者は裏のブラックマーケットでロストログアを売ろうとする『死の商人』といった所だろう。

契約を履行させてしまえば『時の運行』だけでなく、罪のない人間が泣きを見るのは確実だろう。

「残念だけど契約者さんの望みは叶わないんです！」

ロッキーがユーノの方から降りて左前脚を出して宣言する。

「あん？ 何でだよ」

「僕達が君を倒すからだ！」

訝しげな表情を浮かべているクリケットイマジンに対して、ユーノとロッキーは真剣な表情になっていた。

「ユノさん！ 僕、本当の姿に戻ってもいいんですよね？」

「もちろん。思いつきり暴れていいよ。プロキオン！」

「はい！」

ロッキーが確認するように訊ねると、ユーノは二つ返事で肯定する。

それからユーノは自らの身体エネルギーを用いてベルトを出現させて腰に巻きつけた。

カチリと音がする。

そのベルトはデンオウベルトではなく、ゼロノスベルトに酷似しておりクロスディスク部分は青色と白色になっていた。

ユーノはパーカーのポケットから黒いケースを取り出して、中身を取り出す。

それは黒い素体に青色のカラーが施されているカードだった。ちなみに裏面は白色のカラーが施されている。

バイオリンで奏でているようなミュージックフォーンが流れ出す。

「変身!!」

ゼロノスベルトのバックル上部にあるチェンジレバーを右にスライドさせてからカードを挿入した。

『ベテルギウスフォーム』

電子音声で発すると、ユーノの身体に仮面ライダーゼロノスと酷似したオーラスキンに纏われていく。

青色が目立つオーラアーマーが装着され、両肩、両下腕、両ふくらはぎに二センチほどの刃のような突起が出現する。

そして、頭部にはトリケラトプスの系統であるネドケラトプスを髣髴した電仮面が銀色のデンレールを走り、形状を象って装着される。

「はあ!!」

叫ぶと同時に右手で薙ぎ払うような仕種をする。

ブオンという音が鳴って、クリケットイマジンを抑け反らせた。ロッキーが全身を輝きだし、見る見るうちに大きくなっていく。

身長は横にいる戦士より若干高いくらいになっていた。

フェレットと仮面ライダーのイメージが混濁して誕生したフェレット型のイマジンであるプロキオンである。

ちなみにロッキーとは愛称であって本名ではない。

「お、お前！仮面ライダーゼロノスか！？」

クリケットイマジン^①は興奮気味に叫ぶ。

別世界側のイマジンでもこのくらいの知識は有している。

「違いますよ。我が主は仮面ライダーゼロノスではありません」

プロキオンが即座に否定する。

戦士はゆっくりと歩きながらクリケットイマジンに告げる。

「もう一つのゼロノス。 アナザー ANOTHERゼロノスだ」

この時、この場に仮面ライダーANOTHERゼロノス（以後：Aゼロノス）が降臨した。

第一話 「青い仮面ライダー」(後書き)

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL AtSです!」

Aゼロノス降臨!

その戦闘力はいかに?

同窓会的任務にも怪しい兆しが見え始める。

第二話 「舞台表と舞台裏」

第二話 「舞台表と舞台裏」 (前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。
感想を書いてくれている皆様。

それでは第二話どうぞ。

第二話 「舞台表と舞台裏」

『ゼロノスカード』

それは周囲の者達が使用者に関する『記憶』を忘却する能力を持つカード。

知らずに使った者には『後悔』が。

知って使う者には強い『覚悟』が必要とされる。

*

『皆さんの速度ならポイントまでは十五分ほどです。ロストログアの受け取りと艦船の移動までナビゲートします』

シャリオ・フィニーノが定置観測基地から現在、目的地まで飛行している高町なのは、フェイト・T・ハラウン、八神はやてに告げた。

「はい。よろしくね。シャリー」

「グリフィス君もね」

フェイトとなのはが快諾した。

『はい!』

二人のナビゲーターが元気よく返事した。

「しかし、私達も今年で六年目か」

はやて達は九歳から時空管理局で働いているので六年と既に『ベテラン』と呼ばれてもおかしくない。

「中学も今年で卒業だしね」

フェイト達は今年聖祥大付属中学を卒業する事になっている。

「卒業後は今より忙しくなるかなあ」

なのはの言うように、この三人は中学校を卒業してからは高校に進学するつもりはない。

時空管理局の仕事の本業にしていくなのだ。

はやては元々両親がいなかったため、その手の選択肢に異議を唱える者はいない。

財政面でバックアップをしてきている元時空管理局提督であり、現在は地球で隠棲生活を送っているギル・グレアムは『与えられた時間を仕事だけでなくしっかりと楽しむ事を約束できるならば構わない』という条件をつけた。

フェイトの場合は家族全員が管理局員であるため、進路がそのようになる事に関してはハラオウン家全員反対を唱えたりはしなかった。ただし、グレアム同様に『仕事に忙殺されずに人生を楽しむという事が条件』がリンディ・ハラオウンからつけられていた。

この手のことで一番悩まされるのがなのはである。

彼女は、フェイトやはやてと違ってそこまで『魔法』の世界にどっぷり浸かる必要性がないといえない。

特に罪人扱いを受けて恩赦を貰った事もないので変に引け目になることもない。

高校に進学して掛持ちしながら業務に取り組んだからといって後ろ指を差されることはないだろう。

先の二人と違って、なのはに関しては揉めに揉めまくったのはいうまでもない。

リンディが仲裁を取り計らう中でやっと丸く収まったくらいだ。

しかし、なのはにも先の二人と同じく『条件』がつけられていた。

『気負わない事。時折は帰ってくる事。そして人生を楽しむ事』である。

保護者達がこのような条件をつけたのには理由がある。

それは『時の運行』を守っている仮面ライダー電王と仮面ライダーゼロノスを知ったことが大きな原因となっている。

彼等の存在によって、当たり前のように存在している『時間』が実

は脅かされたり護られたりしているものだと思ったからだ。

誰にも称賛されずに、日の目の当たらない所で戦っている者達の事を考えると護られている側にしてみれば『時間』を大切に扱う義務が生じると感じるのは不自然なものではないだろう。

まさに生き急ぎとは真逆の事である。

生き急ぎとは限られた時間を有効には使わずにいたずらに放置している行為といってもいい。

ここにいる三人だけでなく、保護者達も教わったのだろう。

ここにはいない別の世界にいる『仮面ライダー』に。

「あの時は揉めたなあ」

なのはは、頬を掻きながらその時の事を思い出していた。

「でも義母さん達があんな条件をつけてくるとは思わなかったよ。

私達そんなに生き急いでるようにみえたのかな？」

フェイトも思い出しながら呟く。

「多分、そんな風に見えたんやろなあ。アカンなあ折角侑斗さん等が命懸けで護ってくれた時間やのにそんな風に使おうとしてたなんて」

はやてもしみじみ考えてから苦笑いを浮かべながら反省する。

「そうだね。今度良太郎達に逢う時に、そんな生き急いでたら怒られちゃうもんね」

「良太郎さん。怒ったら怖いもんね……」

フェイトもなのはも野上良太郎の起こった姿を思い出して、少しブルツと震えた。

「そんなに怖いんですか？」

リインは野上良太郎を知らないため、怒った姿を知るはずもないので管理局のエースと呼ばれている二人が心底怯えたような態度を取ったので、はやてに訊ねた。

「そうやね。本気で怒った野上さんには多分やけど誰も勝てへんよ」

「へ？」

リインが間抜けな声を出してしまう。

主の言っている事が信じられないのだ。

「シグナムやヴィータちゃんでもですか？」

「良太郎はシグナムに勝った事があるんだよ」

「ほ、本当ですかぁ！？」

フェイトの言葉に信じられない、という表情をリンはしていた。

「うん。それは間違いないよ。私もはやてちゃんもその現場を見てるしね。それにヴィータちゃんは良太郎さんを怒らせたりはしないって心から誓っていると言ってたしね」

なのはが補足する。

「それにシグナムとフェイトちゃんは野上さんを巡ってのライバルなんやで」

リンには実を言うところの手の事は知らされていない。

リンに訊ねられる事もなかったからだ。

「ふええ。そうなんですか」

「は、はやて！」

「いずれはバレるんやからええやないの」

フェイトは顔を真っ赤にして抗議するが、はやては涼しい顔をしている。

「バレるってバラしたのは、はやてちゃんだよ……」

なのはがツツコミを入れる。

「自分のことを棚にあげて言わないでほしいよ。リン。はやてはね、桜井さんから貰ったカードを毎日一時間懸けて磨いてるんだよ」

「ちょっ……フェイトちゃん！それは内緒やって言うたのに……」

「いずれはわかったちゃうんだからいいじゃない」

自身の痴態(?)を暴露されて、はやては顔を紅くして睨むがフェイトは悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

「はやてちゃ……マイスターはやては、ユウトさんって人が好きなんですか？」

左肩に乗っかっているデバイスが無邪気に主に訊ねる。

「な、ななななに言ってるの！？リンー！わ、私と侑斗さんはそ

んな関係やあらへんよ！それに私の片思いやし……」

真っ赤な顔が更に真っ赤になって否定しようとするはやてだが、語尾がどんどん小さい声になっていた。

「二人ともそろそろ……ね？」

この二人がこういうやり取りをすると必然的になのはが仲裁役になつてしまう。

なのはは二人が純粹に一人の人間を想える事が羨ましいと思った。自分にも正直、そう想える人がいるのかどうかと訊ねられると「気になる人がいる」と答えてしまう。

『好き』か『嫌い』かの二択だと『好き』だと答えられる。

だがこの『好き』は、フェイトやはやてが一途に想い続けている原動力となつているそれとは明らかに違っている。

それにその人物は明らかに何かが変わったようにも思えた。

根拠はないし、そのような事を当人に訊ねたとしてもはぐらかされるのがオチだろう。

相手は自分よりもはるかに口達者なのだから。

「みんなは卒業後はどうなるの？私は教導隊の一員としてあちこち回る事になるんだけど……」

なのはは話題を切り替えると同時に自分の今後の凡その予定を告げた。

「私は長期の執務官任務を受ける事になるね」

フェイトも答える。

「私は卒業の少し前にミッドの地上にお引越しや。ミッド首都の南側で家族六人で暮らせる家。えーカンジのトコを探し中やねんけどな。決まったら遊びに来てな。二人とも」

「うん！」

「行く行く！」

フェイトとなのはが二つ返事で答える。

「リインも、はやてちゃ……マイスターはやてと一緒にお待ちしてるです！」

リンも笑顔で言う。

「あはは」

「そんな堅い言い方しなくても『はやてちゃん』でいいんじゃない？」

「う……」

何度も言い換えるリンがおかしいのかフェイトは笑い、なのはは呼びたいようにに呼べばいいのではと

打診するが、リンとしてはそれを甘んじる気はないようだ。

四人はそのような談笑をしながら、空を駆けていた。

*

北部定置観測基地では、護送隊のナビゲートをするためにグリフィス・ロウランとシャリオ・フィニーノがモニターに映る映像の変化を注意しながら見ていた。

「あれ？発掘地点と通信が繋がらない？」

シャリオが異変を口に出した。

「本当に？」

グリフィスが確認するように訊ねる。

シャリオはもう一度キーボードを叩きながら試みるが、結果は同じだった。

「本当だ……」

「一体どうなってるんだろ……」

グリフィスはシャリオが凝視している画面を見るが、『通信不能』と表示されていた。

またも警報が鳴った。

「今度は何？これってまさか……」

グリフィスが担当している場から鳴り響いており、席にモニターを戻ってみてみるとそこには見たことがない三人が映し出されていた。グリフィスは中央モニターに映し出す。

「もしかしてこれって……」
シャリオも映し出された映像を見て、驚愕の表情を浮かべていた。
そこに映し出されていたのは二体のイメージに一人の青色が目立つ戦士だった。

「もしかして最近噂になってる……」

「仮面ライダー……」

シャリオの続きをグリフィスが締めた。

*

目的地が視認できる範囲になると、四人はその光景を見て異変を感じた。

それは『楽しい談話』の時間の終了にもなる。

四人の表情が『少女』から『魔導師』になっていた。

現場上空に辿り着くと、発掘をしていた大学生二人が十体近くの楕円型の機械に襲われていた。

「現場確認。機械兵器らしき未確認体が多数出てます！」

「ん！」

リインが解説すると、はやてが頷いた。

「フェイトちゃん！救助には私が回る！」

「私は遊撃する！はやてとリインは上から指揮をお願い！」

「了解！」

なのは、フェイトが自身の役割を告げ、はやてとリインは了承してその場で散開した。

「おし！やるよリイン！」

はやては左掌に乗っかっているリインに呼びかける。

「はいです！」

リインは了承して両手を広げてそのまま、はやての胸元に飛び込んだ。

激突はせずに溶け込むようにして入っていった。

『ユニゾン・イン!』

はやての髪が色素の薄い色になり、瞳の色が青色となる。

右手には『騎士杖』であるシユベルトクロイツが握られていた。

「中継!こちら現場!発掘地点を襲う不審機械を発見!強制停止を開始します!」

なのはが北部定置観測基地へと連絡する。

『本部に連絡します!』

「お願い!」

シヤリオが返答し、フェイトは念押しに頼んだ。

「あ……」

「ああ……」

大学生二人は機械兵器の攻撃にもはや『最期』が来ると直感した時だ。

機械兵器が中央にある発射光が輝きだして、発射しようとした時だ。なのはが素早く着地して、右手を前に出す。

バリア系の魔法障壁を展開させる。

機械兵器が発射されたレーザーを見事に防ぎきる。

バシンと言うような音が鳴り響くが、その魔法障壁には破損はあるか亀裂一つ入っていない。

なのはが大学生二人を無事に守っているのを確認してからフェイトはバルディツシュ・アサルトを天にかざす。

「プラスマランサー!」

『イエッサー』

フェイトの左右にバチバチと稲妻が帯びた黄金の魔力球が数個出現した。

やがてそれは黄金の環状魔法陣と鍔やっつとなる。

「ファイアっ!」

フェイトの掛け声と同時に黄金の鍔は一直線に機械兵器に向ってい

く。

機械兵器は『避ける』という事を知らないのか全弾直撃する。

「大丈夫ですか？」

「は……はい」

「あれが何故襲ってきたかはわかります？」

なのはは助けた大学生二人に襲われた事情を訊ねる。

「わかりません。コレを運び出していたら急に現れて……」

大学生の一人が両手で抱えているバンドで止められている木箱をなのはに見せた。

『広域スキャン終了。人間はあの二名だけです！』

はやての内にいるリインが告げた。

「ん！」

はやてはその報告に頷く。

「あれは機械兵器……？」

『該当データはありません』

フェイトは腑に落ちない表情をしており、バルディッシュ・アサルトが短く眼前の敵が過去にも存在していたかどうかを照合した結果を告げた。

（当てたけど、倒した感触がまるでない……）

黄金の鎧は確かに機械兵器に直撃した。

だが、破壊したという実感がまるでないのだ。

何故そのように感じるかの答えは機械兵器自身がネタをばらしてくれるのを待つしかない。

『中継です！やはり未確認！危険認定破壊停止許可が出ました！』
シャリオが本部の指示を告げてくれた。

「了解！発掘員の救護は私が引き受ける！なのはちゃん！フェイトちゃん！思いつきりやってええよ！」

「了解！」

はやてがGOサインを送り、二人が承る。

機械兵器が何かを展開した。

足元に魔法陣が展開していないので、魔法ではないと思われるが似ているものだろうと推測しながら三人は凝視する。

『マスター』

「フィールドエフェクト？」

レイジングハート・エクセリオンが主の判断を仰ぐ。なのは

基本魔法防御四種の一つであり、『フィールド』とは範囲内で発生する特定効果（温度変化等）の発生を阻害する事による防御である。なのはが先程用いていた『バリア』系とは違い、展開範囲が広く効果によれば手も足も出せなくなってしまう厄介なものにもなる。

「様子見てワンショット！レイジングハート！」

『アクセルシューター』

なのはは機械兵器に向けてレイジングハート・エクセリオンを構える。

今から放つ一発を決め手とは考えず、機械兵器がどのような効果を持つフィールドを展開したのかを探るための一発だ。

ガシャンとレイジングハート・エクセリオンのヘッド付近のカバーがスライドしてガシャンと音を立て、蒸気を噴出しながら空になった薬莢を排出する。

「シュートオオオオ！！」

大きな桜色の魔力球から光線が走り先端には小型の魔力球が数個、機械兵器に向って飛んでいく。

機械兵器に直撃すると思われたが、展開したフィールド内に桜色の魔力球が侵入すると『球』としての形を保てなくなりやがて微粒子となって消滅した。

「無効化フィールド！」

なのはは展開したフィールドの正体を見極めた。

アンヌキワザルト
「AMF……。AAAランクの魔法防御を機械兵器が……」

フェイトはその現実を受け入れながらも、このようなものを制作した者がまともな輩ではないと本能的に感じた。

（はわわっAMFって言ったら魔法が通用しないってことですよ！

？魔力結合が消されちゃったら攻撃が通らないです！)

はやての内にいるリインが狼狽していた。

AMFはいわば魔導師を無力にする事さえ可能なフィールドであり、戦闘キャリアの薄いリインの言う事はしごく尤もな事である。

「あはは。リインはまだちっちゃいなあ」

はやてはうるたえるリインとは対照的に落ち着き払っていた。

(ええっ!?)

はやてが言う『ちっちゃい』とは身体的にという意味ではなく、精神的にという意味であり『幼い』とか『経験が足りない』という意味が含まれていたりする。

「憶えておこうね。戦いの場で「これさえやっとけば絶対無敵」なんて事はそうそう滅多にないんだよ」

なのはは真剣な表情でリインに伝える。

レイジングハート・エクセリオンはガシユンガシユンとカバーをスライドしながら音を立てて蒸気を発しながら空薬莢を二個排出する。フェイトのバルディッシュ・アサルトもカバーがスライドして内部に組み込まれたシリンダーが回転してガシユンと叩きつけるようにしてカバーが元の位置に戻った。

その動作を計二回行う。

「どんな強い相手にもどんな強力な攻撃や防御の手段にも、必ず穴はあつて崩し方もある」

はやてが解説を始める。

その間にフェイトを中心にして、黒い雷雲が出現する。

ゴロゴロゴロと雷の音が鳴り始める。

なのはは最寄の地面にレイジングハート・エクセリオンを向けて威力が小さい魔力砲を放つ。

地面が抉れ、いくつかの小さな岩となり桜色の環状魔法陣を帯びて浮上していた。

「魔力が消されて通らないなら、『発生した効果』の方をぶつければええ」

はやての言葉どおりに二人は『発生した効果』を目的とした魔法を繰り出そうとする。

「たとえば小石……」

はやてが例える。

「スターダストオオ」

なのはの方は発射態勢が整っていた。

「たとえば雷……」

更にはやてが例える。

「サンダアアア」

フェイトも同じ様に態勢を整えて、後は発射するだけだった。

「「フオールウウウー!!」」

なのはが環状魔法陣を帯びた小岩を、フェイトが魔力で発生させた雷雲から生じる雷を一齐に機械兵器に向って振り下ろした。魔力を帯びた小岩は隕石のように。

雷雲から降り注ぐようにしている雷は天の裁きのように。

機械兵器に触れ、その原型を歪めて機能を停止させた。

小岩に潰されて機能を停止したもののや落雷して内部メカがショートして停止したものなど様々な残骸となって転がっていった。

（ふえええ。すごいですう）

「二人とも一流のエースやからね」

内のリインが感心しているが、はやてにしてみれば慣れた後景であった。

なのはとフェイトの攻撃範囲外にいた機械兵器が向きを変えて離れようとしていた。

「追おうか？」

「ううん。ええよ。こっちで捕獲するから平気やで」

なのはが申し出てきてくれるが、はやては丁重に断った。

二人にばかり働かせて高みの見物というのが嫌なのだ。

（リイン。頼んでええか？）

（はいです！）

はやては内のリインに逃亡する機械兵器の捕獲を任せることにした。
（発生効果で足止め捕獲というところ……）

機械兵器対策を講じながらリインは使用する魔法を考える。

足元に三点の小魔法陣からなる三角形のベルカ式の魔法陣が展開される。

（こうです！！）

リインが発動すべき魔法を放つ。

逃亡を謀ろうとしている機械兵器にリインの足元と同じ魔法陣が出現して形を変えて動きを縛るような動きをする。

フリーレンフェッセルン
（凍てつく足枷！！）

機械兵器が氷漬けとなってその動きを停止した。

氷から噴き出る冷気が寒気を誘うが相手が機械なので反応はない。

「お見事！」

（ありがとうございますですう！）

なのはの褒め言葉をリインは素直に受け取った。

難が去り、護送隊の代表としてフェイトが大学生二人と掛け合っていた。

「これがそのロストログアですね」

「はい……。中身は宝石のような結晶体で『レリック』と呼ばれています」

わかる範囲で詳細を聞いているフェイトをなのはとはやては見ていた。

『……し……こちら……』

聞き覚えのある声なのは達の耳に入った。

「こちらアースラ派遣隊。シグナムさんですか？」

なのはは送信者の名を確認する。

『その声はなのはか？そちらは無事か？』

「機械兵器の襲撃があつたんですが……。まさかそつちも？」

『こちらは襲撃ではなかったがな。危機回避のため、既に無人だったのが不幸中の幸いだったが発掘現場は何もない。先程ヴィータとシヤマルを緊急で呼び出した。あと悪報と朗報の二つがある』

シグナムが『悪報』と言うからには相当悪いものだろう。

なのは、はやて、リインそして大学生との話が終わったフェイトは真剣な表情になっていた。

『まず悪報からだが、この次元世界にイマジンが一体いる。目的はわからん』

『イマジン』という単語を聞いただけで四人の表情は強張った。

出くわした場合は『交戦』ではなく『撤退』が魔導師達の暗黙のルールとなっている。

圧倒的に力量差がある者達なら迷わずこのルールどおりに行動する。それなりに戦える者達はよほど危機に迫らない限りは戦ったりはしない。

そのくらい『仮面ライダー』がない今の別世界^{こゝ}ではイマジンが脅威になっているのだ。

『そして朗報だ。そのイマジンと噂になっている青い仮面ライダーが交戦中との事だ』

*

Aゼロノスとプロキオンはクリケットイマジンと睨みあっていた。プロキオンは両腕をクロスさせてフリーエネルギーを用いてシヤキンと三本の鋭い爪を両手から生やす。

「レッツ、ゴー、バトルです！」

そのままクリケットイマジンに向っていった。

その速度は恐ろしく速い。

クリケットイマジンと間合いを詰めると、右フックを繰り出す。

しかし先に当たるのは拳ではなく三本の爪であるが。

ブオンという音が鳴り、クリケットイマジンはその場にしゃがんでから空振りになるがそのような音が鳴る時点でプロキオンの放った一撃は速い上に重たいのだという事を理解した。

「言葉遣いに騙されたぜ。テメエ、ガキの癖に随分と生意気な戦い方してるじゃねえか!!」

後方に下がってクリケットイマジンはフリーエネルギーで二丁の拳銃を作り出してから、構えて狙いを定めて引き金を絞る。

「!!!」

プロキオンはその場で高く跳躍するとその直後にフリーエネルギーの光線がクリケットイマジンに直撃した。

「ぐふう!!」

プロキオンの奇襲はこの攻撃のための布石ならば抜群のコンビネーションである。

跳躍したプロキオンはクリケットイマジンの後方に着地する。

Aゼロノスの右手には銃が握られていた。銃といっても完全に『銃』の姿をしているわけではない。

ナイフのようにも見える形状だ。

Aゼロノスの専用ツールであるデュアルガッシャー（以後：Dガッシャー）である。

Aゼロノスは空いている左手を腰元に添えているDガッシャーのパーツに手を添えてから外す。

そして、下にあるゼロガッシャーの先端に似たパーツに縦連結させてから拳銃の引き金と密接している側のグリップを握ってから引き抜いた。

フリーエネルギーによって『銃』としての機能を持つDガッシャーバレットモード（Dバレット）へと変わった。

左側のDバレットもクリケットイマジンに向ける。

そして引き金を絞る。

ガガガガンとフリーエネルギーの光線がたった一回引き金を絞る

だけで数発発射された。

右手のDバレットも人差し指を引き金に添えて絞る。

左と同じ様にたった一回、絞るだけで数発のフリーエネルギーの光線が発射される。

そのままAゼロノスはクリケットイマジンへと歩み寄る。

「いだっ！あだあ！いだだだあ！！」

クリケットイマジンの体から後ろに足を下げながら火花が飛び散る。Dバレットから発射される光線一発分の威力は仮面ライダー電王ガンフォームのデングツシャーガンモード（以後：Dガン）の弾丸一発の二分の一しかない。

つまり一発食らってもイマジンには決定的なダメージを負わせる事は出来ないのだ。

しかし、DバレットはDガンにはない利点もある。

それは連射性である。

Dガンは一回引き金を絞って一発しか発射されないが、Dバレットは一回絞っても数発発射されるのだ。

それでパワー不足を補っているわけだ。

クリケットイマジンは前方と後方を交互に見比べる。

「ええい！クソオ！二対一じゃ分が悪いぜ！だがなあ電王やゼロノスじゃねえテメエ等ポツと出に負けてやるわけにはいかねえんだよ！」

そう言いながら、両腕を水平に構えて引き金を絞る。

銃口から弾丸が発射され、立ち止まらずにその場で駒のように回り始める。

弾丸を避けながら、Aゼロノスとプロキオンは顔を見合わせて頷きあう。

「変身！」

プロキオンは全身を輝きだして、イマジンからフェレットへと姿を変えた。

クリケットイマジンはまだ回りながら乱射している。

Aゼロノスは跳躍してクリケットイマジンの頭上で逆立ちの態勢をとってから二丁のDバレットの銃口を向けて引き金を絞る。銃口から発射された光線は無数の雨のようにして降り注ぐ。

「ぐわあああああつ！！」

前面にしか注意がなかったため、頭上からは完全に死角となっていた。

「変身！」

プロキオンがフェレットからイマジンへと変えて、その場で軽く跳躍して腰に捻りを加えて左飛び回し蹴りを放つ。

右側頭部に直撃して、左へと飛ばされるクリケットイマジン。

地面に転がるがすぐに起き上がる。

「ユノさん！」

プロキオンが主に次の攻撃を委ねる。

頭上攻撃から無事に着地したAゼロノスは両腕を引いた状態でDバレットを手放す。

スーッと真っ直ぐに落ちるDガッシャーのグリップを順手に握る。

それだけでDバレットからDガッシャーダガーモード（以後：Dダガー）となる。

デンガッシャーやゼロガッシャーと違って組み替える必要がないのも先の二つにはない利点といってもいいだろう。

そしてその二本のDダガーのグリップを向き合わせてそのまま寄せて連結させる。

上下に刃があり、フリーエネルギーで少しだけ大きくなる。

Dガッシャーランスモード（以後：Dランス）へと切り替えてから、クリケットイマジンへの間合いを詰めて駆ける。

「せえいっ！！」

Dランスを袈裟に振り下ろして、火花を飛び散らせてから、

「はああっ！！」

右切上へとDランスで切り上げる。

相手に何かをさせずに繰り出した攻撃なのでクリケットイマジンは

防御をする間もなく、斬撃を食らう。

「ぐわあああっ!!」

Aゼロノスは間合いを開けるために後方へと飛びのく。中腰になって、振りかぶる。

そしてDランスを投げた。

Dランスは手裏剣のように縦回転しながらクリケットイマジンへと向っていく。

回転は次第に増していき、速度も上がる。

クリケットイマジンに回転する刃が触れる。

ガリガリガリガリと容赦なく刃が抉りながら宙を舞う。

DランスはそのままUターンしてAゼロノスの元へと向っていく。

Aゼロノスは右手をかざすとパシッとDランスを受け止めた。

火花を跳び散らせているクリケットイマジンを一瞥してから、Dランスを握った手を下ろして踵を返す。

「契約者のぞ……み……ぐうおおあああ!!」

肉体がダメージに耐え切れなくなり、クリケットイマジンに爆発を起こした。

プロキオンがAゼロノスに駆け寄る。

「やりましたね! ユノさん」

「うん。それじゃ帰ろっか」

Aゼロノスとプロキオンが無尽書庫へと戻る手筈をとろうとした時だ。

彼等の前方には、なのは達が交戦したあの機械兵器が群れを成して現れた。

「アレ全部壊さないと帰れないみたいだね……」

「うん」

Aゼロノスは向ってくる機械兵器を睨みながらDランスを分離してDダガーへと戻し、プロキオンも悲鳴のような声を上げながらも両腕から三本の爪を出現させていた。

*

第12管理世界。

生活するには問題ない場所であり、自然に恵まれて気候もよくて訪れる人間も決して少なくはない。

そのような世界に『聖王教会^{せいおうきょうかい}』がある。

中央教堂では一人の女性が宙に映っているモニターを見ながら、打ち合わせをしていた。

『ええ。片方は無事に確保しているのですが、もう片方は爆発で発掘現場ごと消滅^{ロスト}してしまっています』

「そうですか……」

女性は落胆するが、人命が下手に奪われていないだけマシだと思つて良しとする事にした。

『爆発現場はこれから調査と搜索を行います』

女性の通信相手はクロノ・ハラウンだった。

「クロノ提督。現場の方達はご無事でしょうか？」

『ええ。現地の発掘員にもこちらの魔導師達にも被害は何もありません』

「そうですか……。よかった」

クロノの言葉を聞き、女性――カリム・グラシアは安堵の息を漏らした。

『現場発掘員の迅速な避難は貴女からの指示をいただいていたからこそですね。騎士カリム』

「危険なロストログアの調査と保守は管理局と同じく聖王教会の使命ですから。名前だけとはいえ、私は管理局の方にも在籍させていただいていますしね」

カリムは聖王教会教会騎士団であり、時空管理局理事官でもある。

「こちらのデータでは『レリック』は無理矢理な開封や魔力干渉をしない限り、暴走や暴発はないと思われませんが、現場の皆さんには十分気をつけてくださるようお伝えただけですか？」

『はい。それでは……』

クロノは了承すると、通信を切った。

「ふう……」

通信が切れてモニターが消えると、カリムはどつと疲労感に襲われたのか両肩を撫で下ろした。

「騎士カリム。やはりご友人が心配でしょうか？」

カリムの背後から一人の修道女が声をかけた。

「シャツハ」

カリムは後ろを振り返りながら修道女の名を呼ぶ。

シャツハ・又エラ。

カリム同様。『聖王教会』に所属する修道女である。

「よろしければ私が現地までお手伝いに窥いますよ。非才の身ながらこの身に賭けてお役に立ちます」

シャツハは謙虚ながらも、自身の意思を表に出す。

「クロノ提督や騎士はやはり貴女の大切なご友人。万が一の事があつては大変ですから」

カリムはシャツハの言葉を聞きながら、抱えた不安が消えていくように感じた。

「ありがとうシャツハ。でも平気よ」

カリムはシャツハに顔を向ける。

「はやては強い子だし、今日は特に祝福の風はもちろんリインフォース守護騎士達ヴォルケンリッター

も一緒に、はやての幼馴染の本局のエースさん達も一緒にだとか」

カリムが根拠を打ち明ける。

「それは私の出番はなさそうですね。大人しく貴女のそばについているとしましょう。あと、お茶をお淹れしますね」

「ええ。お願い」

シャツハは恭しく頭を下げてから、望むことを告げるとカリムは笑顔で応じた。

第二話 「舞台表と舞台裏」(後書き)

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL AtSです!!」

ヴォルケンリッター達もまた機械兵器と交戦する。

無事に任務が完了し、転送ポートへと向う中で
機械兵器と戦っているAゼロノスとプロキオンを発見
する。

Aゼロノスはどのような対応をするのか？

第三話 「ファーストコンタクト」

第三話 「ファーストコンタクト」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。
感想を書いてくれている皆様。

前書きのコーナー。

何にしようか悩んでいます。

第三話 「ファーストコンタクト」

『仮面ライダー』

力なき者達には『希望』となる。

力持つ悪には『恐怖』と『絶望』が降りかかる。

そして自身が名乗るのではなく、他者に呼ばれた時に初めて価値を持つ『称号』でもある。

*

第162観測指定世界定置観測基地。

「発掘員の方は観測隊が無事に確保しました」

グリフィス・ロウランがマイクを片手に状況を説明していた。

「なのはさ……高町二等空尉達護送隊は妨害を避けて運搬中です」

シャリオ・フィニーノがモニターを見ながらアースラへと報告していた。

「あと、別区域で出現したイマジンは一体がロストしています。恐らく青い仮面ライダーが倒したと思われます」

グリフィスが締めくくるようにAゼロノスの事も報告した。

*

観測指定世界の軌道上に佇んでいる次元航行艦アースラ。

「はい了解。現場とアースラは直通通信が通らなくなっているから、シャーリーとグリフィス君で管理管制をしっかりとね」

エイミィ・リミエッタが報告を受けながらも、先輩としてアドバイ

スを送った。

『はい!』

グリフィスが即座に返事する。

『あ、現場の方にヴィータさん達が到着したようです』

そう言くと、モニターに映るシヤリオの姿が消えた。

「クロノ君。どう思う?この仮面ライダーについて……」

エイミーがグリフィスが送ってきた映像データをモニターに映す。

それはAゼロノスとプロキオンがクリケットイマジンと戦闘している映像だった。

「明らかに良太郎やモモタロス達、桜井侑斗とは別人だな。自身の火力不足を熟知しながら的確にパートナーイマジンと連携して戦っている。あの二組にはない戦法だ」

クロノ・ハラオウンが手を顎に当てながら、映像を凝視しながら分析する。

「確かに良太郎君やモモタロス君達のような派手さはないよね。それに桜井君のような豪快さもないしね」

エイミーが映像を見て思った事を口に出す。

「^{ウチ}管理局にスカウトするには極めて困難な存在だな。『電王』ではなく『ゼロノス』なんだからな」

クロノも六年前の際に仮面ライダーゼロノスを知っているため、映像に映っているのはタイプの『電王』ではなく『ゼロノス』に近いからそうように呼んでいる。

「さしずめ、『青いゼロノス』ってところ?」

エイミーが便宜上の呼称を決めた。

「そんなところだろうな……」

クロノはAゼロノスの変身者の心境を想像してみた。変身するたびに周囲の人間が変身者を忘れていく事。

しかし変身者自身は周囲の人間を憶えているというズレ。

その恐怖に常に向き合わなければならぬ覚悟。

並の人間では到底できない事だろう。

仮にスカウトをしても時空管理局には『青いゼロノス』に見合う代価を払う事が出来ないのは事実だ。

金銭や権力程度では到底対価とは呼べないだろう。

「エイミィ」

「わかってるって。青いゼロノスについて分析してみるよ」

エイミィがモニターに映っているAゼロノスについて分析を始めた。

*

「ひでえなこりゃ。完全に焼け野原だ」

騎士服姿のヴィータとシャマルがシグナムとザフィーラ（獣）と合流して、周囲を見回した。

彼女の言うように、巨大なクレーターが一つ出来上がっており建造物等はその機能を果たす事は永遠に叶わなくらいに破壊されていた。

「かなりの範囲に渡っているが、汚染物質の残留はない。典型的な魔力爆発だな」

シグナムがクレーターが出来た大まかな原因を告げた。

「ここまでの話を総合すると、聖王教会から報告・依頼を受けたクロノ提督がロストロギアの確保と護送を三人に要請」

シャマルが宙にモニターを表示して、シャリオとこれまでの出来事をおさらいを始める。

「平和な任務と思っていたらロストロギアを狙って行動しているらしい機械兵器が現れて、こちらのロストロギアは謎の爆発って流れで合ってるかしら？」

『はい！合ってます！』

シャマルが確認するように訊ね、シャリオが首を縦に振りながら肯定した。

「聖王教会といえば、主はやてのご友人の……」

「うん。多分騎士カリムからの依頼ね。クロノ提督ともお友達だし」

シグナムが『聖王教会』というフレーズから何かを思い出し、シャルが補足した。

ザフィーラが現場をじっと見たまま動かないヴィータに気付く。

「ヴィータ。どうかしたか？」

「ザフィーラ。別に何でもねーよ。相変わらずこーゆー焼け跡とか好きになれねーだけさ」

ヴィータの表情はどこか憂いを秘めていた。

「戦いの跡はいつもこんな風景だったし……。あんまり思い出したくねえことも思い出すしさ」

ヴィータの脳裏にはある出来事が甦っていた。

雪が降っている次元世界。

自分は瀕死の重傷になっている一人の魔導師を抱き上げて、必死に声をかけていた。

魔導師は息も絶え絶えになりながらも、自分の事を気遣ってくれていた。

普段なら鬱陶しいと思ってしまうが、この状況下でそんな風に思えるほど自分は非情ではなかったようだ。

主である八神はやて以外で涙目になったのはこれが初めてなのかもしれない。

白がメインカラーとなっているバリアジャケットは所々がくすんでいたり、血が赤いシミとなっていた。

その瀕死の重傷を負っている魔導師とは高町なのはだった。

「ヴィータ。何を怖い顔をしている」

シグナムが背を叩く事で、ヴィータは現実に戻った。

「リインが見たら心配するぞ」

シグナムはヴィータの頭を穏やかな表情で撫でながら気遣う。

それは『ヴォルケンリッターのリーダー』というよりは『八神家の家族の一員』という意味合いの方が強いと思われる。

「うるせーな。考え事だよ。あと撫でるな……」

ヴィータはぶすつとしながら返す。

「よし……。調査魔法陣展開！アースラと無限書庫に転送してね！」
『はい！』

シャマルはベル力式の魔法陣を展開しながら、シャリオに送った。

*

護送隊飛行ルートの四名はというと。

寄り道せずに荷物であるロストロギアを持って、空を駆けていた。

「えーと。もう一度確認するです」

なのはの左肩に乗っかっているリインが『夜天の魔導書』に記していた。

アンヌキワザルド

「AMFというのはフィールド防御の一種なわけですよ？フィールド系というのは……」

「基本魔法防御四種の内の一つだね。状況に応じて使い分けたり組み合わせたり、あと私達のバリアジャケットやリインの騎士服もバリアやフィールドを複合発生させているんだよ」

なのはが追加説明した。

基本魔法防御には『バリア』、『シールド』、『フィールド』、『物理装甲』がある。

『バリア』は攻撃を防御膜で相殺して柔らかく受け止めることを旨とする最も汎用性の高い防御。

『シールド』は攻撃と相反する魔力で固く弾く・反らす事を旨とする防御。

『フィールド』は範囲内で発生する特定効果（温度変化等）の発生を阻害する事による防御で、通常は複数の種類を重ねバリアやシールドの補強として使用するものである。

『物理装甲』は素材強度による物理的防御。つまり魔法を用いずに直接防ぐものである。

リインはサラサラと『夜天の魔導書』に記していく。

「AMFはフィールド系ではかなり上位に入るけどね」

なのはの言うように、フィールド内に入った魔法を無効化にするのだから下位であるはずがない。

「魔力攻撃オンリーのミッド式魔導師は咄嗟に手も足も出ないだろうね」

「ベル力式でも並の使い手なら威力増強は武器の魔力に頼っている部分が多いし、ただの刃物や鈍器やと潰すんは辛いんよ」

「フェイトとはやてはミッド式魔法、ベル力式魔法でもAMFを攻略するのは至難なものだと打ち明ける。

「でも、なのはさんやフェイトさんは簡単に……」

「リンが両手を広げてドカーンという表現をする。

「距離があつたし、向こうのフィールドが狭かったからね」

「なのはが先程の戦闘の事を思い出していた。

「さっきのやり方だと発動地点がフィールド外じゃないとダメなんだ」

「先程の戦闘でなのはとフェイトは機械兵器が発生させたAMFの外で魔法を発動させていた。

「囲まれたりしてフィールド内に閉じ込められたら結構ピンチだね。AMF内で魔法を発動するのは難しいから」

「仮に魔導師がAMF内にいた場合、フィールド内では魔法が結合しないため効果そのものを起こす事が出来なくなるのだ。

「そうなると、魔導師の基礎体力で勝負になる。

「飛行や基礎防御もかなり妨害されちゃうし、やり方はあるけど高等技術なんだ。リンは気をつけないと大変な事になるよ」

「なのはの説明にフェイトが補足しながらも、リンに忠告した。

「はうあ！？そうでした！リンは魔法がないと何もできないんです」

「リンがフェイトに忠告され、AMF内にいる自分を想像していた。

「いい機会だからその辺の対処と対策も覚えておこうね」

「はいです！あの、なのはさん」

「ん？なあにリン」

「電王さんやゼロノスさんだったらどうなるんでしょうか？」

リンが電王やゼロノスならばどのように対処するのか興味を持ったのか訊ねてきた。

「そうだねえ。良太郎さん達なら私達みたいに変に考える必要はないから、はやてちゃんと言った刃物や鈍器で直接潰すだろうね」

「それってAMFの中でもですか？」

「うん。良太郎さん達は魔導師じゃないからAMFの事なんて関係なく戦えるからできるんだよ」

「良太郎達は魔法とは違うエネルギーで戦っているからAMFそのものが効果がないんだよ」

「私等が知る限りでは『最強』やいうてもおかしいね」

なのはとフェイトの説明をリンは聞きながら、『夜天の魔導書』にメモしていく。

「リン。いい機会やから高町教導官に教えてもらうんやで」

「はいです！」

はやてが締めくくり、リンが元気よく返事をした。

*

ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラは飛行はせずに、足でその場を歩いて警戒していた。

現在の所は怪しい魔導師も機械兵器もイマジンも姿を現してはいなかった。

「そっぴやシグナム。一緒の任務って結構久し振りだな」

暇といえば失礼だが、無言でいる必要はないのでヴィータは口を開いた。

「そっぴだな。我々みな担当部署が離れてしまったからな」

シグナムはヴィータに言われるまで失念していた。

「あたしとシャマルは本局付きでザフィーラはもっぱらはやてかシヤマルのボディガード。ま、家に帰れば顔を合わせるし関係ねーけ

どな」

「確かに。緊急任務がない限り休暇には皆揃うしな」

ヴィータは自分達の状況を言い、シグナムは首を縦に振って腕組をして納得していた。

「しかし来年には引越しか。海鳴のじーちゃん、ばーちゃんともお別れになるなあ」

寂しそうにゲートボール仲間の老人達をヴィータは思い出す。

海鳴ではやて以外に出来た多分最初の『友達』だ。

「住所が変わるだけだ。今生の別れというわけではなからう。会いたいと思えば会えるさ」

シグナムは前向きに考えるようにヴィータに諭し、ヴィータは黙って首を縦に振る。

「ちよつと間が開いたらもう変身魔法でも使わねーと会えねーな。育たねえから心配される……。実年齢だけならじーちゃん達より上なんだけどな」

ヴィータは呟く。

「違うない」

シグナムも自身の掌を見ながら同意した。

ヴォルケンリッターは精神的に成長を遂げて外見が成長する事はない。

良い解釈をするならば『不老』ととれる。

ただし悪い解釈ならば『化け物』のレッテルを貼られても仕方がない。

実情を知る者ならばその手の事には触れたりほしくない。

しかし、ヴィータの友達の老人達やシャマルの井戸端会議の主婦達、シグナムが講師を勤めている剣道場の同僚などがそのような事を知っているはずがない。

だからこそ時が経って海鳴に訪れた際には外見をある程度は変えておく必要がある。

「あらー、じゃあ私がちゃんと調整して可愛く育った外見に変身さ

せてあげる」

シャマルが笑顔でヴィータにしてみれば出来るなら関わりたくない笑顔を向ける。

「……いい。自分でやる」

「私達は当分は服装や髪型程度で誤魔化せるだろうな」

ヴィータは否定し、シグナムは魔法を用いずに済む対策を言う。

「ザフィーラはいいよな。犬だから」

「……狼だ」

ヴィータはこの手の事を考えずに済むザフィーラを羨ましがる。

ヴィータは知らない。ザフィーラはザフィーラで苦労がある事を。

いつまでも子犬というのも怪しまれるため、微妙な大きさを考えておかなければならないのだ。

この手の事は先輩に当たるアルフに聞いてみようと考えていた。

「それにしてもミッドへの引越しは色々と不安も多いのよ。いい物件もまだ見つかっていないし……」

シャマルは左手を頬に当てながら、家庭関係で悩む主婦のような仕種をする。

家賃と部屋割り。

ご近所付き合い。

交通の便宜。

引越しの際に持っていく物等など。

「その辺はお前に任せた」

シグナムとヴィータは声を合わせて丸投げした。

「……」

ザフィーラが何かを感じたのか、顔を上げた。

「ザフィーラ。どうした？」

「森が動いた。座標を伝える。シャマル調べてくれ」

「うん！」

ヴィータの問いにザフィーラが短く答えながらも、シャマルに指示を出した。

『こちら観測基地！先程と同系と思われる機械兵器を確認！地上付近で低空飛行しながら北西に移動中。高高度飛行能力があるかどうかは不明ですが、護送隊の進行方向に向っているようです！狙いはやはり……ロストロギアなのではないでしょうか？』

「そう考えるのが妥当だな。主はやてとテストロッサ、なのはの三人が揃って機械兵器ごときに不覚を取るとは万に一つもないだろうが……」

「運んでいるものがアレなものね……」

シヤリオの報告を聞きながら、シグナムとシヤマルの表情は真剣なものになっていた。

「こつちで叩きましょう」

「ああ」

シヤマルの提案にシグナムは異論を唱えなかった。

どこか気負っているような雰囲気を漂わせているヴィータがいた。

「観測基地！守護騎士から二名出撃する！シグナムとヴィータが迎え撃つ！」

シグナムがヴィータの背を叩きながら告げた。

「あに勝手に決めてんだよ」

「何だ？将の決定に不服があるのか？」

「……ねーけど」

我に返ったヴィータはシグナムを睨む。

「こつちは二人で大丈夫」

「危機あらば駆けつける」

シヤマルは笑顔でザフィーラはいつもの表情でこれから出撃する二人を見送ろうとしていた。

「守るべきものを守るのが騎士の務めだ。行くぞ。その務めを果たしにだ」

「しゃーねーなあ！！」

シグナムの言葉にヴィータは表面上は面倒臭そうに答えた。

「主はやて。シグナムです。邪魔者は地上付近で我々が撃墜します」

シグナムは、護送隊のはやてにこれからの事を告げる。

「テストロッサ。手出しは無用だぞ」

「はい……。わかってます。シグナム」

ついでにフェイトに付け足した。

「なのは。オメーもだぞ」

「はあい。片手塞がつてるしね」

ヴィータがなのはにも釘を刺しておいた。

「二人とも、おーきにな。気をつけるんやで」

「はい」

「うん！」

はやての激励と気遣いの言葉に二人は頷く。

「シグナム。AMFの話は聞いてると思いますけど、気をつけてくださいね……」

「テストロッサ……。貴様、誰に物を言っている？己が信ずる武器を手にあらゆる害悪を貫き、敵を打ち砕くのがベルカの騎士だ」

シグナムはフェイトの忠告が杞憂だと言いながら、レヴァンティンを鞘から抜剣する。

「魔導師達みてーにゴチャゴチャやんねーでもストレートにブツ叩くだけでブチ抜けんだよー！」

ヴィータが強気な表情を浮かべながらグラーファイゼンを構える。

「リインもあたしの活躍、しっかり見てろよ！」

「はいです。ヴィータちゃん」

リインにもしかと見ておくように言う。

「「出撃！！」」

シグナムとヴィータが空を翔けた。

「機械兵器、移動ルート変わらず。あまり賢くないようですね」

「特定の反応を追尾して攻撃範囲にいるものを攻撃するのみのようです。ですが対航空戦能力は未確認です」

「お気をつけて！」

シャリオとグリフィスの実況を聞きながら、シグナムとヴィータは

宙で戦闘態勢をとっていた。

「未確認^{アンノウン}なのはいつものことだ。問題ない」

シグナムは特に驚く様子もなく告げながら、前を睨んでいた。

「……………」

ヴィータはあの時の事を思い出していた。

（あの日、なのはを襲ったヤツも未確認だった）

ヴィータの拳がブルブル震える。

（あたしもなのはもいつも通りのはずだった。問題なんて何もなければずだった）

グラーファイゼンを握る力が強くなる。

（誰もが認める無敵のエースがいつもどおりに笑ってたから。だから気付かなかった…………）

左手に小型の鉄球を出現させる。

（あんなのは…………あんな思いはもう二度と…………）

小型の鉄球が宙に浮いてクルクルと回転を始める。

血みどろになって息も絶え絶えになっているなのはの姿を思い出し、ヴィータの表情は険しくなる。

「だからまとめてぶつ潰す！！」

ヴィータは宣言と直後に鉄球を機械兵器に向って投げつけた。

シグナムもレヴァンティンを直剣のシュベルトフォルムから蛇腹剣状態のシュランゲフォルムへと切り替えて、機械兵器に向って繰り出していた。

ドオオオンという爆発音が響いた。

*

アースラ艦内のメインモニタールームでエイミィとクロノがAゼロノスの分析をしながらも、シグナムとヴィータの戦闘ぶりをモニタ

ーで見ていた。

「シグナムとヴィータはやっぱり凄いね。未確認でもモノともしない」

エイミイが無難な感想を述べた。

「合流地点までもう少しだし、そろそろアースラも回収の準備もしとこうか」

クロノは黙ったままだ。

「クロノ君。どうしたの？難しい顔をして」

「……ああ。この後のことを考えていた」

「あと？」

「それよりもこの青いゼロノスについて何かわかった事は？」

クロノは話題を切り替えてAゼロノスについての調査結果を聞く事にした。

「まずこの姿はバリアジャケットでも騎士服でもないね。正真正銘魔力以外のもので構築されてる。次にこのゼロノスの使っている武器は材質のサンプルでもあればもっとわかるんだろうけど、電王じゃなくてゼロノスが使っている武器と同じ材質と見ていいね」

電王、ゼロノスのデータがないためこれが初の『仮面ライダー』のデータとなる。

「A A Aランクの魔導師と照合しても凄いという言葉しか出ないね。全く劣ってないもん」

「今のところはイメージを倒すだけが目的みたいだが、今後どう出るかはわからないな……」

クロノは変身者が何かをやらかすのではないかと考える。

「でも何かをやらかすつもりなら既にやってるような気がするよ。

このゼロノスだって『時の列車』持つてるはずだし」

「それもそうだな……」

エイミイの言うとおりだと納得したクロノは任務に集中する事にした。

*

護送隊の四人はというと、空を駆けたままだった。

「シグナム達は大丈夫そやね」

「うん」

「シグナムもヴィータちゃんもカッコいいです」

「だね」

はやてとフェイトは現在戦っている二人の心配は無用だといい、リンはなのはと共にその二人の活躍ぶりを宙に出現させているモーターを見て喜んでいた。

「はやて。特別捜査官としてはどう見る？今回の事」

「んん？そうやなあ。あのサイズのAMF発生兵器が多数存在してるゆーんが一番怖いなあ。今回、この世界に出現してるんが全部であつて欲しいけど……」

はやては話を振られるものの、冷静に的確に特別捜査官としての意見を告げる。

「そうでないなら規模の大きな事件に発展する可能性も十分にある。特に量産が可能だったりするとなあ。執務官と教導官はどうなんやる？」

はやてはひとしきり言い終えると、今度はなのはとフェイトに訊ねた。

「私はあの未確認がロストロギアを狙うように設定されているのが気になるよ。獵犬がいるって事は狩人がいるって事だもんね」

教導官としての、なのはの感想は機械兵器の後ろにはロストロギアを狙う誰かがいるという事だ。

機械兵器がニワトリのように卵からポコポコ生まれてくるわけではないので、必ず製作者がいると踏んでいるのだろう。

「ロストロギアを狙う犯罪者……。技術者型の広域犯罪者は一番危険だね」

フェイトが執務官としての感想を述べる。

それから五分後に護送隊はヴォルケンリッターと合流した。

*

アースラ艦内ではクロノとエイミイが今後の事を話し合っていた。
「そういった事件になると管理局でも対応できる部隊はどれくらいあるか、人や機材が揃ったとして動き出せるまでどれくらいかかるのか、そんな状況を想像すると苦い顔にもなるさ……」

クロノは手を顎に当てて、難しい顔をしていた。

「なるほど。指揮官の頭の痛いところだね」

エイミイがため息をついてしまう。

組織の体制からしてお先真つ暗なのかもしれないのだ。

「はやても指揮官研修の最中だからな。一緒に頭を悩ませる事になるよ……」

「でもまあ、今回の事件資料と残骸サンプルはそのテの準備の貴重な交渉材料でしょ。事件がどう転ぶかわかんないのなんていつもの事だし」

「それはそうなんだがな」

プレシアテストロッサ

「なんとかなるよ。『P・T事件』も『闇の書事件』もその後の色々な事件の後も、みんな何とかしてきてるんだもの」

頭を抱えているクロノに対して、エイミイは前向きに考えるように促した。

*

なのは、フェイト、はやて、リインはヴォルケンリッターと合流して喜び合っていた。

任務もほぼ完了して、第162管理世界転送ポートへと向おうとしていた時だ。

『こちら観測基地！転送ポートへと向う進行ルートに先程の未確認

が出現。一つの箇所集まろうとしています！その数五十いえ百、に、二百です！！」

シャリオの報告にその場にいる誰もが目を丸くしている。

自分達に向って襲い掛かってきたのでもせいぜい十体くらいだ。

その二十倍が一箇所集まるなんて余程そこには何かがあるのだろうと考えるのは自然な事だった。

「そこには何かあるの？」

なのはが代表してシャリオに訊ねる。

『ちよつと待ってください……。あ、いました！多分ですけどその機械兵器は青い仮面ライダーを標的にしてるんじゃないかと思われます！！』

その単語にそこにいる誰もが心動かされたのはいうまでもないことだ。

正体不明にして神出鬼没。

イマジン現れる所必ず出現する謎の戦士。

『ハラウン提督からです。その青い仮面ライダーの救援に向うようにとの事です』

了解！

その場にいる誰もがその命令に従った。

*

見渡す限りの機械兵器。

一つ目も二百あると気持ち悪い。

「うえゝ。怖いですよ。ユノさん」

プロキオンが機能停止した機械兵器を爪から引き抜いてから踏みつけると、Aゼロノスに何とかしてほしそくに訴える。

「流石にあんなにたくさん相手するとなると気が滅入ってきそうだ

ね……」

そう言いながらもDランスを分離して、Dバレットに切り替えてからひたすら引き金を絞る。

銃口から放たれた無数の光線は機械兵器の腹部を貫いていく。貫かれて機能停止した機械兵器はバタバタと倒れていく。

Dバレットは引き金を一回絞る事で五発の光線が発射される。

それらは確実に四発は命中しているので一回で四体は機能停止していることになる。

「よぉーし！僕もやります！！」

主が頑張っているのに自分が怠けるわけにはいかないと感じたプロキオンは中腰に構えて、機械兵器に向っていく。

殴る。蹴る。投げ飛ばす。この三つでドオンともボオンとも音を立てて蹴散らしていく。

プロキオンの足元には機械兵器の残骸ばかりが落ちていく。

それでも前を見ると、減っていく気配がまるで感じない。

「……ユノさん！なのさん達がこっちに向ってきます！！」

プロキオンはモモタロスとは違うモノを感知する嗅覚を持っている。モモタロスがイメージの臭いを探る事が出来るのに対して、プロキオンは魔導師の匂いを探る事が出来る。

「どのくらいで来るかわかる？」

Aゼロノスが至近距離なのでDバレットからDダガーへと切り替えて、機械兵器の腹部を突き刺す。

バチバチバチツと音を立てて機能停止する。

「匂いの距離からして二分後です！」

そう言いながらも迫ってくる機械兵器を倒していく事はやめない。

「二分か……」

Aゼロノスがプロキオンの報告を聞いて、思案する。

恐らくこの機械兵器の異常な数は伝わっているはずだ。

そして自分達が戦っている事もだ。

そうなると時空管理局の魔導師である以上、救援に向ってくるのは

自然の流れといえる。

（正直救援してもらえるのはありがたいけど……）

Aゼロノスは本音としては救援はありがたいが、何かと面倒な事になる事も予測できていた。

（間違いなく職質（職務質問）を受ける事になるね……）

助けた見返りというわけでは間違いなく、そのような流れになるだろう。

プロキオンが爪で機械兵器を突き刺して、投げ飛ばして後方の機械兵器数体を誘爆させていた。

「そこの仮面ライダーさんとイマジンさん！！」

上空から声がしたので、Aゼロノスは顔を上に向ける。

なのはを始めとする魔導師陣営だった。

「どうしよう？」

プロキオンがAゼロノスの側まで寄る。

「こうなったら乱暴だけこの手しかない！！」

Aゼロノスは左手に握られているDガッシャーをダガーからバレットへと切り替えて、空へと向ける。

そして引き金を絞る。

無数の光線が空を昇った。

「ひゃあああ！！」

なのはは思わず、後方へと反射的に退がる。

救援に向おうとしたなのは達の前に一直線に無数の光が走ったのだ。

「なのは！大丈夫か！？」

ヴィータは気遣うと同時にAゼロノスを睨み、グラーファイゼンを構えていた。

シグナムもレヴァンティンを抜剣しようとしていた。

「当てる気がない？」

「何でそう思うん？ フェイトちゃん」

フェイトの呟きはやてが聞き逃さなかった。

「あの位置からなら確実に当てる事はできたのに、そうしなかった。威嚇かもね」

「私達を現場に近寄らせないようにする事？」

シヤマルの言葉にフェイトは首を縦に振る。

「でも、いきなり威嚇射撃するのはどうかと思うけど……」

なのはは乱暴な手だと言う。

「拒む理由があるのかもしれない……」

ザフィーラが推測する。

「それにしてもあの仮面ライダー……。ゼロノスに似てるなあ。とりあえずいきなり撃つてくるところからして、私等の救援を望んでないって事になるからしばらく様子見やな」

はやてはAゼロノスを全体をしたから上へと舐め回すようにして見ながら感想を述べながら、その場で待機を選ぶように皆に伝える。

「うん。そうだね」

なのはも首を縦に振って、Aゼロノスとプロキオンの戦闘を凝視する事にした。

救援に向ってくるアースラチームに向けて『威嚇』目的で光線を放ったAゼロノスは宙で留まっている様子を見てから、すぐに正面へと視線を向けた。

その間にもプロキオンが機械兵器を持ち上げて、膝に向って下ろして『へ』の字にさせていた。

「残り百体くらいかな……」

「やりますか？」

プロキオンは、なのは達がいるのでAゼロノスを『ユノさん』とは呼ばない。

「おいで！ プロキオンー！！」

「はい!!」

Aゼロノスはゼロノスベルトのチェンジレバーを右にスライドさせてゼロノスカードを抜き取り、裏返す。

青色のカラーから白色のカラーの面に変えた。

バイオリンで奏でているミュージックフォーンが流れる。

そして、クロスディスクに向かってゼロノスカードをアプセットした。
『シリウスフォーム』

ベテルギウスフォームの電仮面が消え、プロキオンがフリーエネルギー体となってAゼロノスの体内へと入り込む。

上半身に、白色がメインで裾に青色のポイントカラーがされている袖のないロングコート――プロキオンクロークが出現する。

両肩には三本の爪のような飾りが施され、両下腕にはプロキオンが用いていた武器であるプロキオンクロークが装着されていた。

プロキオンクロークの背部にはプロキオンの顔が出現しているが、これはデネブ同様に『飾り』だったりする。

そして電仮面にはミサイルの弾頭部分がAゼロノスのデンレールを無視して、中央に走り出して停止すると回転しながら六芒星状に展開して電仮面となる。

仮面ライダーANOTHERゼロノスシリウスフォーム（Sゼロノス）の完成である。

「はああっ!!」

Sゼロノスを中心に小さなクレーターが出来た。

タンタンタンとリズムカルに両足をその場で動かす。

そして……

「ゴオオオオオ!!」

プロキオンが主人格となっており、Sゼロノスはプロキオンクローを構えて機械兵器へと向かっていった。

「イマジンと一体化して戦うところまでゼロノスと同じなんて……」
はやては先程のフォームチェンジを目の当たりにして目を丸くしていた。

心なしかはやてはどこか落ち着かない様子だった。

「はやてちゃん。大丈夫？」

なのはがそんな様子のはやてを心配する。

「う、うん。大丈夫だよ。あのゼロノスは侑斗さんやデネブちゃんじゃないって事はわかってるて」

はやては笑みを浮かべて返すが、内心穏やかではない事をなのはは簡単に予測できた。

（はやてちゃんが一番気にしてるのは、ゼロノスの変身に必ず消費するゼロノスカードにおける変身者に対する記憶の消費……）
なのはは知っている。

桜井侑斗から貰った一枚のゼロノスカードを見ると、『懐かしさ』や『恋しさ』と同時に『決意』のようなモノが表情に宿っている事を。

（もし私の知っている人達がゼロノスカードを使っていたとしたら……）
なのははもしもの事を想像し、正直ゾツとする結果だった。

『変身者に関する記憶』を周囲が忘れる事を承知で使う変身者は怖い。

『忘れてしまう』という事すら忘れてしまう自分も恐ろしく感じた。
ゼロノスカードを使用する事に関してはどちらもが被害者であり、加害者でもある。

（ユーノ君だったらどういう風な事言うかな……）
今起きている事をユーノ・スクライアに言えばどのような返答が出るかをなのははSゼロノスの戦闘を見ながら考えていた。

機械兵器を蹴飛ばし、踏みつけ、寄ってくる場合は回し蹴りで機能停止させていた。

眼前に迫ってくる場合はプロキオンクローで突き刺す。

「うりゃああああああ!!」

これまでの戦闘でわかる事はSゼロノスは一度たりとも機械兵器に攻撃をさせていない。

攻撃を受ける前に全て機能停止させているのだ。

まさに『攻撃は最大の防御』という格言をやつてのけているのだ。

(あと二十五体。踏ん張ってプロキオン!)

「はい!!」

深層意識のユーノがSゼロノスに励ます。

それから十分後に残り二十五体の機械兵器もみな地面に転がる事になった。

「終わりました」

Sゼロノスはそう言いながら、チェンジレバーを右にスライドさせてゼロノスカードをまた裏返してベルギウスフォームへと戻す。

プロキオンとAゼロノスへと分離する。

直後に空の一部が歪んで線路が敷設されていく。

空間からAゼロノスとプロキオンに向つて三両編成の『時の列車』

であるANOTHERライナー(以後:Aライナー)が停車した。

一両目であるAライナー・ミサイルのドアが開いていた。

乗り込もうとするAゼロノスとプロキオン。

「ま、待って下さい!」

なのはが呼び止めた。

プロキオンが先に乗り込み、Aゼロノスは足を止める。

「あの、貴方は一体誰なんですか?」

なのはが単刀直入に訊ねてきた。

「ANOTHERゼロノス」

「僕、プロキオンです!」

なのはの質問にAゼロノスとプロキオンは素直に答えた。

「艦に戻るまでが任務じゃないの？気を抜いちゃダメだよ」

Aゼロノスはからかうようにして、なのはに告げるとAライナーに乗り込んだ。

ドアが閉まり、車輪が回り始めて走り出した。

仮面ライダーANOTHERゼロノスと高町なのはのファーストコンタクトはこうにして幕を閉じた。

なのはは知らない。

自分がフェイトやはやてのような運命に巻き込まれようとしている事を。

なのはは知らない。

Aゼロノスの正体が最も近い存在である事を。

第三話 「ファーストコンタクト」(後書き)

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL AtSです!!」

食事会に合流するために駆け足でアースラへと向う
ユーノとプロキオン。

その頃、クロノとヴェロツサはロストロギアや
Aゼロノスの事を語り合っていた。

盛り上がるアースラ艦内。

その中でユーノ、プロキオン、アルフ、シャマル、
ザフィーラも話していた。

第四話 「打ち上げ」

第四話 「打ち上げ」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入りおよびユーザー登録をしてくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

今回からはこの前書きで『作者が気になるキャラクター達』というものをやりたいと思います。作者の独断と偏見で選び、毒舌ありで紹介しますのでお目汚しになるかもしれませんがご了承ください。

旗本の方達(暴れん坊將軍 水戸黄門)

時代劇の悪党といえば代官に商人について武士である旗本でしょうね。

代官や商人は悪とはいえ、まだマシですよ。

自分の欲望に純粹なんですから。

でもこの旗本達というのは始末が悪い。

アホな割にプライドが高く、自信の境遇を他者のせいにして世の中逆恨みですからね。始末に終えませんよ。

第四話 「打ち上げ」

モニュメントバレーを髣髴させる荒野の中を三両編成のAライナーが線路を敷設・撤去の工程を繰り返しながら走っていた。

Aライナーはゼロライナーと同じく黒色をメインにしてポイントカラーを青色にしている。

一両目はネドケラトプスの先頭部になっているAライナー・ミサイル（以後：Aライナー）。

二両目は翼竜系のダルウィノプテルスが先頭部になっているAライナー・ガトリング（以後：ガトリング）。

三両目はT・REXの頭部がモデルになっているAライナー・マガジン（以後：マガジン）である。

Aゼロノスとプロキオンは二両目のガトリングに乗っていた。

Aゼロノスはゼロノスカードを抜き取ってゼロノスベルトを外す。

ゼロノスカードがシュウウウという音を立てながら消滅しながら、

Aゼロノスからユーノ・スクライアへと姿を戻す。

プロキオンも身体全体が光り出してイマジンモードからフェレットモードへと変身する。

Aライナーは『時の空間』を抜けて、真っ暗な部屋に抜け出た。

『時の空間』は穴を閉じてしまう。

プシュウウウウウと音を立てて停車した。

ここは司書長室から通じる地下格納庫である。

ここ existence を知るものは時空管理局の中でもごく僅かに限られている。

ガトリングのドアが開いて、ユーノとプロキオンが降りた。

プロキオンは専用席といわんばかりにユーノの左肩に乗っている。

司書長室へと繋がるエレベーターに乗る。

キュイイイインという音を立てて、昇っていく。

エレベーターが止まると降りて、自動で本棚が動いて司書長室へと

足を踏み入れる。

ガーッと本棚がスライドして元の位置に戻る。

「おかえりい。ユーノ」

アルフ（幼児）が出迎えてくれた。

「アルフ。僕の不在時に何かあった？」

「いつもの通りさ。クロノが訊ねてきたけど、何とか上手く誤魔化しといたよ」

「そっか。ありがとう」

「ありがとうございます。アルフさん！」

ユーノが軽く礼を言い、プロキオンは深々と頭を下げた。

「アンタは相変わらず礼儀正しいねえ。本当にモモタロ達と同じイマジンなのかい？はやてがおデブをイマジンなのかって疑った事あったけど、まさかあたしがそんな心境になるとはねえ」

アルフはプロキオンがイマジンである事を知っている。

もちろん、ユーノが何故Aゼロノスになったのかもだ。

「僕、イマジンですよ」

プロキオンはアルフに自身がイマジンだと公言する。

「わかってるって。でも、フェイトやなのは達には絶対に言っんじやないよ？」

「はい！アルフさん」

アルフとプロキオンの会話が終わりを迎えようとしていた。

「アルフ。ロッキー。そろそろアースラに向おうか？今から行けばいい時間になるだろうしね」

「「はい」」

アルフとプロキオンは子供のように返事した。

*

第162世界の衛星軌道上に停滞している次元航行艦アースラ。

「護送隊と『レリック』、先程本艦に収容しました。残念ながら爆

発点からは『レリック』やその残骸は発見できませんでした……」
クロノ・ハラオウンがモニターに映っているカリム・グラシアに報告していた。

『お気になさらずクロノ提督。事後調査は聖王教会でも致しますので……』

カリムが笑みを崩さずにクロノに労いの言葉を送る。

「確保したレリックは厳重封印の上で自分が本局の研究施設まで運びます」

『ああ。その件なんです、こちらから一人警護員を送りました。ご迷惑でなければ一緒に運んでいただければ……』

「ああ……。はい……」

カリムの含みのある言い方が気になるが、クロノは了承した。

ユーノ、プロキオン、アルフの二人と一匹はアースラへと転送されており、打ち上げ会場となっているレクリエーションルームへと向うために廊下を歩いていく。

「これがアースラ。広くて綺麗な所ですね」

プロキオンがキョロキョロしながら感想を述べていた。

「ロッキー。アンタはアースラに来るの初めてだったね？」

「はい。次元航行艦というものはたくさん見た事ありますが中に入るのは初めてです」

アルフの言うようにユーノの隣にいるプロキオンは時空管理局本局をあちこち回る事が多い。

そのため次元航行艦を見る機会は多いのだ。

「あれ？ユーノさん。誰か来ますよ」

プロキオンの言うように、向かいから一人の青年が歩いてきた。白いスーツに緑色の長髪をした長身の青年である。

「アイツ、どこかで見た事あるような気がするんだけどねえ」

アルフも会った事があるのだが名前が思い出せないようだ。

「アルフさん。思い出さないとダメですよお」

「わかってるんだけど二、三回程度だったらどうしても出てこないんだよねえ」

青年がこちらに歩み寄ってくる。

「スクライア司書長？」

「アコース査察官」

青年――ヴェロッサ・アコースから先に話しかけ、ユーノも応じた。

「ああ、やっと思い出したよ！ヴェロッサ・アコースだよ！本局の査察官！」

「正解。思い出してくれてありがとう。ハラウン執務官の使い魔のアルフさん」

ヴェロッサは笑みを浮かべて返す。

「あたしを知ってんのかい？」

アルフが目丸くしている。

「職業柄、一度会った人の事は忘れないようにしてるんだ。ん？そちらのフェレットはスクライア司書長の使い魔ですか？」

ヴェロッサがプロキオンに目を向ける。

「あ、はい。僕ユノさん、じゃなかったユーノ・スクライア司書長の使い魔でロッキーです！よろしくお願いします。査察官さん」

フェレットモードのプロキオンは世間では『ユーノの使い魔、ロッキー』として通している。

つまり『プロキオン』という本名を知らない者の方が多数なのだ。

「こちらこそよろしく。ロッキー君」

ヴェロッサが右人差し指を出して、プロキオンは小さな両前脚で掴む。

『握手』である。

「それでアコース査察官はどうしてこちらに？レクリエーションルームは逆ですよ」

「ああ。僕は義姉の頼まれ事を果たさなければならいんで打ち上げには参加できないんですよ」

「聖王教会からですか……。それはまた……」

ユーノもまた職業柄、一人の人間の身边を調査するのは得意分野になっている。

そのためヴェロツサの周辺は一通り把握していた。

「いえいえ。たまには義姉孝行しませんとバチが当たりますよ」

ヴェロツサはケラケラと笑いながら言う。

「バチ……ですか……」

ユーノは一瞬暗い影を落としたが、すぐに戻る。

「それではこれから知人と共に任務に行きますので失礼します。また機会があればゆつくりと話しましょう」

「ええ。そうですね」

ヴェロツサの誘いにユーノは笑顔で応えた。

（幼馴染を偽って動いている僕にも下るんだろうね。バチが……）
ユーノはそんな事を考えながら、アルフとプロキオンを連れてレクリエーションルームへと向った。

クロノがカリムの含んだ言い方を気にしながらも、警護員が待機している艦内応接室へと向っていた。

入ると、そこにはヴェロツサが思いつきり寛いでいた。

「やあ！クロノ君」

「ヴェロツサ！君だったか」

警護員が知り合いだとわかると、クロノの肩も軽くなっていた。その証拠に表情が柔らかくなっていた。

座っていたヴェロツサが立ち上がって歩み寄る。

「久しぶりだね。先の調査行以来だ」

「ああ。元気そうで何よりだ」

再会を祝するようにして、ヴェロツサとクロノは手を握り合う。

「今日はどうした？義姉君のお手伝いか？」

クロノが席に着きながら訊ねる。

「うん。カリムが君達を心配してたから……っていうのもあるんだ

けど」

ヴェロツサが習うようにして、席に着く。

「本音を言えば面倒で退屈な査察任務より、気の合う友人と一緒に気楽な仕事のほうがいいなってね」

「相変わらずだな。君は」

ヴェロツサの本音を聞き、クロノは苦笑する。

「そうしていると局でも名の通ったやり手とは思えないからかえって怖い」

クロノが紅茶が入っているカップを手にする。

「こつちが素なんだけどね」

ヴェロツサは苦笑いを浮かべていた。

「君と君の義姉君である騎士カリム。そしてはやてを加えた三人は局内でも貴重な古代ベルカ式の継承者で有用で稀少技能保有者。その上それぞれの職務でも優秀だ」

「確かにカリムは優秀だし、はやては色々凄い子だけど僕は別に、さ」

「謙遜を。ともあれ君が警護についてくれるのならありがたい。出る前にはやてに声をかけるか？」

「ああ。大丈夫だよ。お土産はもう届けてあるし」

ヴェロツサはその必要はないという感じで告げた。

「それとクロノ君。出る前にひとつ聞きたい事があるんだけどいいかな？」

「何だい？」

「さっきそこでスクライア司書長に会ったんだけどね」

ヴェロツサの表情は能天気なものではなく、『査察官』としての表情になっていた。

「ユーノがどうかしたかい？」

「彼ってどういう人なんだい？」

クロノはヴェロツサがどうしてそのような事を訊ねてくるのかはわからなかった。

「元フェレットもどきで『無限書庫』の司書長で、なのはの魔法の師匠でイマジン達に毒されて口が達者になった奴、くらいだけど、それが何か？」

「僕の印象とは違うなあっと思ってね」

ヴェロツサは紅茶を口に含む。

「君はどういう風に思ってるんだい？」

クロノの質問に答えるためにヴェロツサはカップをテーブルに置く。

「普段は温厚で人当たりのいい人だけど、肝心な部分は決して人にはさらけ出さない上に自分の事になると人を踏み込ませない壁を作っている人かな……」

ヴェロツサのユーノに対する印象にクロノは何も言えなかった。

クロノ自身、ユーノについてどのくらい知っているかと聞かれると返答に詰まってしまう。

言われてみたらわからない部分が多い。

休日はどういうに過ごしているのかとか。

趣味は何なのかとか。

高町なのはとの仲はどのようになっているとか。

「六年の付き合いなのに君に指摘されるまで考えもしなかったな……」

腐れ縁で六年なだけという事を改めて認識させられた。

レクリエーションルームではというと。

和洋中とありとあらゆる料理がギッシリと並んでいた。

「おお！すごいですねえ」

「肉がある！！」

「こんなに用意されたんですか？」

「ユノさん。コレ食べてもいいんですか？」

エイミィ・リミエッタが驚き、アルフが眼を輝かせユーノが調理し

たリンディ・ハラオウンに訊ね、プロキオンがユーノに食してもいいのかと聞いてきた。

「半分はアコース君からの差し入れよ。任務を終えたエース達ですって……」

そうなると半分はリンディが用意した事になる。

「艦長……じゃないリンディさんもすみません」

エイミィが未来の義母に頭を下げながら、自身もエプロンを着用する。

「ふふ。いいのよ。私も艦を降りてから平穏な内勤職員だもん。子供達のお世話してあげたいしね」

リンディは現在のライフスタイルを満喫していた。

「そうですか」

エイミィも料理の準備に取り掛かる。

「と、言ってるそばから……」

リンディとエイミィの顔を向ける方向に、前線に向っていた面々が入ってきた。

「ただいま戻りましたー」

八神はやてが筆頭になって、声高らかに叫ぶ。

「おかえり」

「おつかれー」

リンディとエイミィが労いの言葉をかける。

「フェイトー」

アルフが主であるフェイト・Ｔ・ハラオウンに駆け寄った。

「おお！なんだこの食事の量！？」

「すごいわねー」

テーブルに乗っている食事の量を見て、ヴィータとシャマルは驚きの声を上げていた。

「この辺はアコース君から」

リンディがテーブルに乗っている食事の実状を話す。

「あ、ロツサ（ヴェロツサの事）来てるんですか？」

「クロノ君と一緒に本局まで護送だつて」

はやてにしてみてもヴェロツサ来訪は予想外だったらしい。

エイミィが来訪目的を話した。

「お疲れ様です。義母さん」

「うん」

フエイトが抱きついているアルフの頭を撫でながら、リンディに労いの言葉をかける。

「ユーノ君、ロツキー君。三日ぶり」

「うん。なのは」

「はい！なのさん！」

ユーノと高町なのははハイタッチをする。

パンという掌同士がぶつかる音が鳴る。

ユーノとプロキオンにしてみれば三日ぶりではなく、さつき会ったばかりだがなのはは知らない。

「ロツサもクロノ君と一緒に会いに行ってもお邪魔かなあ……」

「あの二人、仲良しさんですもんね」

はやては男同士の友情に水を差すわけにはいかないと自粛し、シャルはその判断が妥当だと思った。

クロノとヴェロツサは艦内応接室ではなく、転送室へと移動していた。

「最近はどうだい？次元世界の方は？」

「主要地上世界と同じさ。芳しくない」

ヴェロツサの問いにクロノは答えるが、両者共に先程のような穏やかな表情はしていない。

仕事をするときの表情だ。

「『世界は変わらず、慌しくも危険に満ちている』で、旧暦の時代から言われている通りだ」

クロノは旧暦の格言を引用した。

「各世界の軍備バランスの危うさ。世界内での紛争や闘争。それぞ

れの世界が壊れないようするだけで手一杯さ」

「陸^{おか}も相変わらずだね。危険なロストロギアの違法搜索や不法所持にさらにはそれらの密輸問題。地上はまさにそういったことの舞台だからね」

人がいる限り、どここの場所にも平和はないと言いたくなるような内容^{内容}を二人は言う。

「破滅的な力を持つロストロギアはよからぬ輩の手に落ちればすぐさま争いの道具となる……」

「そして『秘匿級』のロストロギアともなれば戦いの道具として手に入る事が出来れば……」

クロノが切り出し、ヴェロツサが続ける。

二人の目の前には輝きを出している一つの石が嚴重に保管されていた。

人を魅了する光だ。

二人はそのように思ってしまった。

「世界の『バランスを崩す』どころじゃない」

「破滅に向って一直線……ってね」

クロノとヴェロツサは最悪の事を口に出した。

「そうやって滅びた世界はいくつもあるのに、それでも自分達を守るために力を求めなきゃいけない……」

「そういう気持ちもわからなくもないんだけどね」

「しかしそれでも……」

クロノとヴェロツサは複雑な表情を浮かべている。

余程の事でない限りは自衛手段として力を求めているからだ。それを一概に『悪』と言い切るほど自分達は立派ではない。

「それを防ぐために働かなきゃならない……だろう？」

「こういう仕事を選んだ以上はな……」

ヴェロツサとクロノは決意を秘めた眼差しを向け合っていた。

「検分はもういい。封印処理を頼む」

「はい。クロノ提督」

クロノはアーススタッフの一人であるルキノ・リリエに処理を命じた。

「検査担当が誰だか聞いてるか？」

「技術局のマリエルさんのチームらしいよ。ところでクロノ君。最近噂になっている青い仮面ライダーについてどう思う？」

「青いゼロノスのことかい？」

「青いゼロノス？」

ヴェロツサは話題を変えてAゼロノスの事を切り出し、クロノが応じた。

「ああ。今日の任務で姿が明らかになってね。僕が名付けたんだ」

「神出鬼没で正体は不明。目的はイマジンを倒す事、つまり『時の運行』を守る事と考えていいね」

「僕達の味方になると思ukai? はやては味方にはなってほしいと言ってるけど、乗り気ではなくてね」

「無理もないさ。管理局に引き込んでイマジンが現れる度にその変身者に出動要請していたら間違いなく管理局の財政は破綻するよ」

ヴェロツサはゼロノスの変身に用いる代価を知らされていないのか、味方にはなってほしい純粹に思っている。

対してクロノは味方になってほしいと思いつつも、そうなったら時空管理局の財政は破綻すると断言していた。

「財政破綻って……。クロノ君、大袈裟すぎない？」

「いや支払う代価がアレである以上、そうなっても不思議じゃないさ」

「一体何を代価にしてるんだい？」

ヴェロツサがクロノに早く答えるように急かす。

「記憶だよ。正確には『変身者に関する記憶』を僕達周囲の人間が忘れていくんだ」

「……。だからはやては乗り気じゃなかったし、クロノ君は味方

に引き入れた場合財政破綻をしてもおかしくないって言ったんだね」
ヴェロツサはようやく義妹や友人が複雑な表情を浮かべている事を理解した。

「良太郎が言うには忘却している以上、取り戻す事はできるらしいがあまり効率的とはいえない上に僕達ではどうしようもない手段だそうだよ」

クロノはかつて野上良太郎に訊ねた事がある。

その際に『時の列車』で過去に向えば忘却した記憶を取り戻す事が出来るらしい。

だが『時の列車』を所有していない時空管理局ではその方法は使えないし、忘却した人間を捜し当ててその都度、過去に向わせるなんて非効率にもほどがあるというものだ。

「つまり一度忘れてしまっただら……」

「事実上、不可能だろうね」

クロノは締めくくった。

「現在イマジンを倒す事が出来るのは青いゼロノスだけというのが余計に辛いね……」

「邪な企みを持つ偉い人は是が非でも引き入れようとするし、管理局の面子を過剰に保とうとする者は適当な罪をでっち上げて犯罪者同然に扱うかもしれないしね」

ヴェロツサとクロノはAゼロノスは管理局にとっても決して樂觀視できない存在だと言う。

Aゼロノスにとって最大の敵は半端な権力を持つ者の嫉妬やつかみだろう。

巨大な組織にとって一番の屈辱とはたった一人によって存在を虚仮にされることだ。

それから三分後に二人は転送室から出立した。

「アースラ本局直通転送ポイントに到着。クロノ君とアコース査察官転送室から無事出立！というわけでみんなは安心して食事を楽し

んでね」

レクリエーションルームではエイミイがクロノとヴェロツサが無事に
出立したと告げた。

その場にいる全員がテーブルに置かれている料理を我先にと手に
していた。

アルフは目当ての肉を手にして、かぶりついていた。

なのは、フェイト、はやての三人は「おつかれー」と言ってグラ
スを片手に乾杯する。

ユーノも皿に料理を乗つけていく。

その量は明らかに『無限書庫』で内勤している人間の量とは思えな
かった。

誰もがその量を見て目を丸くしていた。

「?どうしたの?みんな」

ユーノは気にせずに皿に盛り付けていき、口の中に放り込む。

「僕も食べまーす!」

プロキオンはユーノが盛り付けた皿の料理を食べていく。

その仕種は何とも可愛かったりする。

なのはやりインは目をキラキラと輝かせている。

ビクツと何か寒気を感じたのでプロキオンは手にしている料理を口
に含んでから専用席であるユーノの左肩に乗っかる。

「ユーノ君」

シャマルがグラスを渡してくれた。

「ありがとうございます。シャマルさん」

シャマルは笑顔で渡す。

（あの世界にいたって事は聞くまでもなくイマジンがいたのね?）
直後にユーノに念話の回線を開いた。

（ええ。イマジンはずぐに倒しましたがけど、その後の機械兵器があ
んなに現れて帰るのに手間取ったんですよ）

（そう）

（これで何枚目になる?）

ザフィーラ（獣）がシャマルの隣に寄り、念話の回線に入り込んだ。
（今月に入って三枚目です）

（ちょい待ち！アタシを抜きにして話を盛り上げるのはなしだよ！）
（僕もです！）

骨付きマンガ肉を持ったアルフも寄って、念話の回線に入り込んだ。
プロキオンはイマジンであるが契約者がユーノである為かそれとも突然変異かどうかはわからないが、『念話』という手段を使う事が出来る。

「ユーノ君？」

フェイト、はやての二人が会話を盛り上がる中、なのははユーノを見た。

プロキオン、アルフ、シャマル、ザフィーラに囲まれて何かを話している姿が見えた。

ただそれだけなのに、何故だろう。

（何でだろう……。同じ部屋にいるのにユーノ君が遠い人のように感じちゃうよ……）

なのはの胸中で言い知れない不安が渦巻いていた。

第四話 「打ち上げ」(後書き)

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL AtSです!!」

打ち上げが盛り上がるレクリエーションルームには
ユーノとプロキオンの姿はなかった。

なのはは胸中に過ぎる不安を解消するためにも
アースラ艦内を捜す。

する。

ユーノとプロキオンを見つけたなのはは心底ホッと
他愛ない会話の中でユーノもなのはも安らぎを得て

いた。

第五話 「夢に向かう者。夢を護る者」

第五話 「夢に向かう者。夢を護る者」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入りお呼びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

まずは作者の独断と偏見による気になるキャラクターから。

片山雛子(相棒シリーズ)

女性政治家であり、特命係にとっては『敵』に近い存在かもしれない。自分としては最も関わりたくない相手ですね。関わってもいい事はなさそうですからね。

それに、彼女のような政治家が存在できるのはある意味では平和な日本だからこそかもしれませんね。

物騒な国では即お陀仏ですよ。多分。

第五話 「夢に向かう者。夢を護る者」

次元航行艦アースラのレクリエーションルームでは同窓会的任務が無事に終了し、打ち上げとして盛り上がっていた。

「助けてください！ユノさん！」

プロキオン（フェレット）が愛らしい表情に涙腺を浮かべながら、ユーノ・スクライアに懇願していた。

「ロツキーくん」

「ロツキーちゃん 逃げちゃ駄目ですう」

いかにも触ってその毛並みを堪能したがつている高町なのはとリンがいた。

目がキラキラ輝いており、なのはの両手がわきわきと動いていた。

リンはサイズが小さいためか、抱き枕のようにしてプロキオンを堪能しようとしているらしい。

プロキオンがユーノの頭の上で身体を丸くして怯えている。

しかし、可愛い物好きにはそのような仕種すら心を揺さぶられる材料にしかない。

なのはとリンの瞳が更に輝いているように見えた。

「なのは、リン。ロツキーが凄く嫌がってるように見えるんだけど……」

ユーノは相棒が本気で怯えているようにも見えた。

その後景を周囲の者達は「また始った」というような表情をしており、誰も止めようとはしなかった。

「そんな事ないよ ね、リン」

「はいです。リン達はロツキーちゃんのフカフカな毛並みを堪能したいんです」

なのはとリンが嫌がるような事はしてないと言い張る。

「嘘です！なのさんもリンさんも僕がグツタリするまで離さないんですよ！僕には拷問です！フェレット権を尊重してほしいです！」

「フェレット権って何だよ……」

プロキオンの主張をヴィータはツツコミを入れるが、彼の耳には入っていない。

その主張を聞いたなのはとリンはというと。

「ロツキー君がそんなに嫌がってるなんて……」

「リンは自分の欲望に忠実すぎたです……」
結構効いていた。

（僕ももっと主張しておけばよかったかな……）

ユーノは物怖じせずに主張するプロキオンを羨ましく思いながら、自身がフェレットの姿で生活していた時の事を思い出していた。

邪な感情を抱く男性ならば代わってほしいと言っただろうが、ユーノにしてみれば地獄そのものだった。

いくらフェレットとして鳴き叫んでも全然聞いてくれない。

人語を話せば珍生物扱いになるため、話したくても話せない。

元は人間でフェレットに擬態しているだけなので、常識や倫理等は全て『人間』を前提として行動してしまう。

しかし、可愛いものの好きの人（主に女性）はその辺りの事を察してくれない。

とにかく無防備なのだ。

平気で裸になるし、スキンシップを図ってくるしユーノ自身抗議をしても一向に聞き入れてもらえなかった事が多数なので、今のプロキオンの気持ちは痛いほど理解できる。

プロキオンはイマジンとはいえ性格は子供でも、性別は『男』なのだ。

若い女性の裸を見て、喜ぶような好色家ではなくむしろ羞恥心が勝るといってもいいほど初心なのだ。

「ユーノ君」

「ユーノさん」

プロキオンに抗議されて落ち込んでいるのはとリンがこちらを見ていた。

様子から察するに、プロキオンの機嫌を直してほしいとの事だろう。
「まあ僕もフェレット姿のときは散々弄られたからね……」

女の子が落ち込む表情を見るのはあまり好きではないが、プロキオンの心情も理解できるので板挟み状態になっていた。

「ロッキー」

「何ですか？僕怒ってるんですよ。フェレット権が尊重されるまで戦うんです！」

頭上のプロキオンのご機嫌を伺ってみるが、絶賛不機嫌中だった。

「フェレット権ってなに？」

今度はフェイト・Ｔ・ハラオウンが訊ねるが、誰も回答してくれなかった。

「ロッキー。二人とも反省してるようだから許してあげたら？」

主にそのように言われると、プロキオンとしては従うかどうかは悩んでしまうところだ。

なのはとリインを見るプロキオン。

反省しているようにも見える。

（女の子はマシヨウドと司書の人が言ってたです。でも……）

自分のせいで二人の少女が落ち込んでいる。

それを冷たく放置できるほど、自分は大人なイマジンではない。

「なのさん。リインさん」

プロキオンが加害者の二人に声をかける。

「なに？ロッキー君」

「何ですか？ロッキーちゃん」

「フェレット権を尊重してくれるならいいですよ」

プロキオンが条件をつける。それを守るなら許すという事だ。

「わかった。ロッキー君の権利……フェレット権を尊重するよ」

「リインも尊重するです！」

二人の言葉をユーノとプロキオンを聞いている。

「ユノさん。お願いします」

「了解」

ユーノは頭上に乗っかっているプロキオンを両手で掴んで、なのはに差し出した。

なのははプロキオンを受け取り、凝視する。

「あゝ。やっぱり可愛いよお」

「本当ですう」

なのはとリインはプロキオンを見て、にへらと表情を緩める。

「なのは、リイン。ロッキーとの約束破っちゃ駄目だよ？」

「はゝい」

なのはとリインはプロキオンに嫌われないように、可愛がる事にした。

「フェレット権って何なん？」

八神はやてが訊ねるが、やっぱり誰も答えてはくれなかった。

プロキオンの背に乗っかっているリインはなのはにある事を訊ねていた。

『戦技教導隊』の事である。

「一般イメージでの『教官』は『教育隊』の方になるね。私達『戦技教導隊』の主な仕事は魔導師用の新型装備や戦闘技術をテストしたり、最先端の戦闘技術を作り出したり研究したり、それから訓練部隊の仮想敵として演習の相手。想定される敵の能力や陣形をシュミレーションするからいろんな飛び方や戦い方をするんだよ」

なのはは一口ジュースを口に含む。

「あとは預った部隊相手に短期集中での技能訓練……。これが一番教官っぽいかな。私はこれが一番好きなんだけどね」

なのはは大まかな説明を終えた。

「要はアレだな。戦時のエースが戦争のないときに就く仕事だ。技術を腐らせず有用に使うためにな」

「うーん。まあそんな感じではあるんですが……」

シグナムの端折った説明になのはは唸りながらも頷く。

「でも、うちの航空教導隊にも色んな年齢や経歴の人がいるんです

けど、みんな飛ぶのが好きなんですよね。一緒に飛ぶ人や帰り着く地上が好きでだから自分の技術や力で自分の好きな空と地上を守りたいって。そういう思いは一緒なの」

なのは語りながら笑顔になっていく。

誰もがその言葉に耳を傾けていた。

「なのはがずっと懂れていた夢の舞台だもんね……」

グラスを片手に持っているフェイトが付け足す。

「夢はまだまだこれからだね！」

なのはは右手を振り上げて、『もっと頑張る』という表れであった。

「勉強になりました！ありがとうございます。なのはさん！」

「どういたしまして」

リンはプロキオンから降りて、はやての元へと戻っていった。

そんななのはをユーノ、フェイト、ヴィータが見ている。

「なのはは本当に嬉しそうだけど、ユーノはやっぱり心配でしょ？」

あの事故の後、私達三人は付つきりだし……」

フェイトがジューズを一口飲んでから、苦笑を浮かべながら訊ねて

きた。

「あたしは心配じゃねー」

ヴィータはそっぽを向いて呟きながらチャーハンを一気に口の中に

放り込んでいた。

「まあ心配は心配だけど……。なのはが初めて空を飛んだときから

何となくは思ってたんだ」

シグナムと話しているなのはを見ながらユーノは言う。

「なのはには青い空がよく似合ってた」

ユーノは本人も無意識なうちに何か眩しい物でも見るような表情を

していた。

プロキオンが指定席であるユーノの左肩に飛び乗る。

ユーノは手にしたグラスをテーブルに置く。

「ユーノ？」

「少しアースラの中を散歩してくるよ。ロッキーは初めてだからね」

「そうなんだ。行つてらっしゃい」

「ありがとう」

ユーノは背を向けてレクリエーションルームを出ようとする。

「良太郎？」

一瞬だがフェイトにはユーノの背中がここにいるはずのない野上良太郎の背中に見えた。

「ん？どうしたの？フェイト」

「え、ううん。何でもないよ」

フェイトは両手をバタバタと振つて慌てて誤魔化した。

自動ドアが閉じて、ユーノの姿がなくなるとフェイトは自身が何故そのような事を口に出したのかわからなかった。

「フェイトお、いくら良太郎に会いたいからってユーノの背中を見てソレはねーじゃねーのか？」

ヴィータが呆れながらもフェイトをからかう。

「ち、違つよ！私もわからないんだけど何でかユーノの背中が一瞬良太郎の背中に見えたんだよ」

「？」

言っている側のフェイト自身もわからない事を聞いている側のヴィータがわかるはずがなかった。

アースラの廊下をユーノとプロキオンが歩いていた。

プロキオンは新しい事を知る事が楽しいのかキョロキョロと見回していた。

「ごめんね。プロキオン」

ユーノの謝罪にプロキオンは首を傾げる。

「いいですよ。居辛かったですか？」

「そうだね。覚悟はしてたけど見るのが辛くてね」

ユーノの表情は辛さを耐えているものだった。決して、幼馴染達の前では見せない表情だ。

「みんな。夢に向かっていているんだなって改めて思い知らされたよ…」

……」

「ユノさん……」

人は誰でも夢を見る権利があるし、叶える権利もある。だがそれは『時間』が存在しているからだ。

そして自分はその『時間』を護るために戦う事を選んだ。

同時に夢を見る権利も叶える権利も捨てた。

その事に後悔はない。

そもそも自分にはそんな事を後悔する『権利』もないのだ。

「『今』の僕があるのは『あの人達』のお陰だからね」

ユーノとプロキオンはガラガラの食堂に入る。

「もうすぐですね……」

「うん……」

プロキオンの言いたい事をユーノは理解できるので首を縦に振るだけだった。

レクリエーションルームでは話が盛り上がっていた。

今度はフェイトの番となっていた。

宙に映像写真を出現させていた。

フェイトと共に様々な子供が写っていた。

みな笑顔を浮かべているのが印象的だ。

「執務官の仕事で地上とか違う世界に行った時にね。事件に巻き込まれちゃった人とか、保護が必要な子供とか保護や救助をした後お手紙くれたりすることがあるの。特に子供だと懐いてくれたりして

……」

「フェイトちゃん。子供に好かれるもんね」

フェイトが詳細を説明し、なのはが率直な感想を述べた。

「あー！エリオ、しばらく見ないうちに大きくなったなー」

はやてが映像写真に映っている一人の少年の名前を口に出していた。

「あーこいつもその手の子供かー。エリオ・モンディアル六歳祝い？」

ヴィータが映像写真の下に書かれている内容を口に出して読み上げる。

「うん。色々な事情があつてちよつと前から私が保護者つてことになつてゐるの。法的後見人はうちの義母さん」

「元気で優しいいい子だよ」

笑顔でなのはが付け足した。

「フェイトちゃんが専門のロストログアの私的利用とか違法研究の捜査とかだと子供が巻き込まれてるケースが多いからなあ」

はやてが解説しながらも映像写真を見る。

後ろでシャルが「かわい〜」と言つていたりする。

「うん。悲しい事なんだけどね。特に強い魔力や先天技能のある子供は……」

フェイトがどこか悲しげな笑みを浮かべる。

今こうして写つてゐる笑顔になるまではそれなりの経緯があつた。

身体の傷は治す事は出来ても、心の傷は簡単には消えない。

こうして笑顔を向けている子供達とて完全にその傷が消えたわけではない。

心の傷を癒すには荒療治が長い目で見るかどちらかしかないだろう。自分は出生の事実を告げられたとき、荒療治で立ち直った側だ。でも、そこには常に見守つてくれた人がいた。

（私がこうして子供達と関わつたりお世話を焼いたりしてるのも良太郎が昔、私にしてくれた事から始つてゐるのかもね）

振り返つてみると、そのように考える事も出来ていたりする。

「だからお前はそれを救つて回つてゐるんだろっ」

「そーだよ」

シグナムとアルフ（幼児）が背中を押すように言う。

「子供が自由に未来^{ユメ}を見られない世界は大人も寂しいですからね」

フェイトは穏やかだが、強い覚悟を持った瞳で告げた。

「そういう意味ではお前は執務官になれてよかったのだろうな。試験に二度落ちた時はもう駄目かと思つたぞ。野上がいない間に合格

できてよかったな」

シグナムがフェイトをからかう。

「あうっ！シグナム。貴女はそうやってことあることに……。それに私は良太郎に言ったんです。絶対に諦めないってだから良太郎がいろいろがいまいが私が恥ずかしいと思うのは諦めた時だけです。それにシグナムこそどうなんですか？私の事をからかっていますけど、良太郎と会った時何も変わってないではその……」

フェイトが負けじと言い返す。

「……それもそうだな」

シグナムは自覚したようだ。

あれから六年。自分は何一つ変わっていない事に。

「その点、はやてさんはすごいわよね」

「上級キャリア試験一発合格！」

リンディ・ハラオウンが切り出し、エイミィ・リミエツタが締めた。

「私はそのタイミングとか色々と運がよかったただですから……」

レアスキル稀少技能持ちの特例措置もありましたし……」

「またまたあ」

エイミィがはやてに「ご謙遜を」というような口振りでからかう。

「凄い勉強してましたもんね」

「あの時から『試験』と聞くと心配で心配で……」

なのははその頃の事を思い出し、シャマルはまるで受験生を持った母親のような口振りだった。

ちなみにフェイトとシグナムはどんよりと落ち込んでいたが、誰もフォローには入らなかった。

「稀少技能保有者とかスタンドアロンで優秀な魔導師は結局便利アイテム扱いやからなあ」

はやては疲れたのか近くにあった椅子に腰掛ける。

「適材が適所に配置されるとは限らへん」

なかば愚痴に近い事をこぼしていた。

「はやてとヴォルケンリッターの悩みどころだなあ」

アルフがマンガ肉を食べながらファイラ（獣）にも別のマンガ肉を食べさせていた。

「でも、はやてちゃんの目標通り部隊指揮官になれば……」

「そのための研修も受けてるじゃない」

「準備と計画はしてるんやけどな。まだ当分は特別捜査官として色んな部署を渡り鳥や」

なのはがはやての目標を語り、フェイトがはやての近況を言う。

はやては現実を語りながら、リインに皿に乗っている料理を食べさせていた。

「はやてちゃん。色んな場所に呼ばれちゃうから、お友達とかできづらいのがねえ」

シヤマルは、はやての人間関係に『友達』と呼べる人種が少ない事を懸念していた。

『渡り鳥』と自称するだけあつて、はやて達は『巣』と呼べる腰を落ち着けるようなところがない。

メリットとして、様々な人脈を獲得する事は出来る。

デメリットとしてはその付き合いが『広く浅く』になってしまったため信頼関係を築き上げるのにかなりの時間を要する事になる。

「いや友達は別に。もう十分に恵まれてるし」

シヤマルの懸念をはやては्यानわりと流す。

「でも経験や経歴を作ったり人脈作りができるのはいいことですよね」

「まあ確かに」

フェイトの台詞に焼き鳥を食べているシグナムは同意する。

「陸士部隊は海や空と違って部隊ごとの縄張り意識みたいなもんが強いから、その辺を肌で感じてみるとええってクロノ君も教えてくれたしな」

はやてはリインに料理を食べさせる。

「まあ部隊指揮官はなったらなっただで大変そーやし、どこかで腰据えて落ち着けたらそれはそれで……ゆー感じやね」

はやてはおぼろげながらも自身の未来を語っていた。

「落ち着ける場所。見つかるといいよね」

「私も二人に追いつかなあ」

なのはが希望先が叶う事を願い、はやても感謝を込めて笑顔で返した。

「ユーノ君はどう？つてあれユーノ君は……」

なのはが今度はユーノの近況を聞こうと思っていたのだが、そこには当の人物はいなかった。

ユーノとプロキオンは食堂ではなく、個室を覗いていた。

「ここがアースラでの個室だよ。ほとんど寝るだけ部屋だけどね」

「寝るだけ部屋？」

聞きなれない言葉にプロキオンは首を傾げる。

「寝る以外にはここに戻る事がないから寝るだけ部屋って僕は呼んでる」

ユーノが解説すると、プロキオンは納得する。

「次は転送ポートへと行こうか」

「はい！」

特に急がない足取りでユーノとプロキオンは艦内見学を続行していた。

なのははレクリエーションルームを出て、単身ユーノとプロキオンを捜していた。

アースラは広いとっても迷路ではない。

それに勝手知ったる何とやらであるため、どこに何があるかは大まかに把握している。

（ユーノ君……）

なのはは言い知れない不安のようなものがあつた。

この不安は割と前から時折あつた。

（いつからだろ……。ユーノ君が遠い人のように感じるようになった）

たのは……)

今まではいて当たり前前の存在だった。

自分が困った時、いつでも相談に乗ってくれた。

『無限書庫』は自分にとって心休まる場だった。

なのはがユーノの事を気になりだしたのは、自身が重傷に遭った時だ。

あの時、ユーノは自身の責任のようにして責めていた。

「僕が魔法の世界に巻き込みさえしなければ、こんな目に遭わずにすんだのに」と言っ

まるで『償い』のようにして、彼は自分のリハビリに付き合ってくれた。

自身が完治してからもユーノの『自分を責める』という姿勢は変わらなかった。

その度に「気にしていない。自分を責めなくていい」というような事を、なのはは言う。

ユーノはその度に笑みを浮かべて、お茶を濁すような言葉を吐く。そして結果は変わらない。

(ユーノ君。やっぱり今でも気にしてるのかな……。アレは私の責任なのに……)

自分が重傷に遭った事に、ユーノに責任はないといえない。

ユーノの周りに『変化』を感じるようになったのも、完治してからだろう。

食堂に入るが、誰もいない。

それは目に見える『変化』ではなかったので、すぐにはわからなかった。

ユーノが『変わった』と感じたのは今から一年前のあの二つの出来事だろう。

一つは五年に一度行われる時空管理局主催の魔法戦競技会『MAGILING VALETUDO《マギリングヴァーリトウッド》』に出場していた事である。

参加資格は年齢制限なしではあるが、魔導師ランクに制限があつて下は『ランクなし』からで上はA^{エープラス}までとなっている。

ユーノの魔導師ランクはAだったので、参加資格はある。

ユーノが参加する事になったと聞いたとき、なのはは驚いた。

その手の事に積極的にならないユーノが何故？と真っ先に思つたくらいだ。

結果としてはユーノが優勝した。

幼馴染とその仲間達も観戦しており、誰もが祝福の声やら宴会やらを催そうと企んでいた。

なのはも労いの言葉をかけようと思った。

その時、なのはを見た。

優勝者の顔には何の感情も入っていないことを。

まるで優勝した事に、感動も安堵もない、どうでもいいというような投げやりな表情をしていた。

その時、なのははユーノが『変わった』と確信した。

（その後からだっけ。ユーノ君が行方不明になって、戻ってきた時にはロッキー君がいたんだよね……）

もう一つはユーノが発掘の仕事に携わった際に行方不明になった事だろう。

二ヶ月近く音信不通になっており、もしくは死亡したのではないかとまで囁かれた事もあった。

なのはは仕事に取り組みながら、ユーノが無事に帰ってくることを願っていた。

ユーノが無事に帰還してすぐだろうか。彼が『変わった』と思えたのは。

以前のような暗さがなくなったのはいいが、何かを決意したように思えた。

何を決意したかはわからないが、そして現在に至るというわけだ。

「あ！ユーノ君！ロッキー君！」

なのはが声を上げると、艦内見学をしていたユーノとプロキオンが

手を振ってくれた。

なのはと合流したユーノとプロキオンは二人と一匹のパーティ編成で歩いていった。

「そうなんだ。ロッキー君にアースラの中を見せてあげてたんだあ」

なのははユーノからレクリエーションルームから抜けた理由を聞いて納得していた。

もちろん、それは建前である。

本当は居辛かったなんて事は口が避けても言えない。

「はい！いつも本棚ばかりだから凄く新鮮で面白かったです！」

プロキオンは無邪気にそのように言う。

建前が始まりであっても物事を純粹に楽しめるのがプロキオンの長所である。

「よかったねロッキー君。でもそれなら私も一緒に行きたかったなあ」

なのはは不満をこぼしながらちらりとユーノを睨む。

「でも、なのは。夢中で話してたじゃない？話の腰を折る気にはなれなかったからね」

「む」

ユーノの最もな言い分なのはは頬を膨らませて唸って抗議する。

そんな仕種を見て、ユーノは笑みを浮かべる。

「あ、そうそう。ユーノ君は最近どうなの？」

「どうって？仕事の事？プライベート？」

「うーん。お仕事もだけどプライベートも知りたいかな」

「仕事は暇か忙しいかで言えば忙しいね。クロイノの資料請求は相変わらずスタッフ泣かせだし、プライベートっていつでも休みの日は本を読んだり、学会に提出する論文書いたり、なのはと出かけたりとするくらいかな」

なのはは聞き終えると、ユーノの両肩を掴んでいた。

「ユーノ君！」

「は、はい」

思わぬ迫力に慙慙に返してしまふ。

「私が言うのも変かもしれないけど、もつと遊んだ方がいいと思うよ！ユーノ君、このまんまじゃ寂しいお爺さんになっちゃうよ！？」

なのはは勝手に未来を予想しているが、何故か疑問になっていた。

「なのは。僕の未来を想像するのはいいけど、何で疑問形になっちゃうの？」

「だってえ、ユーノ君、本当に『お爺さん』になれるのかどうか心配で……」

「僕は桃子さんや土郎さんじゃないから『お爺さん』になるよ」

「本当？」

なのはがずいといと顔を寄せる。

その目には『疑い』が籠っていた。

「私達がお婆さんになっても、ユーノ君はお爺さんになりそうにないような気がするんだよね……」

「根拠は？」

「うーん。私の勘じゃ信用できない？」

「魔法がらみでない、なのはの勘はどうもね」

思いつきり疑っていた。

「ひどいよ！ユーノ君」

なのはは両手を高くかざして『怒ってます』というような仕種を取るが、ユーノにはそれが微笑ましく思えてしまふ。

そんなユーノを見たなのはも笑顔になっている。

（最初はこの笑顔を守りたいから強くなりたいてって思ってたんだっけ……）

今は違う。

今は『なのはだけ』の為に戦っているわけではないとハッキリと言える。

今は『時の運行』を護る為に戦っている。それがその世界に住んでいる人々を護る事になると信じてた。

「ユーノ君？」

「ん、何？なのは」

「どうしたの？ジークと私見てたけど顔に何かついてる？」

「いや、何でもないよ」

ユーノは腹の内を探られるのを避ける為に誤魔化した。

「お休みできたらさ。また海鳴においでよ。翠屋のケーキご馳走するよ」

なのはは、ユーノに休暇が出来たら海鳴に来るように促す。

「そうだね。久しぶりに食べたくなってきたよ」

「僕も食べたいですう」

「うん。ロッキー君も来たらご馳走するからね」

プロキオンが純粹に喜ぶ姿を見て、なのはとユーノも笑みを浮かべていた。

二人と一匹はその後談笑しながら、レクリエーションルームへと足を進めた。

*

クロノ・ハラオウンとヴェロツサ・アコースは時空管理局本局の廊下を歩いていた。

「クロノ君。君から見てどうだい？君が見守ってきたエース達は？」

「……なのはやはやて達の事か？今更僕が語る必要はないさ。それぞれ優秀だよ」

ヴェロツサの質問に対して、クロノは「何を今更」というような表情をしていた。

「しかし三人ともまるで申し合わせたように技能と能力がバラけるよね」

ヴェロツサが件の三人に関して口を開く。

「稀少技能と固有戦力持つて支援特化型で指揮能力を持ち、仮面ライダーゼロノスとファーストコンタクトをした経歴がある八神はや

て特別捜査官」

ちなみに武装隊では一尉扱いである。

「法務と事件捜査担当。多様な魔法と戦闘力で単身でも動き、仮面ライダー電王と出会い最初に戦闘した経験を持つフェイト・T・ハラウウン執務官」

はやての次にフェイトのことを語るヴェロツサ。

フェイトが電王と戦闘した事は今のフェイトにしてみれば閉まっておきたい『若気の至り』だったりする。

「部隊メンバーを鍛え育てる事が出来て、こと戦闘となれば単身でも集団戦闘でもあらゆる状況を打破してみせ、人類に対して友好的なイマジンと最初に接した『勝利の鍵』高町なのは二等空尉」

最後になのはの事を語って終えた。

「三人揃えば世界の一つや二つ軽々と救ってくれてみせそうだなってさ。かの三提督の現役時代みたいに」

「夢物語ではあるがな。それに今、管理局われわれは次元犯罪者だけを相手にしているわけにはいかないからね。本当に夢物語だよ」

「イマジンかい？」

クロノが途端に真剣な表情になり、ヴェロツサも釣られて同じ表情になる。

「ああ。奴等は次元犯罪者よりずっと性質が悪い。個人の戦闘能力が魔導師でいうAAA-だからね」

それだけでまともに対処できる存在が限られてくるというものだ。

「でも、そんな夢物語を現実にくれそうな存在があるのも確かだ」

「仮面ライダーかい？」

ヴェロツサの一言にクロノは首を縦に振る。

「彼女達と彼等が手を取り合えばそれこそ本当に夢物語が実現できそうだけどね」

クロノが締めくくった。

「クロノ君はやっぱり優しいお兄ちゃんだねえ」

「なんだそれは……」

ヴェロッサのからかいにクロノは苦笑するしかなかった。

（仮面ライダー……青いゼロノスもその部類に入るみたいだし、少し調べてみようかな）

ヴェロッサはクロノと共に歩きながらもAゼロノスの単独調査に取り掛かることを決意した。

こうして同窓会的任務は幕を閉じた。

第五話 「夢に向かう者。夢を護る者」(後書き)

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL AtSです!!」

はやての研修先近くの温泉へと旅行に向うのは達。

空港で爆発が起こる。

少女を助けたのはだが、その前にイマジンが出現する。

そのイマジンを一機の青い装甲車が撥ね飛ばした。

第六話 「G・W。二度目の出会い」

第六話 「G・W。二度目の出会い」（前書き）

いつも読んでくれている皆様。

お気に入りお呼びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

まずは作者の独断と偏見によるキャラクターから。

タンブラー・バットモービル（バットマンビギンズ、ダークナイト）

キャラクターではないですけど、すごく魅力的な車なのでここで紹介します。

外見は今までのバットモービルとは大幅に違いますが、その走りっぷりには完全に虜になりましたね。

初心者でも玄人でもプリ ス以上に信頼できる車かもしれませんね。

第六話 「G・W。二度目の出会い」

次元航行艦アースラのレクリエーションルームではというと、これから訪れる黄金週間……ゴールデンウィークの予定で盛り上がっていた。

ミッドチルダにもゴールデンウィークはあり、彼女達は管理局員兼学生であるため楽しむ権利があるといえはある。

「あ、そや！二人ともゴールデンウィークの連休！」

その話題を切り出したのは八神はやてだった。

「はやてちゃんの研修先の近くだよね？」

「お休みの申請、出してあるよ」

高町なのはが目的地の確認をし、フェイト・T・ハラOWNがそのための手筈も整えていた。

「ホテルはもう取ってあるからな。アリサちゃんやすずかちゃんも来れたらよかったんやけど……」

はやては宿泊先の手続きを完了しており、アリサ・バニングスや月村すずかが来れない事には残念がっていた。

「ユーノ君もー」

なのはがユーノ・スクライアも辞退している事に不満をこぼしていた。

「まあ女の子達でつて……」

「ごめんなさい。なのさん」

ユーノが当たり障りのない言い訳をしてプロキオン（フェレット）が深々と頭を下げた。

「ごゆつくりどうぞ」

「私達も緊急任務がなければ途中からでも合流します」

「あたしは途中参加ー」

ヴォルケンリッターやアルフ（幼児）も正規の参加というかたちではないが、余裕があれば参加すると表明した。

その話題で賑やかになっていき、リンディ・ハラウンやエイミ・リミエッタはその後景を微笑ましく見ていた。

*

四月二十九日。

ゴールデンウィークに突入しており、ミッドチルダでごく一般の家庭を過ごしている面々は思いっきり楽しもうとしている。

『無限書庫』の司書長室ではユーノとプロキオンが旅支度をしていた。

「ユノさん。食糧とテントは全部Aライナーに積めました」

地下格納庫で荷物を積み込んだプロキオン（イマジン）が司書長室へと戻ってきた。

「ありがとう」

ユーノは自身が『無限書庫』を離れている間の事を資料にしていた。「あたしも途中から参加する事になってるけどさ、アンタ達本当に行かないのかい？」

アルフが最後の確認として、ユーノとプロキオンに訊ねる。

彼女は今日、ユーノとプロキオンが何処に行くかは知っている。

「うん。行くつもりはないよ」

「ごめんなさい。アルフさん」

ユーノは即答し、プロキオンは頭を下げる。

「コレ。僕が留守中にトラブルが起こったときの対策を資料にしたからみんなに渡しておいて」

ユーノが作成した資料を紙面にしてアルフに渡す。

一部しかないところを見ると、「後で刷っという」という意味合いがある。

「りょーかい」

アルフが受け取り、司書長室にあるコピー機で印刷する。

ガガガーツと音を鳴らしながら、コピー機が紙を刷っていく。

「それじゃ行ってくるよ」

「行ってきます。アルフさん」

プロキオンは全身を輝かせてフェレットモードになってユーノの左肩に乗った。

ユーノは本を一冊、本棚に入れる。

それが起動キーとなっており本棚が左にスライドして地下の格納庫へと通じる通路が出現する。

ユーノとプロキオンは通路を通り、地下格納庫へと一直線に向うエレベーターに乗った。

地下格納庫には三両編成の『時の列車』であるAライナーが発車準備を完了していた。

ユーノとプロキオンは一両目のAライナー・ミサイルに乗り込んでコントロールーとなっているバイク――ANTHERホーン（以後：Aホーン）に跨って、グリップを回してアクセルを噴かせてAライナーを発車させた。

Aライナーの車輪が回り始め、前面には『時の空間』へと通じる空間が生じており、線路を敷設させながら一直線に走り出した。

*

ミッドチルダの北部にある臨海第8空港。

空港が人で賑わっていないとその空港が財政難で逼迫しているのではないかと思われる。

ただし、賑わっていたらいたで問題が絶たないというのも事実だ。

現にその問題が起きていた。

「はい。お待たせしました。ご用件はなんでしょう？」

空港の受付嬢が一つの案件を片付けた後、待たせていた一人の少女に顔を向けて応対した。

「あの、迷子の呼び出しをお願いしたいんです」

少女は遠慮がちなながらも目的を告げる。

「はい。ではまずお客様のお名前をお願いします。それから出発された場所も……」

受付嬢は懇懃な態度で応じ始める。

「はいつ。ミッド西部エルセアから来ました。ギンガ・ナカジマです」

少女――ギンガは自己紹介を終えてから、語り始める。

「迷子になったのは私の妹で……」

一人の少女が空港内を元気よく走っていた。

あるものを見つける為に迷いなく走っていた。

「んー。お姉ちゃん。ここにもいない……」

少女はキョロキョロと見回して、あるもの――姉の姿を捜している。

「じゃあ今度はあっち！ 搜索開始ー」

少女は特に気落ちした様子もなく、また走り出した。

「多分、エントランスの辺りではぐれたと思うんですけど……」

ギンガは受付嬢にどの辺りではぐれたかを思い出しながら告げている。

受付嬢は態度を崩さずに応対している。

「名前はスバル・ナカジマ。年齢は十一歳です」

ギンガは迷子の妹の名前と年齢を告げて、無事にもう一度再会できる事を祈るしかなかった。

*

ユーノとプロキオン（イマジン）はある次元世界にいた。

一人一人おらず、周りは広い大地しかなく、Aライナーは『時の空間』には隠さずに堂々と置いていた。

一人と一体の前には中型の慰霊碑と墓が二つ並んでいた。

風がふぶいており、土煙が舞っていた。

その中で一人と一体はキャンプ用のテントを張っていた。

三角型ではなく、ドーム型である。

現在はボタン一つで完成するテントもあるのだが、ユーノはこのように手間隙かけて張るタイプを好んでいた。

これはスクライアの部族にいた際の名残でもある。

テントを張る際に使用した道具を片付けているのはプロキオンだ。

ユーノとプロキオンのコンビネーションは戦時だけでなく、平時でも抜群だという事だ。

「よしっ！完成」

「やりましたね！ユノさん！」

ユーノはテントを完成させると、Aライナーに向っていく。積んでいた荷物を下ろすためだ。

プロキオンも倣って、Aライナーに寄る。

車内に入ったユーノが荷物を両手で担ぎ、プロキオンがそれを受け取ってテントの中へと持っていく。

何日分かの食糧だ。

といっても、高級な物はない。

鍋に適当に切った食材を放り込んで、煮込んで食べるというのがこの場での最高級な食事になるだろう。

そのための水も用意している。

粗方準備を終えたユーノとプロキオンは慰霊碑と墓の一つを見ている。

「もう一年になるんですね……」

「そうだね……」

プロキオンの言葉にユーノは答えるが、表情は決して明るくなかった。

Aライナーが『警報』を表すサイレンを鳴らすのはそれから五分後のことだったりする。

*

なのはとフェイトは、はやての研修先の温泉地へと向う為にミッドチルダ北部にいた。

「ふええ。ミッドの地上も首都と北部では結構違うねえ」

なのははミッドチルダの地理に詳しいわけではないので、純粹に地域の違いを楽しんでいた。

「こつちの方は自然が多いから観光スポットも多いよ」

ミッドチルダに関してそれなりに土地勘があるフェイトは照りつける日光の光を心地よく感じながら、なのはに説明していた。

（私としては街よりもこういう自然の方が多い方が好きかな……）
街の雰囲気嫌いではないが、どちらかというと自然に囲まれてのんびり過ごすという方が好きだった。

自然と一体になった心地よさのようなモノを感じれるからだ。

「フェイトちゃん。はやてちゃんと合流するのって何時からだっけ？」

なのはが合流時間を訊ねてきたので、フェイトは上着のポケットに入っているハンターケース型の懐中時計を取り出してパカッと上蓋を開く。

「今一時半だからあと一時間後、かな」

時刻を見てからフェイトは上蓋を閉じて、ポケットの中にしまいこもうとする。

「その懐中時計って良太郎さんがくれた物なんだよね。壊れたりしないの？」

六年も使っているのだ。多少のガタがきてもおかしくはないので、なのはの疑問はごく自然のものだ。

「あ、この時計ね。クォーツ式じゃなくて機械式だから、電池切れで修理に出す事はないんだ。修理に出すとしたら、竜頭を巻いても駄目な時か中のレンズが割れたとかぐらいかな」

「クォーツ式？機械式？」

なのはには聞き慣れない言葉だった。

懐中時計には竜頭をぜんまいで定期的に巻かなければならない機械式と、ボタン電池により作動するクォーツ式がある。

フェイトが野上良太郎に貰った懐中時計は機械式であり、定期的に竜頭を巻かなければならないタイプの物だ。

正確さや手間隙という点ではクォーツ式に軍配が上がるが、機械式の特徴である『カチコチ音』を好んで使う物も多いといわれている。フェイトもこの『カチコチ音』は好きだった。

いかにも『時間を刻んでいる』『事をリアルに体感しているような気分が味わえるからだ。』

懐中時計の蓋の内側には『A thought connects the time.』と刻まれている。

意味は『想いは時を繋げる』である。

フェイトはこの言葉を胸に一つの事を思い続けている。

野上良太郎と逢える日を。

「フェイトちゃん」

「?、どうしたの?なのは」

先程とはうってかわって真剣な表情をしているなのはを見て、フェイトは一瞬だが目を丸くしてすぐに平静な表情へと戻る。

「フェイトちゃんは寂しくないの?その……もう六年だよ。良太郎さんが別世界（じゅうせ）に来なくなつて……」

なのはは知っている。

フェイトが時折、寂しそうに懐中時計を見ている事を。

テレビなどで電車が映っていると「ふう」と溜め息をついている事を。

「最初の内は寂しかったよ。もしかしたら二度と逢えないんじゃないかって思った事もあるよ」

フェイトの言葉を聞き、なのはは耳を疑った。

自分が知る限り、フェイトは人前でそのような事を言った事がない。
「こんな思いをするくらいなら最初から逢わない方がよかったって、
ね……」

寂しい思いや苦しい思いをするくらいなら最初から逢わない方がいい
というのも、ある意味では自然なものだろう。

「でもね。良太郎と出会えなかった事を考えた方がもっと寂しいつ
て事に気付いたんだ……」

野上良太郎と出会えたからこそ、フェイトは『恋』を知った。

それは時には辛く、寂しくなり、胸が張り裂けそうなものになる。

「そしたらね。出会えた事で生じる寂しさは辛い時もあるけど、何
とでもなるって思えるようになったんだ。この懐中時計の言葉どお
り私と良太郎の時は繋がってるって思えば、ね」

そう言い切るフェイトの表情に迷いはなかった。

今の台詞を発するまでに一人で悩んだりしたのだろう。

「フェイトちゃん……」

なのははフェイトがすごく大人に見えた。

今の自分では到底辿り着けない場所に居るように思えた。

「どうしたの？ そんな事訊いてくるなんて珍しいね」

「え？ そ、そうかな……」

この手の事でなのはは訊いてくるのは珍しいので、フェイトは訝し
げな表情になる。

「もしかしてあの打ち上げの時、ユーノと何かあった？」

「ふえ？ ど、どうしてそう思うの？ フェイトちゃん」

「なのはがこの手の事を聞いてくるとしたらユーノと何かあった時
って大体決まってるからね」

フェイトの一言に、なのはの心の内を見抜かれたかのように目を丸
くしていた。

「私の行動ってそんなに単純なのかな……」

なのはは自分のコレまでの行動を振り返ることにした。

管理局武装隊陸士104部隊。

はやてとリインは外出の準備をしていた。

内勤だったためか、上着を脱いでいたはやては羽織りながら外に向
っていた。

「はやてちゃん。なのはさん達は空港からホテルに向っているそう
です」

宙を浮いてるリインがはやてに報告する。

「はい。じゃ、ちょっと外回ってそのまま休暇に入りまーす」

はやては報告を受けてから、近くにいる局員に自身のこれからの事
を簡潔に告げた。

「はいよ八神一尉。非常回線は開けといてくださいよー」

局員はするように外出兼休暇に入るはやてに釘を刺しておいた。

*

臨海第8空港の輸送物仕分け室。

一つの光球がふわふわと宙に浮かんであり、やがて輝きが増して『
球』から『人型』へと形を変えていく。

そこに出現したのはモズ型のイマジン……シュライクイマジンだ。
「好きだねえ。本当に」

彼ははぐれイマジンで職業は泥棒という変り種であり、同業者であ
る数名の人間と行動している。

今回の目的は輸送物の中から金になりそうなものを盗んでくる事だ。
もちろん、その際に障害となるものは全て排除してもいいというオ
マケ付きだ。

この時点でただの泥棒集団ではないという事は一目瞭然である。

木箱を素手で引っぺがしながら中身を物色する。

宝石に金塊に、食物などもある。

金塊一つを手にして、爪でギーっとなぞる。

本物の金なら傷がつくだけだが、爪には金が付着しており銀色の素

体が見えているところからしてこの金塊はメツキだったらしい。

宝石を手にして凝視するが、すぐに箱の中に捨てた。

捨てられた宝石はパキンという音を立てて砕け散る。

「イミテーションか……。ロクな物がねえな」

シュライクイマジンは呆れながらも、物色を続ける。

「ん？」

一つの未開封の木箱が目に入る。

『危険物扱い』と貼られていた。

「」

シュライクイマジンにとってはコレが今回の目当ての物と決めた。

偽物の金塊と宝石に贋作の絵画、オマケに大して金になりそうになり食物と辟易していたところだ。

目的物を遮る木箱を持ち上げて適当に放り捨てる。

「よし！ ゲットオ」

両手で持ち上げた瞬間。シュライクイマジンの全身に悪寒が走った。泥棒なんてやっていると、そういう『危機感』というものが発達してしまう。

それは人間でもイマジンでも関係ないといったところだろう。

「コレ。もしかして危険物なんて生易しいモノじゃねえんじや……」

シュライクイマジンは両手で抱えている品をどうしようかと悩む。

このまま持って帰ると選択した場合、時限爆弾を抱えて行動する事と同じである。最も爆弾如きでイマジンが木っ端微塵になるはずがないが。

持って帰らないと選択した場合、仲間内にコケにされるのは安易に想像できた。

（いつそ持って帰って吹っ飛ばしてやろうか……）

シュライクイマジンは中身を爆弾と判断しているのか、今からアジトに持って帰って仲間を木っ端微塵にしてやろうかと考えている。

『仲間』といっても利益関係で成り立っているものだ。『情』や『絆』のようなものは欠片ほどもない。

利益関係といったのは利益をもたらしてくれている間は『仲間』であり、一度でも害をもたらすのならば躊躇いなく排除にかかるからだ。

木箱からキューイイインというまるで何かが活発に動くような音が聞こえ始める。

「やべ……」

そう言うってから二秒後にその木箱は爆ぜた。

*

Aライナーは目的地である臨海第8空港に向う為に『時の空間』を経由して、ミッドチルダに向っていた。

目的はイマジンの討伐である。

「コレって相当マズイですよ！？ユノさん！」

プロキオン（イマジン）はモニターに映し出されている臨海第8空港を見ながら、狼狽していた。

ユノはAライナー・マガジン（以後：マガジン）に足を運んで、ある物の点検をしていた。

「どうしたの？プロキオン」

「いいからコレ見てください！」

プロキオンがユノの手を取って、モニターに映る臨海第8空港を見せた。

轟々と何もかもを焼き尽くす紅蓮の炎が我が物顔で猛っていた。

いわゆる『大災害』という言葉が相応しい状態になっていた。

「臨海第8空港……。確かなのは達が休暇に向う温泉地に使う空港だ……」

「オマケにイマジンまでいますよ！なのさん達が救助とかしてたら妨害するんじゃない……」

プロキオンがもしものことを想像する。

ユノが腕を組んで、思索する。

イマジンが何の目的で空港に出現したかはわからないのでありえる可能性を浮かべていく。

（VIPの暗殺？あの空港で今日訪れる予定はなかったはずだし……。輸送物の強奪が一番ありえるセンだけど、何を盗む……）

ユーノは持参した携帯端末を起動させて臨海第8空港のデータベースに侵入するを試みる。

「まだ生きててくれたらいいんだけど……」

ユーノはキーボードをカタカタカタと叩きながら、調べていく。

「よかった。まだデータは生きてる」

ユーノは安堵の息を漏らしてからすぐに『輸送物仕分け室リスト』を凝視する。

「宝石。金塊。絵画に食物、あとは正体不明の危険物扱い……。イマジンが強盗目的ならば金になりそうなものを狙うはずだから、食物はバツになる……」

「でも残った三つも胡散臭そうですよ」

プロキオンはユーノと共に仕事柄、遺跡物の鑑定に立ち会う事があるのでリストに載っている物をそのまま鵜呑みにして信じたりはしない。

「金塊と宝石が偽物で絵画が贋作と判別できるイマジンなら持って帰りそうなものは一つしかないね」

ユーノとプロキオンの目に留まったのは『正体不明の危険物扱い』だ。

「コレを火元と仮定すると、中身は爆薬かロストログア……」

そう告げると、ユーノは携帯端末を停止させた。

「プロキオン。速度を上げて！ミッドチルダに入り次第すぐに出動するから！」

「はい！」

ユーノの表情は『戦士』そのものになっていた。

臨海第8空港は『火の海』という表現が相応しい状態になっており、『阿鼻叫喚の地獄絵図』という表現に移行しようとしていた。

はやてはなのはやフェイトに現在目の前で起こっている事を念話で告げてから、リインと共に現場にいた。

管理局御用達の中継車の屋根の上に乗って無数のモニターを展開させて、的確な指示を送っていた。

火の動きを見て、今後どのような動きをして被害を出そうとしているのかどのようにすれば的確かつ迅速に救命活動が出来るかを思案する。

「はやてちゃん！」

「はやて！」

私服姿ではなく、バリアジャケット姿のなのはとフェイトがはやての前に降りた。

全力で飛行して現場に来てくれたのだ。

「二人ともありがとうな。折角の休暇もパアになってもうたな」

はやてが苦笑いを浮かべながら、張り詰めた場の空気を変えるためおどける。

なのはもフェイトもはやての意図が理解できるので、非難したりしない。

「しょうがないよ。でも早く何とかしないとね」

「うん。この状況を放っておいて休暇を楽しむなんてできないしね……」

なのはとフェイトもおどけた事を言いながらも、真剣な表情で現場を睨んでいた。

Aライナーが『時の空間』からミッドチルダの夜空へと抜け出ていた。

線路を敷設・撤去しながらAライナーは滑空の体勢で線路と道路が平行になるように位置づける。

Aライナーは速度を落とさずに現状を維持しながら走っていた。
ユーノとプロキオンはマガジンへと移動しており、そこに格納されているT・REXの頭部をモデルにした青い重装甲車……レックスランダーに搭乗していた。

『レックスランダー。発車まであと二十秒』

レックスランダーに組み込まれているAIが告げる。

ユーノはゼロノスベルトを巻きつけた状態であり、あとはチェンジレバーを右にスライドしてゼロノスカードをアプセットすれば完了だ。

隣座席にはプロキオンが座っている。

「き、緊張しますね……」

「レックスランダーを実際に走らせるのは初めてだからね」

ユーノの言うように、路上で走らせるのは初めてだ。その代わり『時の空間』や地下格納庫では何度も走らせている。

「どうして現場までAライナーでいかないんですか？」

「ただでさえ、ピリピリしてる中でこんな目立つものが空から来たら余計に神経質になっちゃうよ。ただでさえ僕は管理局にとっては『敵』でも『味方』でもない扱いだからね」

ユーノの言うとおり、救急現場にいる者たちの殆どが通常とは比べものにならないくらいに神経質になっている。

そんな中、管理局にとって最もイリーガルな存在が堂々と現れるのだ。

神経逆撫でにもほどがあるだろう。

同時にイマジンの存在も臭わせることになる。

その事が原因で救命活動に支障をきたす事になるとも否定できないはない。

「とはいっても、レックスランダーでも十分に目立つけどね」

ユーノは苦笑しながら言う。

『レックスランダー。発車まであと十秒』

AIがカウントダウンを開始し始める。

チェンジレバーを右にスライドさせる。

バイオリンの音色をしたミュージックフォーンが流れ出す。

「変身！」

ユーノはゼロノスカードをクロスディスクにアップセットする。

『ベテルギウスフォーム』

オーラスキンに覆われ、青いオーラアーマーが装着される。頭部の銀色のデンレールを青いネドケラトプスの頭部が走り、定位置になると電仮面になる。

直後に両肩、両下腕、両ふくらはぎに二センチ程の突起が出現する。Aゼロノスに変身を終える。

『レックスランダー発車します。後続車は今から三十メートル後方で時速六十キロを保ったまま走行中。前方車は五十メートルで時速六十五キロで走行中。快適な運転を』

マガジンの口扉が開いて、円滑に地面に走らせる為に滑り台が出現する。

レックスランダーは自動操縦で全タイヤを回転させてバックする。ギャギャっバックしてからドオンと音を立てて道路に地をつける。レックスランダー全体が弾む。

グアングアンと揺れるが、中で運転しているAゼロノスとプロキオンにはそのショックはさほど響いてこない。

「行くよ！」

「はい！」

Aゼロノスがアクセルとなるレバーを前に倒す。

ギューイイインという音を立てて、レックスランダーは道路を走り出した。

Aライナーは役目を終わると、滑り台を収納してから口扉を閉じて空に出現している空間に向かって線路を敷設しながら走り出した。

「203、405。東側に展開してください！魔導師陣で防壁張って燃料タンクの防御を！」

はやてはなのは、フェイト以外にも駆けつけた災害担当局員、陸士部隊、航空部隊にも指示を送っていた。

「はやてちゃん。駄目ですう！まるつきり人手が足りないですよお！」

経験の浅いリインはかなり追い詰められているのか弱音を吐く。

「そやけど首都からの航空支援が来るまで持ちこたえるしかないんだよ。がんばろ！」

はやては平静を保ちながら、リインを励ます。

「はい！」

励まされたリインも、はやての期待に応じようとしていた。

はやては一向に改善される様子のない現場を睨んでいた。

その上空を金色の光が駆けており、それは火災現場へと向っていた。

『航空魔導師本局02。応答願います』

本局からの通信が金色の光――フェイトの耳に入った。

「はい。本局02。テストロッサ・ハラウンです」

フェイトが応じた。

『8番ゲート付近に要救助者の反応が出たんですが、局員が進めないんです。お願いできますか？』

切羽詰った声色で現状の説明と要望を同時にする。

「8番ゲート。バルディッシュ！」

フェイトは右手に握られている相棒――バルディッシュ・アサルトに視線を向ける。

『ルート検索終了。二分以内に到着します』

必要事項に簡潔に告げた。

「すぐ向います」

そう言うと同時に、フェイトは速度を上げた。

ブオンという音速の壁を破りそんな音を鳴らせて。

はやては宙に浮かんでいるモニターを凝視しながら指示を送り続け

ていた。

「はやてちゃん！防衛部隊の指揮官が到着です！」

ラインが速度を上げて、はやてのそばまで寄って報告した。

「すまん。遅くなった」

渋い声に渋い容姿をした長身の男が駆け寄ってきた。

はやては直に挨拶をする為に、中継車の屋根から飛び降りる。

「いえ。陸士部隊で研修中の本局特別捜査官、八神はやて一等陸尉です。臨時で応援部隊の指揮を任せとります」

はやては敬礼をしながら、自己紹介と現状を告げた。

「陸上警備隊108部隊のゲンヤ・ナカジマ三佐だ」

男――ゲンヤも敬礼で返す。

「ナカジマ三佐。部隊指揮をお願いしてもよろしいでしょうか？」

はやてがゲンヤに指揮の交代を打診する。

「ああ？お前さんも魔導師か？」

はやては上着のポケットから金色のペンダントを取り出して見せる。それはかつてラインフォースが遺した物だ。

「広域型なんです。空から消火の手伝いを……」

「はやてちゃん！大変ですう！」

「どうしたん？ライン」

慌てふためいているラインがスーツと降りてきた。

「今こっちに向って正体不明の青い装甲車が向っているそうです！」
あまりに突拍子のない事にはやてとゲンヤは首を傾げてしまった。

*

レックスランダーは現在臨海第8空港を最終地点に指定して走っていた。

組み込まれているAIは最短かつ安全なルートを検索している。

Aゼロノスは指示に従って、操縦桿とレバーを操作している。

『次の交差点を右です』

操縦桿を右に傾ける。

レックスランダーが右に重心を置いて曲がる。

ギューンという音を立てて、近くの電灯を一つ破壊した。

火花が飛び散ったがレックスランダーは前へ進む。

助手席に座っているプロキオンが手慣れた操作でボタンを押す。

「機体損傷なし、です」

『この速度でいけば目的地到着まであと五分です』

プロキオンとAIが告げる。

「プロキオン。空港の見取り図を」

「はい！」

Aゼロノスの指示にプロキオンがボタンを押す。

モニターの一つに臨海第8空港の見取り図が映し出される。

『イマジンは一体で、現在移動中です。近辺に魔導師および被災者の反応はありません』

AIの報告を聞きながら、Aゼロノスはレバーを前に倒す。
ギューイイインという音を立てて、速度を更に上げる。

このレックスランダーは最高速度ならばマシンデンバードやマシンデンバード？、マシンゼロホーンよりは劣るがバイクタイプにはない特殊装備が搭載されているのがメリットだ。

レックスランダーが前方車を一台抜いていく。

『被災者と魔導師の反応あり、イマジンがその地点に足を踏み入れるまで残り一分です』

AIの報告を聞きながら、Aゼロノスはレバーにあるカバーを開く。
一つのボタンがある。

『アフターバーナー点火を用いてのジャンプに必要な距離は満たせています。使用しますか？』

AIの確認に答えるまでもなく、Aゼロノスはボタンを押す。

後部中央のマフラーが火を噴いた。

レックスランダーは速度を上げて、臨海第8空港に立ち入らせないようにする為に設置されたバリケードをふっ飛ばした。

「おい、何か聞こえてこねえか？」

ゲンヤの言葉にはやてとリインも耳に神経を集中させる。何かはこちらに向かっているのはわかる。

しかし、それが何なのかはわからない。

「確かに何かに聞こえてはくるけど……」

「リインには何なのかわからないですう」

はやてもリインも聞き覚えのない音なので何なのかはわからない。音が大きくなってくる。つまり近づいているという事だ。

ギューイイイインという音が三人の耳に入った。

「近いですう！」

「な、何や!？」

「チイ！緊急時だつてのに！」

三人が毒づいた直後にドオオオンという音が鳴り響いた。

「……」

はやて、リイン、ゲンヤは口をポカンと開けてそれが頭上を通り過ぎる様を見ているしかなかった。

ズシャンという音が鳴ってそれ……レックスランダーが無事に着陸して、そのまま空港内へと向かっていった。

「お前さんの知り合いか？アレ」

ゲンヤは空港内に向っていくレックスランダーを指差しながらはやてに訊ねた。

「違います！違います！」

「リインも知らないですう！」

はやてもリインも首を横に振って否定した。

その直後に空港の柱に激突する音やガラスをぶち破る音などが三人の耳に入った。

炎が周囲を囲っている中を少女……スバル・ナカジマがとぼとぼと涙を流しながら歩いていった。

「お父さあん。お姉ちゃあん」

助かるのかどうかもわからない中をただ一人、身内を呼びながら歩いていた。

突然の爆発が起こり、スバルは衝撃でふっ飛ばされる。

うつ伏せになって倒れるが、ゆっくりと起き上がる。

「痛いよお……。熱いよお……。こんなのやだよお。帰りたいよお

……」

スバルは嗚咽を漏らしながらこの場から離れるが、どのようにして離れたらいいのかわからない。

スバルが倒れている後ろの彫刻物に亀裂が入り始める。

維持できずに砕け、巨大な天使像はスバルに向っていく。

（え？）

スバルが気付いた時には他に何も考えられなかった。

いや考えるより先に本能的に感じ取ったのかもしれない。

自分が『死』を迎えようとしている事に。

それでも本能的に身を構える。

だが、スバルは『死』を迎える事はなかった。

倒れようとしている天使像が無数の桜色の輪で動きを止められていたのだ。

「はあ……はあ……。よかった。間に合った。助けに来たよ」

スバルとなのはのファーストコンタクトである。

なのはにしてみれば正直ギリギリのところだった。

自分が来るのが遅ければこの少女――スバルは確実に下敷きになっていただろう。

（本当によかったあ……）

安堵の息を漏らしたいが、そういうわけにはいかない。

すぐさまスバルの前に着地する。

両脚に展開されている桜色の双翼は消える。

スバルに目立った外傷はないが、それでも顔や衣類は汚れていた。

「よく頑張ったね。偉いよ」

なのははスバルと同じ目線になるようにしゃがんで褒める。
スバルは言葉にならない言葉を述べようとしている。

「もう大丈夫だからね」

なのははスバルに告げると、安全な場所までの経路を作ろうとする。

『マスター。イマジンの反応があります』

レイジングハート・エクセリオンが警告した。

「ええっ!？」

なのはは右手をかざして桜色のミッドチルダ式の魔法陣を展開させてスバルを桜色のドームで覆うと、どこから出現するのか警戒する。
(上?下?正面?どこ?)

レイジングハート・エクセリオンを構えながら、周囲を警戒する。
時空管理局に勤務して六年ではあるが、一度も経験した事がないことがある。

それはイマジンと戦闘して勝利する事だ。

そもそも現在の時空管理局は高ランク魔導師には対イマジン戦に際して常に戒厳令が敷かれているのだ。

これはイマジンの能力である『憑依』による二次被害を食い止めるためである。

またも爆発が起こり、爆煙が経つと同時にイマジン……シュライクイマジンが出現した。

「ったく。お宝は取り損ねるは火の海起こすはで散々だぜ」

シュライクイマジンは頭をかきながら能天気 to 告げた。

「憂さ晴らしにテメエ等を狩らせてもらうぜ!」

言うと同時に、シュライクイマジンが向っていく。

なのはもスバルも思わず両目を閉じてしまう。

「え?」

何かの音が聞こえたので、なのはは閉じていた両目を開ける。

ギューイイイインという音を立てながら、何かがこちらに向かってくる。

そして。

「ぶっ」

ドオン、ガシャアンという音を立てながらそれはシュライクイマジンを撥ね飛ばした。

壁を突き破ってシュライクイマジンは外へと飛んだ。

それはT・REXの頭部を髣髴させる青い装甲車だった。

ガーっという音を立てながら、青い装甲車――レックスランダーのキャノピーが開く。

「外まで飛んだか……」

「アイツ、空飛ぶと思いますよ。羽あるし」

レックスランダーからAゼロノスとプロキオンが降車した。

Aゼロノスとなのはの目が合う。

「あの、助けていただいてありがとうございます！」

なのはがAゼロノスにシュライクイマジンの脅威を取り除いてくれた事に対しての感謝の言葉を述べる。

「これで二度目だね」

Aゼロノスは短く告げると、シュライクイマジンが作った外まで通じる穴を睨んでいた。

第六話 「G・W。二度目の出会い」（後書き）

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL AtSです!!」

シュライクイマジンと戦闘する事になったAゼロノス。

なのははスバルを抱えて、外へと飛び立つ。

フェイトもギンガを救出し、はやても消火活動をする。

無事に片付き、ユーノとプロキオンはテントを張って

いた

次元世界へと戻る。

揺らぐ炎を見ながらユーノは思い出す。

第七話 「揺らぐ炎を見つめて……」

第七話 「揺らぐ炎を見つめて……」 (前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

まずは作者の独断と偏見による気になるキャラクターから。

遊井亮子さんが演じるキャラクター達。

二時間ドラマでよく出演している女優さんが演じるキャラクターは
内容が違えども、共通点があります。

幸せにはなれない。

男に騙される。

感情的に動けば必ずしっぺ返しになる、等です。

第七話 「揺らぐ炎を見つめて……」

燃え尽きる様子がなく炎が舞っている臨海第8空港。

レックスランダーを降車したAゼロノスとプロキオンはシュライクイマジンが作った穴を睨んでいた。

プロキオンの言うように、飛行能力を有しているのならば空を足場に行っている可能性は十分にある。

それからレイジングハート・エクセリオンを天井に構えている高町なのはを見る。

『上方の安全を確認』

レイジングハート・エクセリオンが紅い珠部分を明滅させながら発する。

（安全な場所に狙いをつけて、穴を開けるつもりだね……）

Aゼロノスはおおよその見当を想像する。

なのはが助けた少女……スバル・ナカジマは現在なのはが張った桜色のバリアの中に包まれていた。

レイジングハート・エクセリオンを振り下ろすと、なのはの足元に桜色のミッド式の魔法陣が展開されていく。

『ファイアリングロック、解除します』

「一撃で地上まで抜くよ」

『オーライ。ロードカートリッジ』

レイジングハート・エクセリオンは主の命に従い、行動を開始する。ヘッド付近のスライドカバーがガシユンガシユンと音を立てて空になった薬莢を二個排出する。

レイジングハート・エクセリオンの全体が桜色に輝き、ヘッド付近に三枚の桜色の翼が展開されていた。

名残として、桜色の羽が付近を舞っていた。

『バスターサーチ』

レイジングハート・エクセリオンの先端に三つの桜色の環状魔法陣

が出現し、中央に桜色の魔力球が構築されていた。

キュイイイインという今にも発射しそうな音を出して。

「デイバイイイン……」

なのはが鋭く狙いをつけて睨む。

「バスタアアアア！！」

声と同時に桜色の魔力球は一筋の光線となって一直線に発射された。ズドオオオオンという音を立てて、あらゆる障害物を撃ち抜いていた。

「すごいです……」

プロキオンがその威力に目をパチパチさせながら呟いていた。空港を爆煙がたちこめた。

「さ、行くよ。しつかり掴まってね」

なのはがバリアを解いてスバルを抱きかかえて先程開けた穴から飛び立とうとしていた。

「待って！」

Aゼロノスがなのはを止めた。

「え？」

なのはは何故止められたのかわからないようだ。

「空から行く気？」

Aゼロノスが訊ねる。

「え、はい。そうですけど……」

なのはは自分の判断は間違っていないと思っているが、他人に訊ねられると自信が揺らぐ。

「だったら君が開けた穴だけど、僕達が先に行かせてもらっていい？」

「え？」

「誤解がないように言っておくけど、我が身可愛さでそんな事を言っているわけじゃないよ」

Aゼロノスはなのはが『瞬だが』『失望』に近い視線を向けていたのを見抜いており、訂正する。

「あのイマジンが待ち構えている可能性があるって事です」
プロキオンが付け足した。

「あ、ああ。そうだったんですか……」
なのはは安堵の息を漏らしていた。

「僕達が行かせてもらっていい？」

とAゼロノスが発した時、なのはは何故か『失望』や『愕然』という言葉が脳裏に過ぎった。

自分が知っている仮面ライダー……電王やゼロノスはそのような事を言わなかったからだ。

災害時に自身の命を優先する事は間違っではない。

Aゼロノスの発言を否定する権利はある意味では誰にもないのだ。だがその言葉は待ち伏せをしていると思われるイマジンに対しての策のようなものだった。

つまり自己保身の為に言ったものではない。

その事に気付いた時、なのは自身何故か安堵の息を漏らしていた。
（何でだろ……。この人とはまだこれで二度目なのに、何でかそういう事をする人じゃないって思っちゃうんだよね。だからショック受けてたのかな……）

会って二度目のはずなのに、不思議とそのように思ってしまう。

「それで、えと……」

「ANOTHERゼロノス。好きなように呼んでいいよ」

「Aゼロノスさん。具体的にどうするつもりなんですか？私知ってる限りではその……仮面ライダーには飛行能力はないはずじゃ……」

なのはが知る限り、電王にはあるが、ゼロノスには単体で飛行することはできないと記憶している。

目の前にいる仮面ライダーが『ゼロノス』ならば飛行能力を有して

いないと推測している。

「大丈夫ですよ、僕達にはあるんです」

プロキオンが胸を張って言う。

「ふえ？」

「あの二人にない力が僕達にはある。逆にあの人達にある力が僕にはなかったりするけどね」

どちらが優れているというような事をAゼロノスは言つつもりはないらしい。

Aゼロノスはチェンジレバーを右にスライドさせて、ゼロノスベルトのクロスディスクからゼロノスカードを抜き取って裏返してからもう一度、クロスディスクにアプセットする。

「プロキオン！」

「はい！」

バイオリンが奏でるミュージックフォーンが鳴る。

『シリウスフォーム』

ゼロノスベルトの電子音声が発する。

プロキオンがフリーエネルギー体となって、Aゼロノスの中に入り込む。

上半身に、白色がメインで裾に青色のポイントカラーがされている袖のないプロキオンクロークが出現する。

両肩には三本の爪のような飾りが施され、両下腕にはプロキオンが用いていた武器であるプロキオンクロークが装着されている。

電仮面にはミサイルの弾頭部分がAゼロノスのデンレールを無視して、中央に走り出して停止すると回転しながら六芒星状に展開して電仮面となるSゼロノスとなった。

「それじゃ、僕の後についてきてください」

Sゼロノスは言うと同時に、なのはが開けた穴に向かって跳躍した。
「はい！」

プロキオンクロークは仮面ライダーゼロノス・ベガフォームのデネ

ブローブとは違う能力がある。

それが飛行能力だ。

そのため、プロキオンクロークは飛行時は平時とは違って若干裾が長くなっている。

（いる？）

上昇しながら、深層意識の中にいるユーノ・スクライアはSゼロノスに訊ねる。

「いますね……」

（読みどおり、か……）

予測が当たっても嬉しくも何ともない。

「イマジンを足止めさせる為に先に行きます！」

Sゼロノスは飛行速度を上げる。

先程なのはが放ったデイベインバスター・エクステンションの際に生じた爆煙を突っ切る。

「やあああああああああ！」

Sゼロノスが更に速度を上げながら、空で待ち伏せているシュライクイマジンに狙いをつけてそのまま顔面に左肘撃ちを食らわせた。

「ぶはあっ！」

シュライクイマジンは奇襲攻撃をまともに食らって、仰け反る。

「デメエー！」

攻撃を食らって引き下がってくれるほど、シュライクイマジンはお人好しではないらしく両手にはフリーエネルギーで構築された剣を出現させていた。

Sゼロノスも、両手のプロキオンクロークを構える。

「レッツゴー・バトル、ですー！」

告げると同時にSゼロノスから切り出した。

なのははスバルを抱きかかえたまま、夜空を飛行していた。

二人を背景に夜空の星々は輝いており、まるで宝石のようだとスバルは思った。

「こちら教導隊01。エントランスホール内の要救助者、女の子一名を救出しました」

なのはが結果を報告していた。

『ありがとうございます。さすがは航空魔導師のエースオブエースですね!』

なのはの通信相手が若干興奮気味になっていた。

「西側の救護隊に引き渡した後、すぐに救助活動を続行しますね」

『お願いします!』

なのはは今後の活動を告げると、通信が切れた。

スバルを救助隊に引渡し、救助活動を続行したのはそれから五分後の事である。

*

ゲンヤ・ナカジマ、八神はやて、リインは口をポカンと開けて跳び越えたレックスランダーを見送ってから正気に戻った。

「ナカジマ三佐」

はやてがゲンヤを呼ぶ。

「俺、今度はアレに買い換えるかな……。アレならどんなヘボが運転しても死なねえだろうしなあ」

はやての言葉が耳に入っていないのかゲンヤはレックスランダーを思い出しているのだろう。妙な事を口走っていた。

「ナカジマ三佐!」

「お、おお。悪い」

はやては先程よりも大きめの声をあげ、ようやくゲンヤは我に返った。

「今から空に行って消火の手伝いを……」

『はやてちゃん。指示のあった女の子を無事救出。名前はスバル・

ナカジマ。さつき無事に救護隊に渡したんだけどお姉ちゃんがまだ中にいるんだって……」

はやての側にモニターが出現して、なのはが結果と今後を報告していた。

「了解。私もすぐに空に上がるよ」

『了解。あと空港付近の空に上がるなら気をつけてね。今Aゼロノスさんとイマジンが交戦中だから』

モニターは閉じられた。

「イマジンって……。この状況でかよ……」

ゲンヤでなくても露骨に嫌な表情になるものだ。

イマジン一体を倒すのにどれだけの兵力が必要になるかを知っているからだ。

しかも、用いたとしても勝てる可能性が極めて少ないというのが現実である。

「それであの青い装甲車が突っ込んだってワケやな……」

青い装甲車の搭乗者はAゼロノスだと、はやては確信を持った。

「ナカジマって……」

リインは聞き覚えがあるために、記憶を呼び起こそうとする。

「ウチの娘だ。二人で部隊に遊びに来る予定だった……」

「……。ではナカジマ三佐。後の指揮をお願いします」

はやてはゲンヤの心中を察しながら毅然とした態度を取り、敬礼をしてからゲンヤに後の指揮を任せる事にした。

「リインしつかりな。説明が終わったら後で私と上で合流や」

「はいです！」

最後にはやてはリインに指示を送ると、その場を駆け出した。

駆け出しながら身体全身が輝き、制服姿から騎士甲冑姿へと切り替わる。

左足を強く踏み込んで跳躍すると、背中黒い翼を羽ばたかせて空へと飛翔した。

*

臨海空港の別エリアではというと、三人の一般市民が青色でドーム状の近代ベルカ式の防御魔法に包まれながらも、咳き込んでいた。そのエリアに一直線に金色の魔力砲が走り、壁に大きな穴を開ける。爆煙が立ち、その原因を起こした張本人が出てくる。

フェイト・Ｔ・ハラオウンだ。

「管理局です！」

フェイトは周囲を見回しながら要救助者を捜す。

「ここです！」

防御魔法に包まれている三人の内の一人がフェイトの姿を確認すると、呼びかける。

耳に入ると、そばまで駆け寄る。

「もう大丈夫ですから」

『デیفエンサープラス』

バルディッシュ・アサルトを向けて金色のドーム状の防御魔法を展開する。

しゃがんで要救助者と同じ目線になる。

「すぐに安全な場所までお連れします」

「ああ、あの……」

「はい……」

「魔導師の女の子がこのバリアを張ってくれて、それから妹を捜しにいくって言うてあつちに……」

一般市民はフェイトにまだ救助者がいることを教え、その女の子が向かった先を指差していた。

その先は炎の壁が出来上がっていた。

轟々と燃えている。

「わかりました。皆さんをお送りしたら、すぐに捜しに行きます……」

フェイトはまず眼前の要救助者の救助に専念する事にした。

中央に大きな空間ができて、いるフロアに一人の少女が満身創痍の状態ながらもゆっくりと進んでいた。

「スバルう。どこお!？」

ドオオオオンと向かいの位置から爆発が起きても、少女は前へと進んでいた。

「返事してえ。お姉ちゃんがすぐに助けに行くから……」

少女はヨロヨロになりながらも、妹の身を案じていた。
か弱い妹だから。

繊細だから。

自分は『姉』として守らなければならないのだ。

両膝を引きずり、左手は手すりを握ったままゆっくりと歩き出す。

フェイトは要救助者の少女がいると思われるエリアまで走っていた。

爆発が起こるが、爆煙を抜けてひたすら走る。

下を見ると、そこには一人の少女がゆっくりと前に進んでいた。

彼女が先に救助した一般市民が言っていた少女なのだと確信した。

「その子、じつとして！今助けに行くから!!」

少女は自分の声に反応して、こちらを見る。

その直後に少女がいるフロアの床に亀裂が走り出して、砕けた。

「わ、ひゃあああああああ!!」

少女が悲鳴を上げながら、瓦礫と共に落下していく。

『ソニックムーブ』

バルディッシュ・アサルトが告げた直後にフェイトは一筋の金色の

光となって落下していく少女へと向かっていった。

瓦礫が最下層に落下して、煙を立てる。

煙の中から一筋の金色の光が、上に昇っていく。

少女を抱きかかえたフェイトだ。

「ごめんね。遅くなって。もう大丈夫だよ」

フェイトは少女に優しく語りかける。

それから比較的落盤がなさそうな場所を選んでそのまま移動を始めた。

「妹さん。名前は？どっちに行つたかとかわかる？」

フェイトは少女の妹の名と所在を訊ねる。

「エントランスホールのところではぐれてしまつて、名前はスバル・ナカジマ。十一歳です」

フェイトは少女の喋り方が災害に見舞われながらもしっかりしている事に内心驚いていた。

大抵なら慌てふためていたり、最悪の場合はまともに会話も成立しない時もあるからだ。

『こちら通信本部。スバル・ナカジマ十一歳の女の子を既に救出されています。救出者は高町教導官です。怪我もありません』
モニターが出現して、なのはがスバルを助けている所が映し出されてすぐに消えた。

「スバル……。よかつた……」

心のつかえが消えたのか少女は安堵の声を漏らす。

「了解。こちらは今お姉さんを保護。名前は？」

「ギンガ。ギンガ・ナカジマ。陸士候補生十三歳です」

少女――ギンガは自身の名と処遇を明確にした。

「候補生か……。未来の同僚だ」

フェイトは笑みを浮かべて、新たな『仲間』ができた事に喜ぶ。

「きよ、恐縮です……」

ギンガは嬉しさと緊張で堅い返事しか出来なかった。

フェイトの飛行速度が上がった。

*

一台の中継車が内部からケーブルを出していた。

車内にはゲンヤとリンがいてモニターを睨んでいた。

「補給は？」

「あと十八分で液体補給車が七台到着します。首都航空部隊も一時間以内には主力出動の予定だそうです！」

「遅えな。要救助者は？」

ゲンヤは助けの遅さに毒づきながらも現状を把握しようとする事を怠らない。

「二十名ほど……。魔導師の皆さんが頑張っていますから……。なんとか……」

リインが真剣な表情でモニターを睨みながら告げる。

「最悪の事態は回避できそうか……」

「はいです」

「よし。おチビの空曹さんももういいぞ。自分の上司のところに合流してやんな」

ゲンヤがネクタイを緩めながら、リインにはやての所に行くように促す。

「いえ。もう少し情報を整理して指揮系統を調整してからにします」
リインはゲンヤの申し出をやりわりと断った。

「そうかい。ま、助かるがな」

ネクタイを緩め終えると、感謝の言葉を述べる。

はやては現在、空に佇んでいた。

足元には円型の魔法陣で構築された白いベルカ式の魔法陣が展開されている。

右手には専用の非人格型アームデバイス――シユベルトクロイツ。

左手には専用の魔導書型ストレージデバイス――夜天の書。夜天の書を開いて、はやては魔法を繰り出そうとしていた。

「ほの白き雪の王。銀の翼とて眼下の大地を白銀に染めよ！」

はやての頭上に白い立方体キューブが出現する。

「八神一尉。指定ブロック避難完了です。お願いします！」

局員の一人がはやてに告げる。

意識を今やるべきことの為に集中する心構えを取る為に両目を閉じていたはやては両目を開く。

「了解！来よ、氷結の息吹……」

シュベルトクロイツを天に掲げる。

宙に出現しているキューブがそのばで高回転する。

「アーテム・デス・アイセス!!」

振り下ろしたシュベルトクロイツのヘッド中心部が輝きだす。

四つの白いキューブが白い流星となって、空港へと飛んでいく。

全てが落下すると、まるで染色するかのように紅く染まっていた空港全土がみるみるうちに青く染まっていく。

その変化に生じる速度は速く、あっという間だった。

地道に消火作業をするのが馬鹿らしくなってくると思わせるものだった。

「おし！」

振り下ろしたシュベルトクロイツを持ち上げながら、はやては上手く言った事に喜ぶ。

「すっげえ……」

「これがオーバーSランク魔導師の力……」

はやての近くにいた局員二人が感想を述べながら、バリアジャケットに付着している雪を払い落とす。

「巻き添えごめんなあ。私一人やとどうも調整が下手で……」

はやては二人の局員に謝罪をしながら、夜天の書をパタンと閉じた。無数の光がこちらに向かってるのがはやての視界に入った。

首都航空部隊の魔導師達だ。

中継車の中で首都航空部隊が駆けつけたことを知ったゲンヤは安堵と呆れが混じった息を吐いた。

「ふう……。やっと来たか……」

「はい」

リインは純粹に喜んでいる。

「だがまだ油断はできねえ。もうちつと情報整理を頼んでいいか？」

「了解です」

ゲンヤの依頼にリインは快諾した。

「あとおチビの空曹さん」

「何ですか？」

「お前さんはあの青い仮面ライダーを知ってるのかい？」

ゲンヤは事態が少しマシになったのを機に気になっていた事を訊ねる事にした。

「前に一度だけ会った事があるだけです。名前はANOTHERゼロノスというそうです」

リインは知っている情報を打ち明ける。

「アナザー？てことは過去にもゼロノスがいたって事か？」

「アナザー」と名がついている以上、過去に『ゼロノス』そのものがいたという事になる。

『ゼロノス』の存在があるからこそ『ANOTHERゼロノス』と名付けられるのだから。

「リインは見た事も会った事もないですけど、『仮面ライダーゼロノス』という人がいたそうです」

「お前さんも知らねえってのかい？」

「はいです。リインが生まれる前の事ですから……」

ゼロノスが別世界で戦っていたのは今から六年前の事だ。それよりも後で誕生したリインは、はやてやヴォルケンリッターの証言でしか知らない。

「どっちにしろ仮面ライダーの存在で一悶着起きそうな気がするってのは俺の思い過ごしじゃねえだろうなあ」

ゲンヤは時空管理局のトップ連中がAゼロノスをどのようにして捉えるかを気にしていた。

『味方』として受け入れた場合、確実に支配下に置こうとするだろ

う。対等な『協力』関係をもとうとはしない。

大組織にとって個人と対等な協力関係を結ぶ事は屈辱でしかないからだ。

『敵』として認識した場合、出現した直後にイマジンと交戦していろいろがお構いなしに排除する可能性も十分にありえる。

正攻法に挑んでも敗北するのは管理局側なのだから。

ゲンヤはモニターに映し出されているSゼロノスとシュライクイマジンの戦闘を見ていた。

*

プロキオンクローとフリーエネルギーの剣がぶつかり合って火花を飛び散らせていた。

単純な力技ならSゼロノスに分があるのだが、シュライクイマジンには口調に反してテクニカルな戦闘スタイルをしていた。

「オラオラオラア！最初の勢いはどうしたあ！！」

シュライクイマジンの双剣が交互にしかし、生き物のように両腕を動かしている。

右から左から斜め上から斜め下から。

距離をとる為に後方へと退がるSゼロノス。

（僕達にとっては厄介なタイプだね……）

「大丈夫です。チャランポランに見えてもあのイマジンの剣の軌道にはパターンがあります」

深層意識のユーノに対して、Sゼロノスは突破口を見出したかのような口調をしている。

プロキオンは近接戦闘に特化したイマジンであり、性格は子供だが戦闘センスは極めて高くユーノと契約した影響もあるのか理詰め戦闘を解析しようとする部分もある。

「ん？」

（あれは……首都航空部隊）

Sゼロノスはこちらに向かってくる魔導師達を見る。
ユーノにしてみればありがたいどころか邪魔者が増えただけでしかない。

シュライクイマジンがなのはに狙いをつけたのは『ただそこにいたから』というものだろう。

シュライクイマジンの目的はあくまで『窃盗』であり、人を襲うのは失敗した『憂さ晴らし』のようなものだからだ。

こちらに来ようとしている魔導師達はシュライクイマジンにとっては鴨がネギを背負ってきたようなものである。

（僕達にとっては護る対象が増えただけだよ……）

「どうします？」

（場所変えるか、即座に倒すかどっちかしかないね……）
「なら、即倒します！！」

Sゼロノスは両腕をクロスさせて構える。

プロキオンクロウがキラリと光ったかのように見えた。

一直線にシュライクイマジンとの間合いを詰めると同時に、右拳を一直線に繰り出す。

正確には拳ではなくプロキオンクロウであるが。

今までの速度とは違い、シュライクイマジンは避ける事ができずに双剣で受け止める。

ギリギリギリと音が鳴り、そのまま続いて空いた左腕を振り上げて双剣に狙いをつけて繰り出す。

「くっ！ テメエ遊んでやがったな！！」

力負けている事を理解したシュライクイマジンは力を出し惜しみしていたと思われるSゼロノスを睨みつける。

「僕、そんな事してませんよ！」

出し惜しみする余裕はなかったというのは本当だ。

ただ、今までは力任せに振り回していただけで現在は相手の動きをよく見て繰り出すというスタイルに切り替わったのだ。

もちろん、このスタイルチェンジも最初からあったわけではない。

この戦いで身についたものだ。

両腕が塞がったのを機にSゼロノスはつかさず、右下段回し蹴りを放つ。

太股に一発、そのままふくらはぎにも一発と計二発繰り出してから右足を引き戻す。

そのまま左下段回し蹴りを繰り出して、右同様に計二発繰り出してから引つ込める。

蹴りを食らうたびにシュライクイマジンは苦悶の表情を浮かべている。

効いているという証明だ。

これが陸地なら確実に膝を地に着けているのだが、ここは空中でそのような醜態を晒す事はないのがシュライクイマジンにとっての救いになるだろう。

Sゼロノスの一撃は力+速度で威力は十分な破壊力がある。

常人ならば確実に足の骨が折れているといってもいいだろう。

折れない事はイメージの耐久力によるものだろう。

そのままぶっつけていた両腕を引つ込めてから、その場で両脚を浮かせてシュライクイマジンの顔面に狙いをつけて一直線に両脚で放つ。

速くて重い一撃を。

「べっ!!」

ドロップキックを食らったシュライクイマジンは後方へと飛ぶ。

「逃がさないです!!」

Sゼロノスは場が空である利点を生かして、クルリとバック転をしてから先程より低い位置に足場を変えてから、シュライクイマジンへと向っていく。

「うりゃあああああ!!」

間合いを詰めたら、両手で右足を掴んでそのまま背負い投げをするようにして、シュライクイマジンを救出活動がまだ行われている臨海空港に狙いをつけて投げ飛ばした。

双翼を用いて、ホバリングに持ち込むこともできない。

ドコオンという破壊音が鳴り響き、瓦礫と化した床や天井の材質の一部が粉塵となって煙のように空を舞っていた。

Sゼロノスも両脚を空港に着ける。

瓦礫を押しつけてシュライクイマジンが双剣を構える。

Sゼロノスは構えずにそのまま駆け出す。

構えを取ったシュライクイマジンも駆け出す。

Sゼロノスとシュライクイマジンが同時に跳躍して、空中でプロキオンクローと剣がぶつかる。

「はあっ!!」

左腕を引っ込めて、すぐに別の場所へと攻撃を繰り出すSゼロノス。狙いは右脇腹。

「ぐはあ!!」

プロキオンクローが刺さっていることを自覚して声を上げたのを機に、シュライクイマジンはバランスを崩す。

「りゃああっ!!」

さらに追い討ちとして右腕を引っ込めてすぐに一直線に顔面に狙いをつけて放つ。

今度は盾として使っていた双剣も破壊されて、直撃した。

三本編成のプロキオンクローの内の二本がシュライクイマジンの目に刺さっていた。

「ぎゃあああああ!!」

両手で潰された両目を押さえており、両脚は視界がなくなった事と先程のダメージが抜けていないためフラフラだった。

「終わり、ですね」

(うん)

Sゼロノスの発言にユーノも頷く。

両腕を大きく広げる。

そして、そのまま駆け出しながら広げていた両腕を徐々に収めていく。

「はあああつ！！」

Sゼロノスの姿が一瞬だが、見えなくなった。

テレポーテーションのような超能力を使ったのではない。
ただ単純に速いのだ。

『目では見えない速さ』を駆使しただけなのだ。

Sゼロノスが姿が見えるとシュライクイマジンの後ろに移動しており、両腕も広げていた状態から×字になっていた。

シュライクイマジンの身体に大きな×の傷痕が浮かび上がっていた。
その傷痕が発生源となり、身体の崩壊が始まる。

「ぐ、ぐああおおおお！！」

悲鳴を上げながら、シュライクイマジンの肉体が爆発してやがて爆煙が立った。

臨海空港の屋上にいたので飛び降りる。

着地して前を向くとそこにはなのは、フェイト、はやて、リイン、
ゲンヤがいた。

Sゼロノスはゼロノスベルトのチェンジレバーを右にスライドして
ゼロノスカードを抜き取って裏返してから再びアプセットした。

Sゼロノスが輝き、Aゼロノスとプロキオンに分離した。

「イマジンは？倒したんですか？」

「もちろん。それが僕達の役目だからね」

なのはの問いにAゼロノスが答える。

空港の壁とガラスウィンドウを壊す音が聞こえてくる。

レックスランダーが自動運転で走ってきたのだ。

「その車。お前さんのかい？大量生産してるんなら俺にも分けてほしいんだがなあ」

ゲンヤが冗談半分本気半分で打診してみる。

「ナカジマ三佐！？」

はやてはゲンヤの打診に目を丸くする。

それはなのは、フェイト、リインも同じだった。

「あの車一台ありやどこいっても安心だぞ。火災現場に放置されて

たのに傷どころか熱で溶けた部分も見あたらねえ。こいつがおりや救済活動も随分と楽になるぜ」

「最大乗員数は何人なんですか？」

「二人。それ以上はシートがないから乗れない」

フェイトの質問にAゼロノスは丁寧に答える。

レックスランダーの製造元などを訊かれるとまずいが、このくらいなら大丈夫だ。

「質問です。これってスポーツカーなんですか？」

はやてが拳手して質問してきた。

「多分違うと思う」

Aゼロノスは腕を組んで首をかしげながら曖昧に答える。

「質問は終わり？ だったら僕達は帰るよ」

レックスランダーのキャノピーが開く。

プロキオンが先に乗り込む。

「待ってください！ 最後に、これだけは聞いておきたいんです！」

乗り込もうとするAゼロノスをなのはが呼び止めた。

Aゼロノスはなのはの前に立つ。

「貴方もやっぱりその……ゼロノスカードで『記憶』を代償にしてるんですか？」

なのはの両目には『そうであってほしくない』『できれば違うといつてほしい』というような想いがこもっていた。

（なのは……）

彼女がどのようにしてそのように質問をしてきたのかはわからない。

Aゼロノスは拳を震わせていた。

覚悟はしていた。

この姿で会えば必ずこのような事を訊ねてくるのは想定していたからだ。

だがそれはあくまで『イメージ』でしかない。

そして現実が『イメージ』通りにならない事も知っている。

「君の言うとおりだよ。僕もゼロノス同様に記憶を代価にしている」
なのは何かを言おうとしたが、先にAゼロノスは背を向けてレックスランダーに乗り込んだ。

エンジン音が鳴り、レックスランダーの車輪が回転し始めた。
乱入した時と違い、道ができていたのでそのまま走り出す事が可能だ。

「……行こう」

Aゼロノスはアクセルの役割を果たすレバーを前に倒す。
レックスランダーが走り出した。

*

夜空が星々が輝いていた。

テントを張っていた次元世界に戻ったユーノとプロキオンは毛布に身をくるみながら、目の前で焚いている炎を眺めていた。
ゆらゆらと炎が揺れる。

先程のミッドチルダでの炎とは違う。

『優しさ』のようなものがあつた。

マグカップに入っている酒を軽く飲む。

スクライアの部族にいた頃からアルコールを飲んだ経験はあるので平気だ。

プロキオンがマグカップに入っているオレンジジュースを飲む。

「……………」

ユーノは炎の向こうに立っている慰霊碑と二つの墓を一瞥してから炎に目を向けた。

遡る事新暦0067年。

第七話 「揺らぐ炎を見つめて……」 (後書き)

次回予告

新暦0067年。一つの悲劇が起き、歯車が回り始めた。

第八話 「0067年の悲劇」

第八話 「0067年の悲劇」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

まずは作者の独断と偏見による気になるキャラクターから。

アガサ (金田一少年の事件簿)

電脳山荘事件の際に登場した人物ですけど、正直この人の執念には鬼気迫るものがありましたね。

被害者となる連中はあるものが欠落していたから余計にこの事件は恐ろしく感じましたけどね。

第八話 「0067年の悲劇」

新暦0067年。

今思い返せば本当の意味で僕の『時間』が生まれたのかもしれない。

*

時空管理局本局にある『無限書庫』

制服姿の局員達が本棚とにらめっこをしている中に一人の少年がいた。

少年は本棚の側にいるわけではない。

中央に佇み、宙に浮いている数十冊の本がパラパラと独りでにページが捲られていた。

少年はそれらを速読し終えると、すべて元にあった本棚に戻した。数十冊の本は引っ張られるようにして本棚に収まっていく。

その光景は初めて見る者にとっては手品としかいいようがない。

『魔法』が蔓延している世界に『手品』というのも変な話ではあるが。

少年の一連の動きを見ていた局員達は『無限書庫』に来るのが初めてなのか目を丸くして口をポカンとした間の抜けた表情をしていた。「見るのは初めてかい？」

局員の一人が間抜け顔をしている局員達に近寄ってきた。

「あ、はい……」

仕事をサボっているのを注意されと思ったのか身構えていた。

「俺達も最初にアレを見た時は驚いたねえ。どんなに優れた魔導師でもあんな事はできないからね」

「そうなんですかあ」

見慣れているのか、その局員は尊敬の眼差しで少年を見ていた。

「もしかして、未整理状態だった『無限書庫』を運営可能に持ち込んだのって……」

彼等は噂話で聞かされた事がある。
未整理状態だった『無限書庫』を運営可能に持ち込んだ者がいるという事を。

その人物は少年であるという事を。

『闇の書事件』の解決功労者の中にその人物がいるという事を。

「そう。彼だよ」

初心者局員達は少年を見ていた。

少年の名は。

ユーノ・スクライア。

年齢十一歳。

彼は一人の司書として働いていた。

局員達にそのような紹介をされている事を知らないユーノは黙々と作業を続けていた。

しかし、実際にはというと。

（お腹すいたな。今日くらいは食堂で食べないと、なのはに怒られるもんなあ……）

一心不乱に仕事を打ち込んでいるとは逆に昼食のことを考えていた。
今週に入ってから、火の通った食事はほとんど食べていないような気がする。

食べたとしても夜中に食べたカップラーメンくらいだ。

その事を高町なのはに包み隠さず正直に話したら、目に涙を浮かべながらも本気で怒ってきた。

女の子を泣かせたという自覚が初めて出た時だったりする。

ここ数日おろそかになっていたため、そろそろ説教が飛んできそうなのでユーノはキッチンと食事を取る事を選んだ。

正午になったので、旧式ではあるがベルが鳴る。

他の部署は正午になると全員休憩をとることが出来るが『無限書庫』ではチーム編成で休憩を取るようになっていて。

今週はユーノが所属しているチームは比較的楽に活動できるようになっただけ。

「それじゃお昼行ってきました」

ユーノが手を振って、『無限書庫』を出て食堂へと向かった。

食堂は正午という事もあって、色んな服装をした局員が賑わっていた。

教導官に執務官に提督に陸士隊などひとつの組織に部署ごとにこんなに制服分けする必要があるのかどうかと思うと考えてしまう事がある。

私服姿で業務している自分が言えることではないのだが。

厨房で料理をしているおばちゃんに声をかける。

「すみません。日替わり一つ」

「あいよ」

ユーノは食堂に行っても、何を食いたいかなんて考えたりはしない。食が細いわけではないが、不味くなければ何でも食べれる健啖家資質だからだ。

本日の日替わりは白米に味噌汁に白身魚のフライに漬物だ。

海鳴で高町家で何度か白米を食べていくうちにパンより白米の方が好みになっていた。

「いただきます」

合掌して、お碗を左手に持って味噌汁をすする。

食道を通過して、身体の内部が温かくなっていくような感じがした。

「同席いいですか？」

「どうぞ。って……」

頭上から声がしたので、ユーノは特に気にせずに相席を許したが聞き覚えのある声なので顔を向ける。

教導隊の制服を着たなのはと武装隊の服を着たヴィータだった。

「ユーノ君。食堂で会うのは久しぶりだね」

蟹クリームパスタをトレイに乗せたなのはが笑顔で言った。

「お前、私服だからこーゆー時には目立っていいよな」

から揚げ定食をトレイに乗せているヴィータがからかいながら向かいの席に座る。

「『無限書庫』まで専用の制服着るように強要されたらさすがにわからなくなるね」

ユーノは白身魚のフライをかじる。

「二人はこれから任務？」

「ううん。明日の任務の最終打ち合わせ」

なのはは左手にフォークを握ってパスタをくるくると巻いて口の中に入れる。

その仕種自体は特に不自然のようなものを感じる事はないのだが、

ユーノには何か違和感のような物を感じた。

「ある次元世界の捜査なんだと」

ヴィータが面倒臭そうにから揚げを一口の中に放り込む。

「なのはやヴィータが出るって事は危険な任務？」

高ランクの魔導師二名をかりだすという事はそういう意味合いを取るには十分なものだった。

「さーなー。捜査任務だから保険かけてんじゃねーの」

ヴィータの言い分は尤もだった。

「備えあれば憂いなし、だよ」

なのはもヴィータと同じ考えのようだ。

「とにかく気をつけてね。特になのは」

「ふえ？」

「最近激務なんじゃない？少しは休みなよ」

「ありがとう。でも平気だよ」

そう言いながら、なのはは両手を拳にして『元気です』とアピールする。

先程同様に妙な違和感をユーノは感じる。

「そう。それならいいんだけど……」

今までだってどんな危険な任務から無事に帰ってきた。

だから今回も大丈夫だろうとユーノは思った。

「あ、そうだユーノ君。今日は忙しいの？」

「クロノからの請求はないから割とゆったりしてるよ。それがどうかしたの？」

クロノ・ハラオウンの請求がない。

それが『無限書庫』に勤めて二年になるユーノにとってはどれだけありがたい事になるだろう。

クロノの請求はいつも重要性が高く、それでいて難解なのだ。

何度休暇を潰されて、何度も直接殴り飛ばしてやろうかと考えた事もあったりするがそれは口には出さない。

「じゃあさ、今日の夜。ウチにこない？みんな会いたがつてるしさ」

なのはの折角の誘いを無碍にする訳にはいかない。

「わかった。何もなかったら海鳴に行くよ」

「うん！」

なのはの笑顔を見ながらも、ユーノにしてみれば曖昧な約束の取り付け方で申し訳ないと思っていたりする。

「なのは。さつさと食わねーと冷めちまうぞ？」

から揚げ定食を半分くらい食べ終えているヴィータがなのはを促した。

ユーノ・スクライアの周辺は相も変わらず平穏だった。

*

ユーノとプロキオン（イマジン）が足を踏み入れている次元世界。

揺らいでいる炎の奥には自分の内なる部分が見えているのではとユーノは酒の入ったマグカップを片手にぼんやりと考えていた。

（あの頃は何も変わらないと思ってた。いつまでもこんな順風満帆

な毎日や時間が送れると思ってたんだよね……）
マグカップに入っている酒を一気に飲んでから、ボトルの酒を注ぎ込む。

注ぎ込まれた酒をユーノはじっと見ていた。

*

夜となり、本日の業務が終了となった。

『無限書庫』はいまだに業務に徹している者達もいるが、ユーノは定刻で終了だった。

「お先に失礼しまーす」

とユーノは退勤の際に言うお決まりの台詞を口にしながら『無限書庫』を出た。

なのはは多分先に海鳴に戻っているのだろつと推測したユーノは転送ポート室へと向う。

「第97管理外世界をお願いします」

ユーノは転送ポートの捜査を担当している局員に告げる。

局員は素早く操作しながら、ユーノに注意事項を告げていく。

ユーノはわかりきっている事だが、万が一の事があるかもしれないと思つて真剣に耳を傾けていた。

その五秒後にユーノの姿はなくなった。

第97管理外世界――地球へと向つたのだ。

地球――海鳴市に到着したユーノは高町家に向かう際に何かお土産を買おうと思い、高町家からずれた座標を依頼していた。

「お菓子とかスイーツとかが普通なんだけど、なのはの家はそのお菓子和スイーツで生計立ててるからこの手は使えないんだよね」

ユーノは何を買おうかと悩んでしまう。

「飲み物かなあ。お酒のつまみで喜ぶのは士郎さんだけだし……」

高町士郎は酒類は何でもござれであるが、他の高町桃子、恭也、美

由希がそうというわけではない。

それに桃子と恭也は飲酒可能だが、美由希はまだ未成年だ。

この世界……日本では飲酒は二十歳にならないといけならしい。その事を知った時、自分はどうなるのだろうとユーノは考えた事がある。

スクライアの部族の教育の一環としてアルコールに対する免疫をつけるための訓練を受けているので、自分は常人よりも酒には強い方だ。

しかし、十一歳の少年が飲酒というのは世間的にはいい顔はされないためユーノは自粛することにした。

「食材かなあ。でももう作ってたら嫌味になっちゃうしなあ」

スーパ―等で高級な食材を購入してもいいが、既に料理を作り終えている中で持ってきたら嫌味になる可能性は十分にありえる。

散々考えたが、特に何かいい案が浮かぶ事もなくユーノは酒屋に入って、酒とジュースを購入する事にした。

酒屋に入って、高級ワインを手にとカウンター兼レジにいる店主にじーっと見られていた。

（やっぱり僕が一人で酒屋に入るのって不自然なんだろうなあ）

十一歳の少年が一人で酒屋に入ってワインを手にと取るというのはどうみても不自然でしかない。

ユーノは買い物カゴに高級ワインと1.5リットルのジュースを数本入れてレジへと向かう。

「すみません。お会計をお願いします」

店主は何も言わない。

ただ黙ってユーノを見ていた。

「あの」

ユーノは恐る恐る声をかけてみる。

「言わんでいい。俺には何もかもわかってるんだからよ……」

「はい？」

店主が妙な事を口走ったのでユーノは訊ね返す。

「飲んだくれの両親に買いにいかされたんだろ？言わんでもわかってる！」

店主は涙ぐんでいた。

（もしかして僕、はやてと同じ目にあつてたりする？）

ユーノは以前、八神はやてと談笑していた時の話を思い出していた。

ヴォルケンリッターの私服を買いにいった時の事らしいのだが、洋服店の従業員達に家庭環境を誤解されて、定価の七割引で買えたという事だ。

「あのですね。僕は……」

ユーノは何とか釈明しようとする。

「あんたあ！何大声だしてんだい!？」

カウンターの奥から店主とは対照的な容姿とスタイルをしている女性が出てきた。

（この人の奥さんなんだろうけど、海鳴の女の人たちって老化って言葉に縁がないのかな……）

「おお。母ちゃん。それがさあ聞いてくれよお。語るも涙聞くも涙つてやつでさあ」

（僕、何も言っていないですよ……）

ユーノの言うとおり、彼は自分の身の上を何一つ語っていない。夫婦間で何か話し合っている。

「あの」

ユーノはもう一度釈明しようとする。

店主夫人も涙を流していた。

「アンタもロクでもない親の元にいるんだねえ。いいよ。そんな子に定価で売るなんて事はしない。残った金はアンタの小遣いにしな？ね、それがいいよ」

店主夫人は涙を流しながら、会計を済ませてくれた。

定価の八割引でユーノは購入できた。

「あ、ありがとうございます……」

ユーノは感謝二割、申し訳なさ八割の気持ちで言葉を発した。

高町家への入口前に立ったユーノはインターホンを押す。

『はい。どなたですかあ？』

なのはがリラックスしているような声を出していた。

「ユーノです」

『あ、ちよつと待っててねえ』

戸が開き、私服姿のなのはが出てきた。

「いらつしゃい。ユーノ君」

「今日はありがとう。あ、これみんなに」

ユーノは軽く会釈してから酒屋で買った品の入った袋をなのはに見せた。

「え？こんなに！？いいの？高かつたんじゃ……」

袋の中身を見て、なのはは目を丸くしていた。

「いやそれがね……。僕もはやてと同じ目にあっちゃって……」

ユーノは後頭部を書きながら苦笑している。

「にははは。しょうがないよ……」

なのはも苦笑するしかなかった。

「さ、上がつて。もう晩御飯できてるから」

「お邪魔します」

ユーノは高町家へと足を踏み入れた。

リビングに踏み入れると、高町家全員がテーブルを囲っており後はなのはとユーノが座るだけだった。

「久しぶりー。ユーノお」

美由希が手を振って迎えてくれる。

「よく来たな」

恭也が短い言葉で応じてくれる。

「久しぶりユーノ君。少し背伸びた？」

桃子が笑顔で今日の夕食のおかずをテーブルの上に並べている。

「お父さん。ユーノ君がコレを……」

なのはユーノから預かった買い物袋を新聞を読んでいる士郎に見せる。

「いや悪いねえユーノ君。いつももらってばかりで……」

士郎はユーノに気を遣わせていることを詫びながらも、もらった高級ワインに目が泳いでいた。

「いえ。お給料もらっても僕一人の生活じゃ結構余るんですよ……」

ユーノの何気ない一言に桃子、恭也、美由希はユーノを見る。

「ユーノ君。月にどのくらい貰ってるの？」

「結構余るって事はお前倅約家なのか？」

「ねえねえ。それって私のお小遣いより多い？」

単純な好奇心なのだろうか三人はずずいとユーノに詰め寄ってくる。

「ええとですね……」

ユーノは近寄っている三人に耳打ちする。

反応はというと、桃子と恭也は「おお」と感心し美由希は「負けた……」と打ちひしがれていた。

「おいおい。ユーノ君がいくら一人身だからって集ろうなんて考えるんじゃないぞ」

士郎が早速高級ワインをグラスに注ぎ込みながら釘を刺していた。

（温かいな……）

ユーノは高町家のこの空気が好きだった。

温かくて優しくて心地よい。

赤の他人も包み込んでくれる事が純粹に嬉しかった。

「さ、みんな食べるぞ」

士郎の一言に全員が席に着いて合掌し、夕食を食する事になった。

本日の夕食はサラスパとビーフシチューだった。

夕食を食べ終えると、ユーノは美由希のリクエストに応える為にフエレットになっていた。

スリスリされたりしてユーノとしては複雑である。

美由希の表情は心底幸せそうだった。

なのははグツタリしたユーノを両手で優しく抱きかかえて、ソファ

に置く。

フレットから人間に戻ってもユーノはグツタリしていた。

「ユーノ君。大丈夫？」

なのははコップに入ったジュースを渡しながら心配する。

「……久しぶりだったからね。正直参ったよ」

ユーノは引きつった笑みを浮かべながら答えた。

コップを受け取ってジュースを一気飲みして落ち着いた表情を取り戻す。

「ああ。あの感触はユーノ（フレット）じゃないと無理だね」

美由希は触り心地を思い出しながら浸っていた。

「まあ、お姉ちゃんったら……」

なのはは姉の若干行き過ぎた行いに呆れながらも笑みを浮かべていた。

「ユーノは今日は泊まるのか？」

「いえ。明日も仕事がありますので帰ります」

恭也は夜も遅くなってきたのでユーノの今からの事を訊ねるが、帰ってきたのは仕事している人間なら誰もが多分一度は言うような台詞だった。

「若いからってあまり根を詰めるんじゃないぞ」

「はい」

士郎が父親のようにして忠告してきたのをユーノは素直に首を縦に振った。

*

翌日となり、ユーノは時空管理局本局『無限書庫』で業務に勤しんでいた。

彼の周りに浮いている数十冊の本は役目を終えるようにして、本棚へと収まっていく。

（やっぱり、なのはの家の食事が一番美味しいな……）

昨日の事を思い出しながらもユーノは業務を怠る気配はない。

（そういえば、なのはとヴィータは今日捜査任務だけど無事にやれてるかな……）

今日はなのはとは会っていない。

時間が合えば挨拶はしておきたかったのだが、合わなかったのだから仕方がない。

（それにしても何だったんだろ……。あの違和感は……）

ユーノはなのはの仕種で感じた違和感を思い出していた。

（悪い予感じゃなきゃいいんだけど……）

外れてほしい予感なので口には出さない。

声に出せばそれが現実になりそうだからだ。

「スクライア司書！いますか！？」

業務に集中しようとしたユーノを制服局員が呼び止めた。

「はい」

ユーノは呼ばれた理由を知る為に制服局員の側まで寄る。

無重力空間なので歩み寄るといふよりはふわーっと寄るといふ表現の方がいいのかもしれない。

「スクライア司書ですか？」

制服局員が真剣な表情で確認する。

「はい、そうです。ユーノ・スクライアです」

「そうですか……。今から言う事を聞いても心を乱さないようにしてくださいね」

「は、はい……」

「高町士官が未確認に撃墜されました……」

「え？」

制服局員の一言をユーノは理解できなかったため、間の抜けた声を出す。

「もう一度言いますよ。高町士官が未確認に撃墜されました」

ユーノがその言葉をきちんと理解するのに要した時間は十秒必要だった。

*

炎がゆらゆらと揺れて、過去の事が映像で映し出されているのかユーノはじつと見つめていた。

（悪夢や悲劇は必ずといっていいほど何の前触れもなくやってくるんだ……。そしてみんな決まってこう言うんだ）

それは自分も例外でない事をユーノは知っている。

何故なら自分もそれを思い、そして口に出したからだ。

どうしてこんな事に……。ってね。

夜空の星は光り輝いていた。

第八話 「0067年の悲劇」(後書き)

次回予告

一度は閉ざしていた『力』への門。

少年は門を開き、踏み入れる決意をする。

しかし、少年に突きつけられたのは厳しい現実だった。

第九話 「0067年の決意と挫折」

第九話 「0067年の決意と挫折」（前書き）

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

まずは作者の独断と偏見による気になるキャラクターから。

クマ（ペルソナ4）

コイツを見て最初に思う事は『何この物体？』でしょう。

そして進化すると皮がむけるんですけど、やっぱり出るコメントは

『何なの？コイツ』と言ってしまいます。

いい意味で予想を裏切ってくれるキャラです。

第九話 「0067年の決意と挫折」

新暦0067年。

僕はある『決意』をした。

だが僕は『挫折』を味わった。

*

ユーノ・スクライアは制服局員に案内されるまま、ICU（集中治療室）の前に足を運んでいた。

そこには先にフェイト・Ｔ・ハラオウン、アルフ（人型）、八神はやて、シグナム、ザフィーラ（獣）、クロノ・ハラオウン、エイミイ・リミエッタ、リンディ・ハラオウン、レティ・ロウラン、そして高町なのはと同じ任務に就いていたヴィータである。

誰もがICUのドアを睨んでいた。

ちなみにシャルはICUの中でなのはの治療に当たっていた。

ユーノはICUのドアを一瞥してから、なのはと同じ任務に就いていたヴィータを見る。

普段の強気な表情はなく、俯き加減で暗かった。

「ヴィータ……」

そんな状態の人間に起こった出来事を蒸し返すような事はできるだけしたくないが、事実をキチンと知る為にユーノは訊ねる事にした。

「……ユーノ。なのはの事が……」

ヴィータも粗方の検討はついていたのか、特に表情を変えずにユーノを見る。

「……何があつたの？」

ユーノとて感情が揺れないわけがない。

でも、ここで揺れて感情の赴くままに行動すればヴィータはなお自分を責めるだろうと察したため感情を必死に抑えていた。

「ユーノ君。その……なるべく……な？」

はやてが車椅子ではなく、杖を突きながら穩便に終わらせるように頼んでくる。

彼女は歩けるようになったのだが、長時間というのはまだ無理なため杖を使っている。

「わかつてる……」

ユーノは首を縦に振ってからヴィータに顔を向ける。

「……なのはあたしを庇って堕ちたんだ……。あたしがしっかりしてりゃこんな事にはならなかったのに……」

ヴィータは全身を震わせながらも口を開き始めた。

「なのは、言うんだよ。大丈夫？つてさ。堕ちてからも自分の事よりもあたしの事ばかり心配してさ……。たまんねーよ……」

ヴィータはその時の事を思い出したのか、両手で頭を抱えていた。「あたしが悪いんだ……。あたしが……」

ヴィータは壁に背を凭れさせながらずるずると座り込んでしまった。

「ヴィータの責任じゃないよ……」

ユーノの言葉にヴィータは顔を上げ、他の面々もユーノを見ていた。

「なのはを魔法の世界に引き込ませた僕の責任だよ……」

ユーノは両拳を震わせながら呟く。

「それを言ってしまうばリーゼ達に本局の細部を案内し、なのはに魔導師としての進路しかないように導く結果になってしまった僕にも責任がある。君やヴィータの責任じゃないよ」

クロノがユーノとヴィータがこれ以上責めないように、自身にも責任がある事を告げあえて貧乏くじを引こうとする。

「クロノ君……」

エイミイも不安げな表情でクロノを見る。

「今は誰のせいでそうだったのかを糾弾するのは後にしましょう。そんな事をしても、なのはさんは喜ばないわ」

リンディが下手をすればフェイトやはやても自分の責任だと言いかねないと判断し、その場にいる全員に打ち切るようにした。

「とにかく、もう夜も遅くなってるからあなた達は帰りなさい。私とリンディが残っておくから」

レティがICUにいる全員に変えるように促す。

だが、それで変えるわけがないというのも確かだ。

「といってもそれで素直に帰れるわけないものね……」

レティも予想の範疇内だったため、さして驚く様子はなかった。

ICUの照明が消えたのはそれから六時間後の事だった。

*

空は雲がチラチラと泳いではいるが、太陽は顔を出している。

リンディ、ユーノ、ヴィータ、フェイトの四人は現在海鳴市に来ていた。

高町家の面々は、なのはが重傷に遭い入院しているという事を知ってはいる。

昨日にリンディが連絡したからだ。

今でもその時の高町夫妻の声の低さは忘れられない。

まるでこの世の終わりが訪れたかのように低い声色だった。

「ユーノ君、ヴィータさん。貴方達までついてくる事はないのに……」

……

リンディとしてみればユーノとヴィータが責任を感じているという事は重々承知している。

「いえ……。やっぱり……」

「あたしのせいですし……」

ユーノもヴィータも俯き加減ながらも告げる。

（責任感が強いというのも正直考えものよね……）

二人の長所を穢すつもりはないので、リンディは内に秘める事にした。

責任感が強いというのは時に長所となり、短所にもなる。特にこういう仕事に就いているとなると尚の事だろう。

今回は短所の部分表に出ている。

恐らく、一生纏わりつく因縁になるだろうとリンディは予測していた。

（こればかりは外からのケアは無効になっちゃうものね……）

外的なものでなく、心的なものである以上克服するのは当人達次第なのだから。

（フエイト）

（はい義母さん。^{かあ}どうしたんですか？）

リンディは念話の回線を開いて、フエイトを呼びかける。

（今からなのはさんのご両親との対面になるけど、ユーノ君とヴィータさんが少しでも妙な行動を取ったら力づくでいいから止めてほしいの）

（あの、妙な行動って……、たとえば……）

フエイトはあたふたしながらリンディを見る。

（そうねえ。ユーノ君もヴィータさんも海鳴のいえ、日本の知識を有しているから『切腹』なんて事を考えてなければいいのだけど……）

（せ、切腹！？）

リンディの一言に更にフエイトはあたふたする。

フエイトとて日本に生活して二年近く経過しているので、一応『切腹』というものは知っている。

日本の古い風習で主に不祥事などを犯した際にその責任をとるかたちで用いられるものである。

なお切腹にも概念はひとつではなく、主君の後を追う際に用いる『追い腹』や無念の際にやむなく用いる『無念腹』というものがある。不祥事などの責任を取る際に用いる切腹を『詰め腹』という。

（いくらなんでもそれはないと思いますけど……）

フェイトはリンディの予想が杞憂だろうと思いながら、件の二人を見る。

『切腹』しそうな雰囲気十分に纏っていた。

（……わかりました）

フェイトは腹を括る事にした。

高町家に入って、フェイトが早速感じた事は今までと違う空気が漂っていた事だ。

今まで入り慣れた高町家が初対面の家に感じるほどにだ。

リビングには八人が正座していた。

（ユーノとヴィータは……）

フェイトは切腹候補生ともいうべき、ユーノとヴィータを見る。

全身から『なのはの重傷は自分の責任』というオーラが噴き出ていた。

（義母さん。本当に力づくで止めていいんですか？）

フェイトが念話の回線を開いて、リンディに訊ねる。

（穏便に済めばそれでいいけど罪の意識を感じている二人ですもの。何をしてくるか正直わからないわ。そういう兆しを貴女が感じたら止めてほしいの。責任は私が持つわ）

（わかりました……）

フェイトはリンディから『承認』を貰っても表情は決して晴れなかった。

リンディとユーノとヴィータは深々と頭下げて謝罪する。

正座状態から深々と下げているので、土下座状態になっていた。

（やっぱり怒ってるよね……）

フェイトも三人に遅れながら頭を下げながら、高町家の面々の心理状況を推測する。

「頭を上げてください」

士郎が四人に声をかける。

その声色は普段のような明るいものではなかった。

娘が重傷に遭っているのに明るい声を出すと言うのも無理なものだが、ユーノとヴィータが何かを思い誤った行動を取るには十分な材料になるだろう。

フェイトはユーノとヴィータを見る。

二人とも、ポケットなどから光物（刃物）を出す気配はない。

（大丈夫……。大丈夫……）

フェイトは念じる。

「なのはもこの仕事をする事になった以上、このような目に遭う事は覚悟はしていたと思います。人を助けると言うのは決してきれいな事だけでは片付かないものですからね」

士郎の指摘は管理局もとい命の危険に晒されるものには至極当然に背負わなければならぬ事だ。

桃子、恭也、美由希も黙って聞いている。

「リンディさん。なのは今の仕事をやめたいと言っていましたか？」

桃子がリンディに訊ねる。

「いえ。まだ麻酔が効いている状態なのでわかりません」

リンディが正直に告げる。

「もし、なのはが意識を回復して今の仕事に対して『やめたい』と言わなければ覚悟を決めていると思います。もし覚悟を決めていないならば……」

「言うかもしれない、という事ですか……」

桃子は首を縦に振る。

その後、高町家ではなのはの見舞いの際の手続きなどが綿密に話し込まれていた。

リンディとフェイトの考えは杞憂で終わった。

だがフェイトは気付いていなかった。

ユーノの拳が震えていたという事を。

*

高町なのはが入院してから一週間が経過した。

*

ユーノは業務を終えてから、時間さえあればなのはの元に顔を出していた。

ベッドから離れるにはまだまだ時間がかかるらしく、寝たきり状態になっていた。

意識はハッキリとしているらしく、自分が訪れた際には笑顔を向けてくれた。

普通の状態なら、そんな笑顔を見て心が休まるのだが今は違う。

ただただこちらを気遣わせないように取り繕っているように思えて、痛々しいとしか言いようがなかった。

ユーノは近くにある椅子に座る。

「今日は僕以外に誰か来た？」

「ヴィータちゃんとはやてちゃんが来てくれたよ」

酸素マスクをつけたままだがきちんと話せるし、その声を聞く事是可以する。

（参ったな……。なのはの姿を見るたびに突きつけられるよ……）

自分が無力である事を嫌でも知らされる事になる。

今のままで言いわけがないと考えさせられる。

その度に拳を震わせ、唇をかみ締める事になる。

「ねえユーノ君」

「ん、なに？」

「わたしね、こんな大怪我に遭って、初めて自分の限界がわかったような気がするんだ……」

「自分の限界？」

「うん。魔法があれば何でもできるって思ってたんだよ。今まで自

分ができなかった事が魔法を使ってできるようになったり、魔法を使ってわたしにしかできない事があるって思ったんだ……」

なのは魔法に関わる以前は高町家にいながらもどこか居場所のなかった存在だという。

末っ子の利点である『ワガママ放題』を得られなかったらしい。

なのはが魔法を知り、それで今まで到底できなかった事ができるようになった時の感動は恐らく自分が考えている以上のものだろう。

なのはとて人間。知らない間にその感動が『快樂』に溺れる事はごく自然の流れとしてもよいだろう。

快樂に溺れるといずれはツケを支払わなくてはなくなるのもまた自然の『掟』ともいえる。

「ユーノ君。だからね。このケガはわたしのせいだからユーノ君が自分を責めることはないんだよ」

恐らくヴィータにも似たような事を言ったのだろう。

「……そうだね」

ユーノはなのはの言葉に応じた。

しかし、それが表面上のものであることは誰から見てもわかる事だった。

病室を出て、ユーノは拳を強く握り締めながら廊下を歩いていた。

『強くなりたい』

その気持ちがふつふつと奥底から湧き上がっているのが実感できた。

「強くなる……。絶対に……」

ポケットの中から携帯電話を取り出して、ユーノは通話状態に連絡を取った。

時空管理局本局の自然が満ち溢れている区画。

そこにいたのはアルフ（人型）、ザフィーラ（人型）の二人だ。

「あれ？アンタも呼ばれたのかい？」

「ああ」

アルフは自分以外も呼ばれた人物が意外な人物なので目を丸くして

いた。

「スクライアは一体なにが目的で我等を？」

「さあねえ。ただ電話越しからだけどユーノ、おかしくなかったかい？」

アルフは電話越しのユーノの声色から推測を始める。

「それは感じたな」

ザフィーラは腕を組んで、先程自分にかかってきた電話でのやり取りを思い出す。

「すいません二人とも。呼びつけておいて遅れてしまつて」

二人を呼びつけたユーノが歩いてきた。

「……！」

ユーノの表情を見てアルフとザフィーラは目を大きく開く。

それは今までに見た事がない表情だった。

『後悔』、『怒り』、『嫉妬』、『悲しみ』が入り混じり覚悟を決めた『決意』をした現在の表情をしていた。

「ユーノ！？アンタ一体……」

「スクライア……」

二人は何故ユーノが今のような表情に至るまでになったのかの原因はおおよその見当がついていた。

「今日は二人にお願いがあつて呼んだんです」

普段ユーノはアルフとは気兼ねない言葉遣いをするが、ザフィーラに対しては同姓であり明らかに見た目的に年長であるためか丁寧語になつてしまう。

だからこの二人がいるときは大抵丁寧語を活用してしまうのだ。

両手両膝を地に付けてユーノは深々と頭を下げる。

「お願いします！僕を……僕を強くしてください！！」

土下座をしながら懇願した。

「ユーノ。アンタ……」

「……………」

アルフとザフィーラはいきなりの行動に面食らってしまう。

「頭を上げてくれ」

ザフィーラが土下座を解くようにユーノに告げる。

ユーノはその体勢のまま、顔だけ上げる。

「じゃあ……………」

了承してくれたのかとユーノは解釈する。

「一つ聞きたい。何故我等だ？強くなりたいのなら高町やテストロツサやハラOWN執務官など他にもいるだろう」

「あー、ユーノはアンタが挙げた奴等には絶対に頼まないと思うよ」「何故だ？」

こういう機微はどちらかというときザフィーラよりアルフの方が長けていたりする。

「まあ単純になのはやフェイトには絶対頼まないだろうねえ。男のプライドが許さないだろうし。同姓だけどクロノに頼むってこともありえないしねえ……………」

アルフは手を顎に当てて訳知り顔で言う。

「なるほど……………」

ザフィーラはアルフの解説に頷いている。

「だが我等は魔力等ではお前とさほど変わりはないぞ」

「お願いします。魔力もですけど、僕は力が欲しいんです！！単純に『暴力』という『力』が！！」

「ユーノ……………」

アルフは初めてユーノの悲痛な叫びを聞いた。

「奴等を見ていたからその結論に達したのか……………」

ザフィーラの言う『奴等』はユーノにも隣にいるアルフにも理解できた。

奴等……チームデンライナー、ゼロライナーだ。

二年前、彼等は現れ自分達が到底解決できない出来事を力づくで解決した。

極めれば純粹な『暴力』を用いているといっても過言ではない。

当時九歳の少年がその光景を見せられれば『魅せられる』のは自然の流れと言ってもいいかもしれない。

「でもさユーノ。アンタは魔導師だからその……、どんなに頑張っても良太郎達にはなれないよ」

アルフは申し訳なさそうに、現実を打ち明ける。

「それでも僕は強くなりたいんです！たとえたとえ……」

ユーノが再び俯く。

「悪魔と契約を交わす事になっても……！」

再び顔を上げる。

その双眸には迷いがない。

先程言った事をやりかねないところらが感じてしまうほどに。

「どうしよつか……」

「……………」

アルフが最終決定権をザフィーラに委ねる。

「条件がある。お前のこれからする鍛錬にシャルを同伴させる」

回復系のシャルを巻き込むという事はそれだけ苛烈な内容になるのだろうとそこにいる誰もが理解できた。

「ありがとうございます！よろしく願います！」

ユーノは深々と頭を下げた。

*

それからユーノは通常の業務と、なのはの見舞い、そして秘密裏の鍛錬という大人でも正直悲鳴を上げるような苛烈な生活を送る事になった。

しかしユーノは弱音を吐くことなく、日々時間を刻んでいた。身体に節々に小さな傷ができ、目の下にクマができるがそれでも彼

は前を向いて歩いていった。

妙な話だが、自分が自分の為に『生きている』と実感できているのだ。

『強くなる』と決めたのはいいが、目標もなく漠然と励むのは決して賢いとはいえない。

人は目の前に目標が『ある』と『ない』では取り組む姿勢が全く違うという。

ユーノも『強くなる』と目標を立てた以上、漠然と取り組む気はない。

今の目標は近々行われる『魔導師ランク試験』である。

そこで現在登録されているランクを上回る事が現在の目標だ。

「ユーノ君。大丈夫？」

辛うじて起き上がったなのはに心配されていた。

「え？大丈夫大丈夫。最近仕事とか忙しくてね」

笑いながらも、なのはには自分が鍛錬している事を隠している。

打ち明けてもよかったのだが、理由を聞かれるのは必至だ。

そこで行き詰るのはわかりきっている事だった。

「なのははどう？リハビリとかは？」

「来週辺りから始まるんだって。元の状態に戻るには一年くらいのリハビリが必要だって」

なのはは強い瞳をユーノに向けていた。

（なのはは立ち上がる。諦めていないんだ。もう一度空を飛ぶ事を……）

ユーノにしてみればそれは『励み』になった。

「ありがとう。なのは」

「ふえ？」

いきなり礼を言われたのだから、なのはでなくても首を傾げなくなるものだ。

魔導師ランク試験会場にはユーノを始め、当日の受験者やその同伴者などで賑わっていた。

ユーノの同伴者としてアルフ、ザフィーラ、シャマルの三人がいた。彼がこの試験に受ける事は他の面々は知らない。

「それでは受験者の皆さんはこちらにお願いします」

試験官が拡声器を持って、案内する。

「それじゃ行つてきます」

「気をつけなよ」

「健闘を祈る」

「頑張つてね。ユーノ君」

三者三様に応援してくれた。

こうしてユーノの『力』への探求の最初の試練が始まった。

それから四時間後。

魔導師ランク試験も運転免許試験のように即日の結果が発表される事もある。

しかも魔導師ランク試験の場合、合格、不合格関係なく理由までわざわざ通知してくれるのだ。

合格者にとってはそのような通知は特に関係ないが、不合格者にとってはほとんど『死』の宣告に匹敵するものだったりする。

「受験番号19944989の方！」

試験官が拡声器を持って、呼びつけてきた。

「はい！」

ユーノは試験官の前に立って、封筒を受け取る。
封筒の中に入っている一枚の用紙を広げる。

受験番号：19944989

氏名：ユーノ・スクライア

年齢：十一

結果：不合格

理由：貴方は防御や補助という分野には秀でています。しかしその反面、魔法による攻撃に関して は平均以下となつています。今取得しているランクより上を目指すには避けては通れない部分です。

傾向と対策：貴方が今後、再受験をするのならば止めはしませんが今以上に魔力が向上する事はありません。今貴方の魔力はピークを迎えています。魔導師の魔力のピークには年齢は関係ありませんので気を落とさないように。

「……………」

不合格通知を握ったまま、ユーノは硬直していた。

アルフ、ザフィーラ、シャルが背後から不合格通知の内容を覗き見る。

「……………」

（コレ、どうする？）

（何とも言えん。シャル、何とかならんか？）

（無茶言わないで。今の状態のユーノ君に何を言えつての！？）

念話の中でアルフ、ザフィーラ、シャルは励ましの言葉をかけるべきか否かを会議していた。

正直、下手な事を言えば確実にユーノは立ち直れなくなるだろう。

十一歳の少年は『魔導師としての寿命を既に迎えている』と言われているのだ。

いわば彼が求める『強さ』の道が閉ざされた事になる。

「参ったな……。魔導師としてはもう強くなれないって……」

乾いた笑みを浮かべながらユーノは茜色の空を見上げていた。

ユーノ・スクライアへの『力』を得る道は『挫折』から始まった。

*

揺らぐ炎を見ながらユーノは右拳を見ていた。

（アレから四年になるんだ……）

今の自分に見てみれば些細な出来事だと受け止める事ができる。

「どうしたんですか？ ユノさん」

「ん？」

隣に座っているプロキオン（イマジン）が心配してくれる。

「君と出会う前の事を思い出してたんだ」

ユーノは空になったマグカップに酒を注ぐ。

魔導師として、これ以上は強くなれないといわれた僕だけとそれでも『強くなる』っていう気持ちに衰える事はなかったんだ。

夜は長い。

第九話 「0067年の決意と挫折」(後書き)

次回予告

断たれた魔導師としての成長への道。

しかし、少年は自らの牙を研ぐ事をやめない。

少女はもう一度翼を広げる。

第十話 「0068年 復活の翼」

第十話 「0068年 復活の翼 研ぎ澄まされる牙」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

ユーザー登録及びお気に入り登録してくれている皆様。

いつも感想を書いてくれている皆様。

第一部から第三部まで累計百二十話に到達しました。

そんなわけで第一部から第三部までで名勝負だと思った戦いはどれかをアンケートしたいと思います。

お一人様。最高三つまでとします。

奮ってご参加ください。

第十話 「0068年 復活の翼 研ぎ澄まされる牙」

0067年補足 高町なのはが重傷に遭うという身内間で大きな出来事が起こったが、その陰に隠れた出来事がいくつかある。その中に『フェイト・T・ハラウンの執務官試験の不合格』がある。不合格原因は、自身の力量不足か親友の容態が気ばかりで集中できなかった事によるものだが真相はフェイト本人にしかわからない。なお、コレがネタとして使われてフェイトが散々からかわれたりするのだがそれはまた別の話。

*

0068年

ユーノ・スクライアは今日も黙々と『無限書庫』で業務に勤しんでいた。

無重力状態なので立ちっ放しで疲れるという事はないが、長時間無重力にすぎると筋肉を使わなくなるため重力のある普通の空間で耐えられなくなるのだ。

スペースシャトルに乗り込んでいる人達が、通常では考えられない回数のトレーニングをするのも無重力空間から重力空間へ移行する際のギャップを身体に感じさせないためのものでもある。

彼は宙で胡坐を組んで、両目を閉じて数十冊の本に囲まれている。

本はひとりでにページを開いてパラパラと規則正しい動きをする。

本は全て同時に閉じられて、本棚へと戻っていく。

「ふう……」

ユーノは一息吐いてから、首をバキボキと鳴らす。

0067年の魔導師ランク試験で魔導師としてはピークを迎えていると宣告されているが、彼は相変わらずアルフ、ザフィーラ、シヤマルと共に秘密裏の鍛錬に励んでいた。

皮肉な事にその苛烈な鍛錬のお陰でユーノは体力が向上して、少くらの徹夜で倒れたりしないようになっていた。

目的とは違う場で活かされているというのも少々変な話だが。

「あ、そろそろ時間だ」

ユーノは携帯電話を取り出して、液晶画面に表示されている時間を見た。

今日はフェイトとヴィータと一緒に、なのはの見舞いに行く日だった。

「それじゃあ、少し抜けますけどあとよろしくお願いします」

ユーノは『無限書庫』を抜けた。

時空管理局本局にある病室。

なのはは車椅子で迎えてくれた。

あれだけの重傷に遭って、暦は変わっているがそれでも一年は経過していないのにここまで回復しているのはもはや、なのはの『生』に対する執念がなされたものだろう。

「何だか前より車椅子の扱い慣れてねーか？」

ヴィータがなのはの車椅子の手さばきを見て、感心半分呆れ半分になっっていた。

「時間があればアチコチ回ってるからね」

なのはの天性の明るさによるものか、車椅子生活でありながらも痛々しさのような物があり感じられなくなっていた。

「なのは。それ病人のすることじゃないと思うよ……」

フェイトはなのはの行動にまるで、保護者のように心配をする。

「そつえば、もうすぐリハビリも『歩く』方向に移るんだってね」
ユーノは前に来た時に、なのはから聞かされたことを思い出す。

「うん。リハビリを受けてるとね。自分が回復してるって気持ちになってるんだよ」

「オマエ。底抜けに能天気だからなー。身体も単純にできてるんじゃないの？」

ヴィータがからかいながらその場から逃亡する。

「ヴィータちゃん。それひどいよー！」

なのはそれを追いかける。

もちろん車椅子で。

「車椅子ってあんなに速く走れるの？」

「さあ……」

フェイトはなのはが操る車椅子の速度の異常っぷりを直視できないのか、ユーノに訊ねるが彼も何ともいえないのが本音だった。

*

空は青色、雲ひとつない快晴である。

ユーノはあお向けになって倒れていた。

肩を上下に揺らして、激しく息を乱して。

全身汗ばんでいた。

「しかし、アンタの今の強さはまさに執念だねえ。付き合うあたり等も正直ここまでになるとは思わなかったよ」

アルフ（人型）は腰を下ろしながら、両肩を揺らして息を乱していた。

「魔力が向上しないから、今持てる強さを限界まで活かさざる事を選ぶ。一見単純な発想だが中々奥が深い」

ザフィーラ（人型）もこの鍛錬に付き合ううちに学んだものがあるようだ。

人に教えながら、自分も学ぶ。

これは教育という点では究極の理想像といってもいい。

「最近是我的治療の回数も減ってるものね。一日に何十回も治癒魔法を使ってた頃が懐かしいわ」

シヤマルとしては怪我が減るのは嬉しい事だが、自身の役割が少ないというのも正直寂しかったりする。

三人が思うに、今のユーノ・スクライアは単純な殴り合いなら余程

の相手でない限り負けることはないくらいになり始めている。

尤もそんな『殴り合い』の場になる事自体、ユーノの性格からして珍しいといえば珍しいのだが。

「ねえアルフ、ザフィーラ。今のユーノ君なら私達の身内に何人か勝てるかしら？」

シャマルの素朴な疑問にアルフとザフィーラは目を丸くしたが、考え始める。

「魔法抜きで戦闘なら、魔法頼りとなっている我が主や高町は勝負をするだけ無駄だ。ただの虐めになる。テストロッサやシグナム、ヴィータと戦うとならば勝つか負けるかはわからないが前者に比べればいい勝負になるのではないか？」

「フェイトやシグナムやヴィータは元々の身体能力の高さもあるからねー」

アルフも同じ意見らしい。

「でもあんな通知を受けても諦めずにここまで強くなれたのだからユーノ君の執念は大したものよ」

シャマルは起き上がるうとしないユーノを一瞥してから、賞賛の言葉を送った。

ユーノは勤務による過労と鍛錬による疲労で熟睡していた。

秘密の鍛錬が終わり、『無限書庫』に戻ったユーノは業務に取り組んでいた。

いつもの余裕のある表情はそこにはない。

クロノ・ハラオウンの請求があつたので現在は自分を始め、他の司書達も血眼になって取り組んでいた。

うおおおおおおおおお！！

『無限書庫』というある意味文科系な場所には似つかわしくない咆哮だった。

無重力空間を本が飛び交う。

検索していた文献をまとめたレポートが飛び交う。
資料を探しながら半ばグロッキーになっている司書達も飛び交っていた。

『無限書庫』は無重力空間なので何が飛んでいても不思議ではない。

「買出し班！ただいま戻りましたあー！」

「遅いぞおー！五分の遅刻だー！」

「すいませんー！今すぐ取り掛かりますー！」

とても文科系とは思えない会話内容だった。

\$ % & @ * ? ¥ ! !

人間の咆哮とは思えない声まで飛び交っていた。

そんなある意味地獄絵図ともいえる状況をこっそりと見ている者がいた。

請求者であるクロノだ。

せめて労いとして差し入れを持ってきたのだが、とても入れる状況ではない。

入ったら最後。捕食対象になりかねない。

「！！」

『無限書庫』の中にいる一人がこちらと目が合った。

「# \$! !」

人ならざる雄叫びをあげながら、こちらに寄ってくる。

しかも凄い速度で。

今まで幾多の事件捜査をしてきたクロノだが、この時は別の意味で恐怖を感じていた。

両手に持っている買い物袋を引っ手繰られて、『無限書庫』を追い出された。

「……請求の量を妥協してみるか」

クロノは自身の身の為にも今後資料の量を減らす事を考えた。
翌朝。

時空管理局本局の『無限書庫』の入口。

「ご、ごくろうさん……」

クロノはユーノから資料を受け取るが、どこか震えていた。

執務官であり、魔導師ランクA A Aクラスであり近い将来提督になるのでは？と囁かれている自分だがあそこまでぞんざいに扱われたのは初めてである。

「じゃあ、僕はなのはの見舞いに行ってから寝るよ」

「あ、ああ。そうしてくれ」

クロノはユーノのこれからの行動に異議を唱えるつもりはなかった。

「ユーノ君。眠そうだね」

なのはの病室に入って早々、ユーノは眠そうな顔をしているのを隠す事ができなかったようだ。

「うん。クロノの請求でね……」

「にははは。そうなんだ……」

『クロノの請求』と聞いただけで、なのはは事情を察した。

ユーノの頭はカクンカクンと揺れている。

「ユーノ君。無理しないで寝た方がいいよ」

「うん」

そう言っていると直後に椅子に座ったまま眠っていた。

「早い……」

なのははあまりの寝るまでの早さに両目をパチパチと開いて驚く。

「何だか、わたしももうひと眠りしたくなってきちゃったよ」

なのはも欠伸をしてからベッドに背を預けて夢の世界へと飛び込んだ。

夕方となり、椅子に座って眠っていたユーノは目をパチリと開いた。

「あ、ここで寝てたんだ……」

なのははベッドですやすやと眠っている。

その寝顔を見ると、自然と笑みを浮かべてしまう。
すぐに真剣な表情になる。

（僕はまだ……、なのは守れる力を手に入れていない）
拳を強く握ってユーノは病室を出た。

*

ユーノはマグカップに入っている酒を一気に煽った。

「ぶはあ」

夕食である缶詰を開けて、フォークで突き刺して口の中に入れる。
隣にいるプロキオン（イマジンモード）は薪を燃えている炎の中に
放り込む。

パチパチと燃える音が鳴る。

（魔導師で強くなる可能性を断たれた僕は純粹に『力』で強くなる
事を。今持てる力全てを活かしきる強さを手に入れることを選んだ）

ユーノは見つめている掌を拳にした。

*

「あつた!!」

フェイトが電光掲示板に映っている自身の受験番号を見て、歓喜の
声を上げた。

本日は執務官試験の合格発表の日だ。

彼女は今回で三回目だ。

過去に二度不合格になっている。

なのはも杖を突きながらだが、会場に来ていた。

ユーノが念のためと思って車椅子を押していた。

八神はやてのリハビリは終了しており、今は普通に歩いていた。
アルフやヴォルケンリッターも見に来ていた。

「みんな、やったよ！！わたし執務官になれたよ！！」

「おめでとう」とお決まりな台詞しか出てこないが、フェイトに感激の言葉を与えるには十分なものだった。

フェイトはポケットから懐中時計を取り出す。

それは二年前に野上良太郎からハラウン家の養子に向かう際にお祝いとして貰ったものだ。

（やったよ！良太郎！！）

一番この事を伝えたいのにはここにはいない一人の青年だが、逢えないのならばいつか必ず逢える事を信じて前へ進む事を選ぶ。

「これで野上に顔向けできるな。テストロッサ」

シグナムが懐中時計を見ている自分の背後から声をかけた。

「まだまだですよ。良太郎はまだ遠くにいます」

フェイトの視線には良太郎の背中が見えているのだらうとシグナムは予想した。

ユーノは二人のやり取りを見ていた。

（良太郎さんや侑斗さん、それにモモタロスさん達のような『強さ』はまだまだ遠いんだ……）

ユーノの力への探求はまだ始まったばかりなのだ。

「うう。やっぱりわたしも参加したいー！！」

なのはは病室で頬を膨らませて不満をこぼしていた。

「しょうがねーじゃん。オマエ病人なんだしょー」

「フェイトの合格発表の会場に行くのも本当は反対されていたんだけど、何とか上手く言って許可を貰ったくらいなんだよ」

ヴィータは容赦なく『諦める』と言い放つ。

ユーノはこれ以上のワガママは通じないと警告する。

「ごめんね、なのは」

フェイトは両手を合わせて申し訳なく告げる。

「……うん。しょうがないよね。ごめんね。ワガママ言っちゃって……。みんなは楽しんできてね」

なのはも諦めがついたのか、受け入れる事にした。

これから三人はフェイトの執務官合格のお祝いに出席するのだ。

なのはが重傷に遭った際は中止にしようかという声が出ていたが、なのはの「気にせずによってもいいよ」という声で決行する事になったのだ。

そう言った当人だが、実際決行されると一人だけ除け者状態になる事に気付いてしまったので寂しかったりしていた。

三人は病室を出ると、なのはは一人残されていた。

「美味しいもの食べたいなあ」

どんな料理が出ているのだろうと、なのはは想像する。

時空管理局の病食は決して不味くはないのだが、それでも健康管理が徹底されている料理なので飽きが来るものだ。

ある程度は身体が自由になったのでそうなると後は身体を動かしたくなるものだ。

「ユーノ君。来てくれないかな……」

なのはは今一番ここに来て欲しい人物の名前を呟く。

件の人物は今皆と共に盛り上がっているはずだ。

「来ないよね……」

なのはは寂しげな表情を浮かべてからベッドに寝転がる。

コンコンとドアをノックする音が耳に入った。

なのはは身だしなみを整える。

髪やパジャマが着崩れていないかを確認する。

「どうぞお」

なのはがそのように言うと、ドアが開いた。

入ってきたのは両手に荷物を持ったユーノだった。

「ユーノ君……。どうして？」

なのはがそのように問いかけるのはユーノにしてみれば予測の範疇内なので驚いたりはいしなかった。

むしろ冷静にテーブルに持ってきた荷物を置いて、広げていく。

「なのはが一人で寂しがってるんじゃないかって、ね。みんなを代表して僕が」

「うう。否定できないよ」

そのように言われて、なのはは顔を赤くする。
「凶星だからだ。」

「食事で注意は受けてる？」

「ううん。私元々外傷だったから内蔵とかは大丈夫だったんだって……。だから食べ物は何食べても平気だよ」

「よかった」

ユーノは遠慮なくなのはの前に料理を置いていく。

なのはは割り箸とフォークとスプーンと取り皿を渡す。

「うわぁ」

なのはの双眸が輝いていた。

「でもこんなにたくさんは食べれないよ。わたし」

「ああ、僕の分も含まれてるから心配しなくてもいいよ」

ユーノはちゃっかり自分の取り皿を手に行っている。

「ユーノ君。食べてないの？」

「うん。入ってすぐに一式持たされて追い出されたんだよ」

「にやははは。どう言ったらいいのかな。わたしとしては嬉しいんだけどね」

「そう？ だったらいいんだけどね。さ、食べよう。ここまで飲まず食わずだからお腹すいちゃって」

「うん！ いただきます！」

なのはは笑顔で目の前の料理を味わう事にした。

「もうすぐ、リハビリの最終段階なんだ」

「うん。もう歩いたり走ったりはできるけど、魔導師だからやっぱり……」

「魔法が使えて空が飛べるか否か、だね」

「うん」

なのはは取り皿をテーブルに置く。

真面目な話なので、ユーノも取り皿をテーブルに置く。

「なのは。聞いていい？」

「うん。なあにユーノ君」

ユーノは凄く真面目な表情で、なのはを見る。

「なのははもう一度、空を飛んだり魔法を使えるようになりたいんだよね？」

「うん。そうだよ」

なのははユーノの質問に首を縦に振る。

「ということは、また同じ目に遭うかもしれないって事も考えてるんだよね？」

「え？」

ユーノの一言は、なのはの思考を停止させるには十分なものだった。「どうなの？僕はなのはが真剣に考えた末にもう一度今の舞台に戻るなら反対しないし、このまま管理局を辞めて普通に生活する事も反対しない」

「ユーノ君？」

「でもね、そんな事も考えずにまた戻ろうとするんだったら僕は反対だね」

ユーノがなのはを見据えていた。

「ユーノ君……」

「なのは。時間はまだあるんだ。その辺りの事もゆっくり考えてみたほうがいいと思うよ」

ユーノはそう告げると、テーブルに乗っている取り皿を手にして料理を口に含んだ。

（これが僕が、なのはにしておけられる最後の事かもしれないね）ユーノは『なのはの魔法の師』という立場でしてあげられる事は数少なくなっているのは自覚していた。

そしてこれを最後と定義している以上、なのはが自分が満足する回答を出したのなら『巣立ち』という事になることも。

フェイトの合格祝いの打上の日から二日が経過した。

その間ユーノは『無限書庫』で業務に勤しみながら鍛錬に励んでいたが、なのはの見舞いには行っていない。

なのはが自身で考えて答えを出さなければならぬから敢えて行かないようにしていたのだ。

クロノの請求がないので、『無限書庫』の空気は比較的穏やかなものだった。

（自分で言った手前とはいえ、不安だなあ）

ユーノにしてみれば多分最も厳しい課題を出したと自覚している。

（多分、なのはは重傷に遭った時の事を思い出してるはずだから苦しんでいるはずだ……）

ユーノには、なのはがそれに恐怖をしている姿が安易に想像できた。（なのは。もう一度同じ舞台に戻るなら、これは絶対に乗り越えなきゃ駄目なんだよ）

ユーノは心を鬼にして、なのはが回答を出す事を待った。

時を同じくして、なのはが入院している病室。

「う……う……」

ベッドの中でうずくまっていた。

両手で胸を押さえながら、なのはは内にある恐怖と戦っていた。

彼女の脳裏には、自分が撃墜された事が蘇っていた。

（いやだ……。いやだいやだ。怖いよ……。助けてよ……）

視界が真っ白になり、両目を開いた時には泣きそうな表情をしているヴィータが映っていた。

全身に激痛が走り、自分の身体なのに自分のものではないような感じがした。

『死』というものを初めて実感した時でもあった。

「怖いよ……。いやだよ。死にたくないよ……」

全身を震わせて両目には涙が浮かび上がっている。

病室は消灯しているので、辺りは暗い。

室内の闇がなのはの内の闇を現しているようにも思えた。

リハビリをこなせば身体は確かに治っていく事は実感していた。だが、同時に心に負った傷が癒えたわけではないのだ。

リハビリによる痛みは治療のため、復活のためだ。だから今、心に起こる痛みは心に負った傷を治すためのものだと思うようにする。

「絶対に逃げない……。絶対に……」

身体をうずくまらせながらも、なのはは呪文のように呟いた。

真の意味で復活する為に。

なのはの異変にフェイトとヴィータが見逃すはずもなく、不安な表情を浮かべていた。

「なのは。どうしたんだろ……。目の下にクマが出来てたよ」

「それだけじゃねーよ。何かに怯えてたようにも見えてたしな」

なのはの見舞いのあと、二人は休憩室でジュースを片手に話していた。

昨日まではそんな事はなかった。

回復が順調に向かって、復帰できる事を心待ちにしていたなのはの表情が急に暗くなったのだ。

昨日の内に何かがあったに違いないと推測するのは別段難しい事ではなかった。

「昨日、なのはと会ったヤツって……」

「ユーノしかないよ」

ヴィータが思い出しながらフェイトは結論を導き出した。

「じゃあ、ユーノが何か言ったのかな？」

「ありえねーだろ。アイツ、基本なのはに甘いし」

「そうだよ……。でもハッキリさせておく必要があるから本人に直接聞いてみようよ」

「ま、そーだな」

フェイトの提案にヴィータは賛同した。

二人は『無限書庫』の入口前に立っていた。

「クロノが言ってたんだけど、たまにここって事件現場よりおっかなくなるらしいよ」

「あたしもはやてから聞いた。司書全員が人じゃなくなってるって言ってた」

『無限書庫』とは時空管理局の中では影に近い部署だ。

司書達はいくら功績となる事をしても、表彰される事はない。

表彰された場合、前線に出ている者達から無用な因縁を吹っかけられる事は確実だろう。

その辺りを考慮してか、それとも『無限書庫』が機能して歳月が浅いため軽視されているのかはわからないが上層部は『無限書庫』の功績を表立って認めるような事はしないのだ。

その辺りが司書達にも知れ渡っているので、辞めていく司書達も少なくないという。

扉を開けて、二人はこっそりと覗く。

司書達は鬼気迫るような雰囲気纏ってはいなかった。

平和なのだろうと二人は推測する。

「大丈夫そうだね」

「ユーノを呼んでもらおう」

二人は『無限書庫』の扉を開き、足を踏み入れた。

そして無重力の中を巧みに身体を操り、最寄の司書の元まで移動する。

「すみません。スクライア司書はいらっしゃいますか？」

フェイトが訊ねる。

「スクライア君ならあそこにいるよ。彼は身なりと行動で『無限書庫』では目立つからね」

司書の指差す方向にユーノはいた。

彼の周りには宙に浮き、独りでページがパラパラと動いている数十冊の本が囲まれており、役目を終えた数十冊の本は閉じて、全て本棚へと戻っていった。

「スクライア君！友達が来てるよー」

司書がユーノを呼ぶ。

「わかりましたー」

ユーノは即座に返して、フェイトとヴィータの元まで移動した。

「で、なに？ 僕に何か用？」

三人は現在、休憩室に移動しておりフェイトとヴィータはユーノと向き合うかたちで座っていた。

「今日、お見舞いに行ったんだけどね……」

「なのはの様子が変わんだよ。何かに怯えてるみてーにな」

フェイトとヴィータの説明をユーノは黙って聞いている。

「なのはは今戦ってるんだよ。たった一人で乗り越えなきゃいけないものかね」

ユーノは知っている口調で静かに告げる。

「ユーノ？」

「オマエ何か知ってるんだったら、あたし等にも教えるよ！」

フェイトはいつもと違うユーノの様子に戸惑い、ヴィータは元々気の長い方でもないので苛立ちを露にしていた。

「確かになのはの身体は完治の方向に向かっているよ。順調にね。

でもね心に植えつけられた『恐怖』を乗り越えているわけじゃないんだ。違う？」

「それはその……」

「ユーノ、まさか……」

ヴィータはユーノの言葉につまり、フェイトはなのはの異変の原因を知った。

「……………」

ユーノが何も言わない事が、なのはの異変の原因を作ったのが彼だという証明になった。

「なのはの事を本当に思うなら、今は何もしないであげてほしいんだ。これはなのは自身の戦いなんだ。避けて通ったらきつとまた今回みたいになる……」

ユーノはそう告げると、椅子から立ち上がって休憩場を出た。

「あたし、アイツの事よく知らなかったのかもしれない」

「ユーノも良太郎みたいな事ができたんだ……」

フェイトとヴィータはしばらく顔を見合わせ、そのまま動かなかった。

数日後。ユーノはなのはに呼び出されていた。

場所は病室。

なのはの現在の衣食住の拠点というべき場所だ。

病室に入ってから五分が経過している。

互いに一言も発しない。

ユーノは、なのはの言葉を待っている。

なのははユーノに自身の『覚悟』を伝える言葉を再確認していた。

「あのね。ユーノ君」

なのはが真剣な表情でユーノを見る。

その双眸には『決意』と『覚悟』が含まれていた。

「わたし。やっぱり戻りたい！あの青い空を飛んで大切な人達を護りたい！」

短く告げた。

（やっぱりね）

ユーノにとって、なのはの回答は予想通りの内容だった。

「もし戻っても、また前みたいに遭うかもしれないよ？いや下手をすれば死んでしまうかもしれない。それでも戻りたい？」

ユーノも真剣な表情でなのはに確認するように訊ねる。

「その事を考えた時。とても怖かった……。ユーノ君の言うように管理局を辞めて普通に暮らす事もできるって思ったけどそれだと、わたしがわたしを許せなくなるよ」

「自分が自分を許せない？」

「うん。わたしは誰かに強制されて管理局にいるんじゃないもん。」

わたしの意思でいるんだよ。それなのにわたし自身がその事から逃げるなんてやつぱり嫌だよ。死ぬのは怖いけど、それに怖がつてばつかりじゃ何にも出来ない。でしょ？ユーノ君」

なのはの回答は間違いなく自身の『恐怖』と向き合った末の結論だとユーノは判断した。

「なのは。よく一人でそこまで答えを出せたね」

先程までの真剣な表情とは打って変わってユーノは笑みを浮かべていた。

「その気持ちと覚悟。絶対に忘れちゃ駄目だよ」

ユーノは自然と右手をなのはの頭の上に置く。

「うん！」

なのはは顔を赤らめながらも、笑顔で頷いた。

*

薪がパチパチという音を鳴らしながら、炎を燃え盛らせている。

（なのはが導き出した答えは僕にとっても十分な励みになったんだ。そして僕は今、なのはが導いた答えの事をしている……）

ゼロノスカードを用いて、周囲の人々が自分に関する事を忘れていくのは正直怖い。

そしてゼロノスカードを使い切った時、どのような末路を辿るかは知らない。

影も形もなくなって消滅するかもしれない。

そう考えると、使う事自体に躊躇いを感じてしまう。

（でも僕がAゼロノスになったのは僕の意味なんだ。あの人達が身を挺して助けてくれた命を時間を、僕は僕が正しいと思う方向に使う！）

これは自分が本当にやりたかった事だ。

そこに恐怖が付きまといても、逃げる気はない。

逃げた時は、なのは同様に自分自身を許す事ができなくなるだろう。

コーノは缶詰の残りを食べきる為に、フォークに突き刺して口の中に放り込んだ。

*

なのはが自身の『恐怖』を乗り越えてリハビリをこなしてから一週間が経過して、最終日となっていた。

なのはは現在外にいた。

空は雲ひとつない快晴である。

左手にはレイジングハート・エクセリオンが握られて、服装はパジャマではなく白がメインのバリアジャケットだ。

主治医を始めとして、時間の空いている殆どの身内がそこにはいた。「それでは始めてください」

「はい！！」

主治医の言葉に、なのはは頷いて両目を閉じて深呼吸をする。

そして、意識を集中する。

自分の内にあるリンカーコアが一年振りに目覚めようとしていた。

（大丈夫だよ。わたし達はできるよ）

なのはは自分のリンカーコアに語りかける。

リンカーコアは輝きを増していく。

（行こう！！）

なのはの意思とリンカーコアが完全に同調した。

『フライヤーフィン』

レイジングハート・エクセリオンの紅玉部分に名称が表示される。

なのはの両足首付近に桜色の双翼が出現する。

ブワツと音を立てながら風が吹き、なのはは地上から空へと場所を移した。

周囲を見回す。

一年ぶりの懐かしい視点だった。

見上げるわけではなく、見下ろすでもなくその場にいるだけで青い

景色を見る事が出来るこの位置。

『一年ぶりのご感想をどうぞ』

「最っ高！！これからもよろしくね。レイジングハート！」

レイジングハート・エクセリオンの台詞に対して、なのはは満面の笑みを浮かべて返した。

『はい。マイマスター』

なのはは地上に目を向けると、身内が全員で諸手を挙げて喜んでくれている様子を見ていた。

「みんなあ！！ありがとおおお！！！」

なのはは両手を振って、感謝の言葉を述べた。

喜んでくれる身内の群れの中をはぐれている人影が見えた。

ユーノだ。

なのはは早速、速度を上げてユーノの元に着陸する。

「ユーノ君！わたし、帰ってこれたよ！」

「うん見てた。おかえり、なのは」

なのはは自身の復活を自覚して笑顔を浮かべ、ユーノもまたその事を我が事のようにして喜んだ。

「これで晴れて巣立ちの時が来たね」

「ふえ？巣立ち？」

なのははユーノが何を言っているのかわからない。

「うん。僕がなのはに教えてあげられる事はもうないからね。だから巣立ち――卒業だよ」

「そんなユーノ君。わたしはまだ色々教えてもらいたい事もあるよ。だからそんな事言わないでよ！」

なのはとしてみればいきなり卒業といわれて、嬉しいどころか寂しさで納得できない事の方が幅を占めていた。

「僕が最後にしてあげられる事も、なのはは乗り越えたじゃない。だから本当に僕はなのはにしてあげられる事はないんだ」

狼狽しているなのは対照的に、ユーノは穏やかで落ち着いていた。

「だからなのは。もっと胸を張っていいんだよ。自分の恐怖を乗り越えるって口で言うのは簡単だけど、誰でも出来る事じゃないからね」

ユーノは、なのはを諭すと歩き始めた。

「ユーノ君！ありがとう！！本当にありがとう！！」

ユーノは振り返らずに、左手を軽く挙げて返した。

なのはは振り返ってくれると思ったが、ユーノは一度も振り返らなかった。

*

新暦0070年。運命の歯車が遂に動き出す。

第十話 「0068年 復活の翼 研ぎ澄まされる牙」(後書き)

次回予告

十四歳となった少年は苛立ちを感じていた。

自身が望む強さが何なのかを迷い始めていたのだ。

そんな時、とある次元世界での発掘の依頼が舞い降りた。

第十一話 「0070年 回りだす歯車」

第十一話 「0070年 回りだす歯車」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

前回のアンケートはまだ募集中です。

もう一度ルールを説明します。

第一部から第三部の十話までの中で、印象に残った戦闘を三つ書いてください。

余裕のある方はその理由も教えていただけると、ありがたいです。

これは単純に作者が知りたいだけのものなのでアンケート結果を人気投票のように短編にすることはありません。

皆様のご応募お待ちしております。

第十一話 「0070年 回りだす齒車」

新暦0069年。

高町なのはが念願の教導隊入りとなる。

彼女の夢の第一歩が叶った事なので、身内はそれを口実に盛大に盛り上がっていた。

ユーノ・スクライアも時間が空いていたので参加して我が事のように喜んだ。

だが、この時分から彼は自身の『強さ』というものに対して、悩みを抱くようになった。

それはあの怪人が出現するようになったからというのが大きな原因である。

その『悩み』は日増しに強くなり、やがて『苛立ち』へと変わるのにさほどの時間はかからなかった。

*

0070年。

今日もユーノはアルフ（人型）、ザフィーラ（人型）、シャマルの下で鍛錬に励んでいた。

「ユーノ君。イマジンが出現してから鬼気迫るものになってない？ アルフ」

シャマルが隣に座っているアルフに訊ねる。

「まあねえ。イマジンが一回出てきた去年からユーノ、何かに取り憑かれたみたいに身体をいじめるようになってさ。正直止めても聞かないんだよねえ」

アルフもユーノが明らかにオーバーワークをしている事を再三忠告したのだが、一向に聞き入れてはくれないとぼやく。

「ふっ！！」

ユーノの右正拳がザフィーラの顔面に狙いをつけるが、顔を傾けるだけであっさりと避けられる。

「スクライア。疲労がたまっているお前の拳では捉えられん」

ザフィーラが彼なりに気遣う言葉を送りながら、左掌を胸元に狙いつけて突き出す。

「……」

ユーノは羽毛のようにふわりと後方へと飛ばされる。

両脚で踏ん張るが、土煙を立てながら下がっていくだけで効果が無い。

「くう……」

両手を地に着けてもズルズルと下がっていくが、やがて勢いは完全になくなって停まった。

「普段のお前なら難なく勢いを殺す事が出来たはずだ」

ザフィーラはユーノに自身の現状を理解させる為に攻撃を繰り返したのだ。

「……」

ユーノは四つんばい状態から起き上がる。

身体は重いし、思ったように動けない事を痛感させられたユーノは黙って頷くしかなかった。

「シャマル。手当てを」

「ええ。わかってます」

ザフィーラはシャマルにユーノの治癒をするように促すが、シャマルは既に準備を整えていた。

「ユーノ君。一つ忠告していいかしら？」

シャマルが治癒魔法を施しながら、真面目な表情で言う。

ユーノは首を縦に振る。

「この三年間の鍛錬でユーノ君は魔導師でありながら対魔導師戦においては、まず誰もが思いつくけどやらない方法を編み出して実戦レベルまで持ち込むまでになってるわ。それでも十分大したものよ。でも最近のユーノ君はどこか上の空よ。そんな状態じゃ徒に疲れる

ただだし、ユーノ君自身のためにもならないわ」

「はい……」

シャルルの忠告はあまりに正しく、ユーノは反論する機会を失った。

ユーノは休憩室で一人、缶ジュースを飲んで天井を見上げて溜め息をついていた。

確かに昨年イマジンが出現して以来、自分は危機感からによる『焦り』が転じて、苛立っていた事は否定のしようがない事実だった。そのため、なのはを始めとする身内とは極力会わないようにしていた。

ユーノが危機感を感じているイマジン事件とは通称『0069年の悪夢』といわれている。

概要としては昨年出現したイマジンの数は一体。

その討伐に向かった武装局員の数は五十人。

一対五十という一見すると『勝って当然』の戦況だった。

だが結果は武装局員五十人を投与してもたった一体のイマジンを倒す事が出来ないという厳しい現実を突きつけられるものだった。

この時初めて人々は『イマジン』という怪人が存在することを知る事となり、そういった得体の知れないものを倒す事が出来ると思われるれていた時空管理局は目も当てられぬほどの大敗をした事で記憶に残っている。

今となつてはこの別世界の住人にとって、イマジンは恐怖の対象となっていたりする。

（何とかしないと……。でもどうしたら……）

五年前に自分はイマジンと戦った事がある。

なのはと共に戦ったが、大ダメージを負わせるのがやっとで倒せなかった。

時空管理局所属の魔導師ではどんなに善戦に持ち込む事は出来ても『勝つ』事は出来ないだろう。

何故なら彼等は相手が極悪人でも命を奪わないからだ。

非殺傷設定という制限が設けられているためである。

殺傷設定に切り替える事は出来るが、そうなれば『管理局の仕事』ではなく『純粋な闘争』へとなってしまう。

模擬戦にしろ訓練にしろ、実戦を想定してはいるものの最終的には『命を奪う覚悟』という点には行き届いていないのが現実であったりする。

（僕が求める『強さ』もやっぱりそこに行き着いちゃうんだよねあ）
ユーノが求める『強さ』も突き詰めてしまえば『命を奪う覚悟』が終着となってしまふ。

（良太郎さんや侑斗さん、モモタロスさん達はどこういう気持ちだったんだろ……）

イマジンと対等に戦える存在である者達はどうような気持ちで今まで数多のイマジンの命を屠ってきたのだろう。

当人達に聞いてみなければわからない事だし、その当人達はここにはいない。

だからわからない。

想像する事は出来るが、そこには自分の都合のいい脚色が施されている事も否定できないため敢えて想像しないようにしている。

「ユーノ君」

嬉しそうに自分の名を呼ぶ声がした。

顔を上げると、なのはがいた。

「なのは……。仕事の帰り？」

教導隊の仕事が終わった帰り道なのだろうと推測する。

「うん。ユーノ君は？」

「休憩」

短く答えて、缶ジュースの残りに手をつける。

なのはは時間に余裕があるらしく、向かいの席に腰掛けた。

「ん？なに？」

「ええとね。ユーノ君。またカップラーメンとかジャンクフードばかり食べてるでしょ？」

なのははじーっとユーノの顔を見ながら、食生活を訊ねてきた。

「なのは。お医者さん？」

人の顔を見ただけで、食生活をほぼ確実に言い当てるのだから医者顔負けの診察眼である。

「そんなに鋭くないよ。ただ、ユーノ君ってお仕事と違って食事に關してはあまり気にかけてない部分があるからね」

なのはの言葉にユーノは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「それでも食べてる方だよ。僕達の食生活が質素になっていくって事はそれだけ平和じゃないって事だしね」

「それって遠まわしに、私達のせいって言ってるんじゃない？」

「そう聞こえる？」

「ユーノ君の意地悪〜！」

なのはは頬を膨らませるが、本心で怒ってるわけではない。

ユーノはそんな、なのはの表情を見てつついっし声を笑ってしまふ。

復歸してから二年が経過しており、なのはは以前に重傷に遭っていたのか疑いたくなるくらいの健康ぶりだ。

「折角、お母さんからユーノ君を連れてくるようにって言われてるのにそんな意地悪するんだったらどうしようかな〜」

今度は、なのはが反撃に切り出した。

「桃子さんからって事はもしかして、夕飯の招待？」

「そ。でもどうしようかな〜」

なのはは渋っている。

「それは困るよ。僕の楽しみを奪わないで。なのは」

ユーノにしてみれば、高町家の夕飯は数少ない楽しみの一つだった。正直、高町家の人々の心の広さと優しさには今でも甘えている。

元々、両親を早くに亡くしてスクライアの部族が『家族』だ。

そして今の自分にとって高町家の人々は『第二の家族』といってもいいくらいだ。

なのはの重傷に遭った原因は自分にあると申告した時も、あの人達

は自分を責めはしなかった。
「何故？」と訊ねた際には、

「きっかけは君かもしれない。でも、なのはは自分の意思で今まで歩いてきたんだ。だから、ここで変に君が責任を感じる事はなのはの意思を侮辱する事になる」

と高町士郎に静かに諭されたものだ。

その時は、その言葉が正しいと信じて首を縦に振った。

それでも日が経つにつれて、士郎の言葉が正しいのか責任は自分にあると考えるのが正しいのかはわからない状態になっている。

（イマジンまで現れるようになった以上、なのはを守る為に僕は更なる『力』が必要なんだ……）

内に秘めたる想いは小火程度だがそれでもくすぶっている。

「ユーノ君。どうしたの？怖い顔してるよ」

向かいのなのはが心配げな表情でこちらを見ている。

「え？うつん。何でもないよ。それでいつ？」

ユーノは笑って誤魔化しながらスケジュールの調整のためにも日取りを訊ねる。

「ええとね。明日はどう？」

なのはが告げる予定をユーノは懷から取り出した手帳のページを捲っていく。

「うつん。特に何も無いから大丈夫だよ」

ユーノは快諾した。

「じゃあ、明日の夕方にね」

「うつん」

なのはは立ち上がって、そのまま海鳴に戻るのか『転送ポート室』へと向かっていった。

その背中を見送っているユーノの表情に笑顔はなかった。

*

ユーノは眼前の慰霊碑と二つの墓標のうち、一番左端の墓標を見ていた。

（高町家へ招待されてからすぐだったよね……。 MAGILING
ヴァレイド（以後：MV）が開催されたのは……）

自分のメンタル面に不安を感じたシャマルとアルフが無断でエントリーしたのだ。

ユーノの口元が小さく緩む。

「どうしたんですか？ ユノさん」

横で自前の爪を缶きり代わりにして缶詰を開けているプロキオン（イマジン）が窺う。

「ん？ いや一年前に開催された魔法戦技会に参加した時の事を思い出してね」

「僕と契約する前ですよ？ それでどうだったんですか？」

プロキオンは知らされていないのか目を輝かせている。

「優勝したよ。武装隊を出し抜いての優勝だから結構後から色んな人達に目をつけられたけどね」

ユーノは苦笑しながらも語る。

一年前は煩わしいとか鬱憤晴らしとして、後から喧嘩をふっかけてきた局員達を片っ端から返り討ちにしたもんだ。

もつとも『苛立ち』が解消された事はなかったが。

「それからすぐだったよね……。あの出来事が起こったのは……」

MVに優勝してから一週間が経過した頃だ。

ユーノの運命が大きく動き出したのは。

*

MVが終了し、時空管理局全体はいわゆる『お祭りムード』が抜け

切っていない者達もチラホラというがそれでも通常の緊張感溢れる
雰囲気が漂っていた。

彼の周りで変わった事といえば、今まで我が物顔で歩いていた武装
局員達が自分と目を合わせずに廊下の端に移動して、極力目を合わ
せないようにしていた。

（何もこちらから喧嘩を売るようなマネはしないのに……）

売られた喧嘩は『降りかかった火の粉を払う』という名目で買うが、
自身から売るような事はしない。

自分はそこまで好戦的ではないからだ。

『無限書庫』の扉を開いて、司書長室へと入る。

現段階では司書長室という部屋はあっても、『司書長』という役職
に就いている人物はいない。

現在はちよつとした談話室扱いになっている。

そこには依頼主である中年の眼鏡をかけた学者風の男と、悪友であ
って『無限書庫』にとつては『疫病神』や『悪魔』、『人でなし』
と言われて恐れられているクロノ・ハラウンがいた。

（この人って確か……）

次元世界の考古学ではかなり有名な人物だと記憶している。

「呼び出してすまないな。実はこちらの方が君の論文を見て、いた
く君に興味を沸いたらしくてね……」

ユーノは数ヶ月前に提出した論文の事を思い出した。

「ユーノ・スクライア君ですね？私はこちらの者でして……」

ユーノは向かいのソファに座ってから、名刺を受け取る。

「あ、ど、どうも。こちらこそ初めまして、ユーノ・スクライアで
す。僕こそ高名な教授にお、お会いできてその……感激です！」

ユーノは起立してから深々と頭を下げる。

「いえいえ。スクライア君。席に着いてください」

「は、はい……」

ユーノにとつて中年男……教授は一度は会いたくなり、また『憧
れ』を抱いていた人物である。

「実はね。教授は君を今度の次元世界の発掘隊のメンバーとして参加してほしいそうなんだ」

「え？僕がですか！？」

クロノがこちらに訪れた動機を打ち明けているのだが、ユーノには左から右へとこぼれていた。

その斯界で高名な人物が直々に自分をスカウトしに来たというのだから舞い上がるのも当然だった。

「どうでしょう？スクライア君。君の素性は失礼かと思いましたが調べさせていただきました。スクライアといえば我々考古学を携わる者にとってはまさに誉れ高い部族なんですよ。今回の発掘の際にはぜひとも君の力を貸していただきたいのです」

教授はそう言うと、深々とユーノに向かって頭を下げる。

恐らく先にスクライアの部族にコンタクトを取ろうと試みたはずだ。しかし、一つの場所に居を構えない性質のためか捕まる事は至難の業だとユーノは知っている。

その中で『スクライア』の姓を持って、一つの場所に留まっている自分にコンタクトをとるのは別段不自然な事ではない。

「はい！非力ではありますが、喜んで参加させていただきます！どうかよろしく願います！」

ユーノは気負っている部分もあるが、それでも自身の気持ちを教授に打ち明けながら快諾した。

ユーノは憧れの教授の発掘に参加できる事に純粹に喜びを感じていた。

『無限書庫』を出て、出発の際の支度をしようとしていた。

「あ、ユーノ君」

「何だか機嫌がいいね」

「何かええ事でもあったん？」

廊下を歩いていると、なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン、八神はやて、リインの四人と逢った。

「うん。尊敬している教授の発掘隊にメンバーとしてスカウトされただよ」

「よかったね。ユーノ君」

なのは我が事のように喜んでくれた。

「だから普段のユーノからは考えられないくらいに落ち着きがないんだね」

フェイトもユーノがはしゃいでる姿というのは滅多に見れないので新鮮なものだと認識する。

「発掘となると、遺跡とかなん？」

「うん。どうやら今まで立ち寄ってない遺跡があつてその中には現在の技術ではとても制作できないモノがあるらしいんで、その調査つてわけ」

はやての質問に、ユーノはわかる範囲で回答した。

「期間はどのくらいなの？」

「早くても三週間くらいかな。未知の遺跡の調査だからそれでも短いくらいだけどね」

なのはの質問にユーノは凡そで答える。

「フェイト。その間はクロノに請求はしないようにって言うておいてくれない？」

駄目押しでユーノはフェイトに頼んでみる。

「一応やってみるけど、あまり期待しないでね」

フェイトは確信はもてないが、やってくれるようだ。

「ユーノ君。何かお土産があるんやったらよろしくな」

「ユーノさん。頑張ってくださいです！」

はやてとリインが彼女達なりの台詞で応援してくれた。

「ユーノ君。頑張るのはいいけど食事はちゃんと取るんだよ。あと食事っていつでもカップラーメンとかばかりは駄目だからね」

なのはが釘を刺すようにして、食生活の事を注意してきた。

「わかりました。なのは、何気にしつこいよ？」

「このくらいでいいの！」

ユーノの抗議になのはは即座に切り替えした。

*

現在ユーノは教授を始めとする数十人と共にある次元世界の遺跡の前に立っていた。

まずは拠点基地を作らなければならない。

テントを張って、その中に機材を設置する。

皆ベテランなため、テントを張る仕種や機材を設置する速度はこの手の事が生活習慣となっているスクライアとしても目を見張るものだった。

「速いですね。しかも正確です」

ユーノは失礼と思いながら、本音を口に出す。

「我々も年に何度も回っているからね。自然と慣れてしまっただよ」教授は短く答える。

基地が完成する頃には昼になっていた。

昼食は簡易にカップラーメンだった。

（なのはが見たら絶対に怒りそう……）

ラーメンの麺を口に含みながら、ユーノはミッドチルダもしくは海鳴市にいると思われる一人の少女が怒っている姿を想像していた。

昼食後、遺跡の調査が始まった。

古い遺跡には高確率で外部からの侵入を防ぐための罠が設けられている。

内部に侵入させないための罠もあるし、侵入できたとしても目的地とでもいすべき地点にまで到達させないように罠が仕掛けられている事も十分に考えられる。

日程としては今日は侵入防止のための罠の有無の調査となっている。ユーノも魔法を用いて探査する。

（築数百年ってところだけど、造りからして今の技術に遠く及ばないという教授の言葉からは程遠いなあ）

『発掘調査』といっても、広義では『試掘調査』、『確認調査』、『一般調査』と区別されている。

地表面からは確認できない遺構（過去の人物の不動産）の所在を確認するための『試掘調査』。

遺構の性格の概要までを把握する『確認調査』。

遺跡の有無を広域にわたって把握するために踏査を行なって遺物の表面採集を行なう『一般調査』。

現在ユーノが行っている調査は『確認調査』にあたるだろう。

スクライア出身であるユーノは罨を探りながらもどのくらいの遺跡なのかも同時に探っていた。

調査開始から六時間が経過した。

空の色は青から茜へと切り替わっており、日本ならカラスが鳴いていてもいい時間帯になっていた。

本日の作業は終了という事を表していた。

遺跡の中に入ることも可能ではあるが、罨があるかどうかもわからない場所を綿密な調査もせずに飛び込む行為はわざわざ自殺しにくい事は変わらないので、プロである彼等はそんな愚行は行わない。というよりも、単純に空腹で作業に没頭できないというのが本音だろう。

「……昼間と全然違いますね」

ユーノがそのような感想をもたらすのも無理のないことだと思う。

昼間は質素なカップラーメンだったのに対して、現在は豪華なバーベキューである。

牛肉、鶏肉、豚肉を始め鹿肉^{しかにく}、猪肉^{ししにく}などと野菜よりも豊富だった。

メンバー達は皿を手に取り箸を構えて、我先に食していた。

ユーノは気後れしながらも、野菜から食していく。

ベジタリアンというわけではないが、アルフと食事をしている回数が多いためか一度肉を食すると取られないために根こそぎ皿の中に放り込むからだ。

この方法は気心が知れた者同士だから通じるが、会って間もない人

達の前で披露できるものではない。

「どうですか？食は進んでいますか？スクライア君」

「ええ。美味しくいただいています。あの教授……」

「何ですか？」

「野菜や肉をこの場で食べれるのは嬉しいですけど、保存できるんですか？」

ユーノの尤もな質問に教授は更に乗っている豚肉を食べる。

噛んでからきちんと吞み込むと笑みを浮かべてユーノに向ける。

「その点なら大丈夫ですよ。発掘作業に必須のデバイスがあるんですよ」

教授はそう言いながら、指差す方向には野営地には相応しくないものが数台設置されていた。

相応しくないもの……冷蔵庫だ。

「ストレージデバイス、キョールシリンク。アウトドアの頼もしい味方ですよ。スクライアでは使わなかったのですか？」

「スクライアは現地調達なんです僕等」

ユーノも過去を思い出しながら語る。

「薬草や毒草などの本で得た知識を正しく活かせるかどうか確かめられますし、動物等の狩りの際にはどのような罠が手早く捕まえられる事ができるかとか、結構学びましたからね」

「もし向かった次元世界に植物や動物がいなかったらどうなるんですか？」

今度は教授がスクライアの実体に興味を抱いていた。

「町や村があれば店で購入します。それもなければ非常食です」

「なるほど」

教授はユーノの体験談にうんうんと頷いていた。

発掘隊の一人が串に刺さっている肉を食べながら、そんな二人を見ている。

帽子を深く被っており、素顔はわからないが彼の左手には陶器製のマグカップが握られていた。

マグカップには『良太郎ちゃん専用』とデザインされていた。

*

ユーノは揺らぐ炎を見ながら、パーカーのポケットに入っている黒いケースを取り出した。

カチャツという音を立てながらケースの上部分を開けると、ゼロノスカードが数枚入っていた。

カチンという音を立てて上部分を閉じる。

そして僕の歯車が……いや『時間』が動き出したんだ。

第十一話 「0070年 回りだす歯車」(後書き)

次回予告

最深部に足を踏み入れた発掘隊。

その中で少年は『時の列車』を目にする。

その『時の列車』を強奪しようとイメージが出現。

一人の青年がイメージに銃口を突きつけた。

第十二話 「0070年 宝を守護する者」

第十二話 「0070年 宝を守護する者」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

あけましておめでとございます。

今年もよろしく願いいたします。

アンケートはまだ続行中です。

第十二話 「0070年 宝を守護する者」

第97管理外世界――地球。

海鳴市で高町なのははバリアジャケットではなく、聖祥学園の制服で授業を受けていた。

いかに時空管理局で『エースオブエース』と呼ばれている彼女だが、地球ではただの『女子中学生』でしかない。

そんな彼女は窓際の席で、どこか上の空で青空を眺めていた。

（ユーノ君が発掘のお仕事に行ってからもう三日になるんだあ）

今頃彼も同じ青空の下で作業に勤しんでいるのだろうと、なのはは想像していた。

教師がなのはを指名しているが、マルチタスクを用いていなかった。で頭の中には入っていなかった。

無論、教師に『彼氏の事でも考えてたんでしょ？』というような内容でからかわれたのは言うまでもないことだ。

*

ユーノ・スクライアは現在拠点で本日の作業内容を聞いていた。

一日目は外部の調査で、二日目は内部の調査をしていた。

外部には撃退用の罠がなければ、内部にも侵入者抹殺用の罠は一つも仕掛けられていなかった。

どちらとも『確認調査』であり、遺跡の中にある遺物（過去の人類が残した石器や道具）は一つも採集していない。

本日からようやく世間一般に『発掘の仕事』と思われる『一般調査』が行われる。

（本格的な調査となると思わぬことが起こるかもしれないから、余計に気を引き締めていかないと……）

幼い頃から発掘調査などに関わっているユーノは『確認調査』より

も『一般調査』の方が危険が増すという事をよく知っている。それはここにいる発掘隊のメンバーも承知のはずだ。

（この二日間の調査からわかった事はこの遺跡にある遺物は捏造されたものじゃない事は確かだ）

発掘において、最もあつてはならない事象が『捏造』だ。

発掘や考古学等における捏造とはあらかじめ別の場所で採集した遺物を、更に別の場所で埋設して掘り起こすというものだ。

それによつてもたらされる影響は『歴史が狂う』や学校の歴史の教科書で記されている出来事も全て抹消しなければならないための回収作業など、様々な部分で影響を与える。

民衆にとつては『発掘調査』そのものに対して、不信感を抱かれる始末である。

そうなると発掘に関して費用を負担してくれる支援団体は激減して『発掘調査』そのものができなく鳴るという事も十分にありえる。

『信頼を裏切った報い』と言つてしまえばそれまでのものだが。

またこの出来事は遺跡発掘や遺跡調査を生業とする『スクライア』にしてみてもそれなりに打撃を与えられたものだったりする。

しかし、次元世界においてことこの手の分野で広く知れ渡っている『スクライア』が捏造などという行為を行う必要性は皆無に等しいため彼等を知る者達は誰もが捏造疑惑そのものに疑惑を抱いたというのが事実だったりする。

つまり『スクライア』が捏造疑惑で追い詰められた期間は他の考古学に携わる者達よりもはるかに短かった。

「それでは皆さん。今日も一日頑張りましょう！」

はい！！

教授の一言にメンバーは一丸となった。

遺跡の中へと足を踏み入れた教授とユーノを始めとする発掘隊は、

普段の倍の時間をかけて足を進めていた。

昨日の調査でもこの遺跡には畏らしい畏は特に何もなかったが、現代人が作った未開の場所でも我が家のようにズカズカと歩くようなことはしない。

古代人がどのような理由で建設したのかわからないし、現代人を惑わせるほどの技術があるとしたら戦闘に特化した者がいないこのパーティーでは全滅は免れないだろう。

皆わかつているのだ。同じ時間の人間が建築した建物でさえ警戒するのに違う時間の建造物が相手なのだから、何が起こるかわからないという事を。

理屈ではなく本能で。

マッピングは昨日の調査で行っているが、それでもいくつか触れてはいない場所もある。

今日はそういった場所にも触れることとなる。

「古代人の遺跡といっても、城とかではなさそうですね……」

教授が周囲を電灯を照らして見回しながら感想を呟く。

築数百年が経過としても、『城』ならばどこかそういう豪華な雰囲気というものがある。

だがこの遺跡にはそれがない。

祭事を行う際の『祭壇』とも考えられるが、そういったところ特有の神聖な空気のようなものもない。

ここがもし祭壇だと仮定し、『邪教』と呼ばれる教えを信奉する集団が用いたとしたら血痕を始めとして禍々しい空気が存在しているものだ。

それも存在していないところからして『祭壇』でもないとなると、後は『墓』となる。

墓ならば神聖さも禍々しさのようなものがないというのも頷ける。

古来、王家のような庶民とは一線を画している墓には死者を弔う際に様々な動産と一緒に収められていると言う。

死者の魂を丁重に常世へと送るためだ。

そのため、遺跡の財宝を採集して売り払う事で生計を立てているトレジャーハンターなどは遺跡といっても主に墓に狙いを付けたりするくらいだ。

「しかし教授。この次元世界には王制はなかったはずですが……」

発掘隊のメンバーAがこの次元世界の歴史の一部を語った。

「となると、集団墓地かもしれませんね」

「でも集団墓地の中に遺物なんてあります？しかも昨日の調査でも見ましたが、かなりの数でしたよ」

発掘隊メンバーBが教授の言葉に異を唱えた。

集団墓地は一人一人を埋葬したわけではなく、ひとまとめにして葬る様式で特に個人が識別不能になっている状態の事を指す。

「個人の識別が不能となると、身分のある方もこの中に？」

発掘隊メンバーCが仮説を立てる。

「多分ですが……」

教授が自信はないが首を縦に振る。

集団墓地が条件とするなら伝染病、戦争、天災などで死亡した際に用いられる。

ただし死者への葬り方があまりにも雑だと言われているので、道徳的にも問題視されていたりするがこの遺跡が集団墓地ならば従来のものとは違うという事がわかる。

部屋一室につき、石棺が十基埋葬されていた。

そんな部屋が一階につき十室あり、それぞれに石棺が置かれていた。集団墓地にしても格段に扱いがいい。（集団墓地による埋葬のされ方は様々だが、穴を掘って遺体を放り投げるとというのが一般的）

「僕も今まで色んな発掘で『墓』に関わった事がありますが、集団墓地でここまで丁寧に死者を葬ったものを見るのは初めてです」

ユーノも部屋に入り、石棺一つ一つを調べながら感想をもらしていた。

「教授。調査前に言ってた現代の技術ではとうてい追いつかない技術が眠っているとは思えないんですけど……」

ユーノが教授の真意を探ろうとする。

「たしかに外観や部屋には石棺。遺物にしても現代の技術が追いつかないものとは言い切れませんね。でもスクライア君。私がこの発掘に踏み切ったのはある噂を聞いたからなんですよ」

「ある噂？」

「この遺跡の最下層にその噂の元となっているものが眠っているらしいんですよ」

「それは一体？でもそんな噂が流れているって事は先駆者がいたって事ですか？」

「だと思えます。ただそれを見たとしても、採集していないところからして何かいわくつきのものかもしれませんね」

「だから教授はその最下層にあるものが現代の技術では届かないものだと考えているんですね？」

「まあ推測と想像の範疇ですけどね……」

調査を続けながら、ユーノ達は最下層へと足を踏み入れようとしていた。

*

なのははフェイト・T・ハラオウン、八神はやて、アリサ・バニングス、月村すずか達と校舎の屋上で昼食を食べていた。

「ユーノ君、ちゃんとお昼食べてるかな……」

なのはは高町桃子作の弁当を食べながら、心配していた。

「なのはちゃん。まるで母親みたいやで」

はやてがからかう。

「だって。ユーノ君一人にすると絶対に食生活メチャクチャになっちゃうもん」

なのはは過去の経験から断言した。

「メチャクチャってどんな風に？」

すずかが代表して訊ねる。

「まだいい方だった時は一週間連続でおにぎりやゆで卵だったし、その次によかった時は五日間連続で麺料理ばかりとかでひどい時は十日連続で薬草と砂糖水とかだし、もっとひどい時なんてお料理する時間が惜しいって理由で塩と砂糖を舐めておしまいってのもあったんだよ！」

なのはが語る内容に四人は何も言えなくなる。

「ユーノってそういう事には人一倍気を遣ってるイメージあったけど……」

アリサは自身が描いていたユーノ像が崩れているのがわかった。

「アリサ。『無限書庫』って結構激務なんだよ。多分内勤の中ではトップレベルじゃないかな……」

「四六時中。前線に出てる人等や偉いさんの会議の際の資料を作ったりと暇らしい暇はないくらいやねんで」

フェイトとはやてがユーノの職場に関して簡潔に説明する。

「なのは。ユーノは三週間後には帰ってくるんだから、その時はなのはがご馳走を振舞えばいいんじゃないかな」

フェイトが、不安を抱えているなのはに助言を送る。

「ユーノ君って何が好きなん？」

はやてが知る限り、ユーノが好き嫌いしている姿を見た事がない。

「それも悩むところなんだよ。ユーノ君、何でも食べるから特別好きなものとか嫌いなものとかってないんだよね」

振舞う側としては本当に悩まされる部分である。

「まあ帰ってくるまで時間あんねやからゆっくり考えたらええやん」

はやては自販機で購入したパックジュースに付属のストローを突き刺して、すすっていた。

なのはは食べながら思索していた。

*

最下層へと向かう道程は前日に調査したにも関わらず「畏あるんじ

やないの？」と思いたくなるくらいに平凡で真っ直ぐだった。

最下層は上階のような石棺は一つもなく、ただただ広大だった。緊急避難の場所とするなら、落盤以外なら護ってくれるだろう。

「ついちゃいましたね……」

ユーノは最下層に足を踏み入れて最初にそのように呟いた。

「畏がないのはいい事ですがね」

教授は苦笑しながらも背負っているリュックサックを下ろして、作業に入ろうとする。

「教授！」

発掘隊メンバーDが大声で叫ぶ。

「どうしました？」

対して教授はいつもどおりに冷静だ。

「こ、コレを見てください！」

教授とユーノはメンバーDのもとへと足を運ぶ。

「これは……」

「そ、そんな……。コレって……」

教授の眼鏡がキラリと光るのに対して、ユーノは両目を大きく開いてソレを見ていた。

彼が驚くのも無理はなかった。

そして同時に確信した。

コレが教授が言っていたものだ。

「時の列車……」

ユーノ達の前に佇んでいるのは黒色を主体に青色のポイントカラーが施されている三両編成の『時の列車』だった。

「噂は本当だったんだ……」

「どうみても最新技術の塊って感じだよな……」

「放置した可能性もありますよね」

「時空管理局でも無理なんじゃないかな」

「何の為に使ったコレ……」

発掘隊メンバーが『時の列車』を見て口々に言う。

「スクライア君」

「あ、はい。何ですか？」

「君は先程つぶやきましたね？『時の列車』と。君はコレが何なのかを知っているのではないのでしょうか？」

「形は違いますけど、似たようなものを五年前に見ています」

ユーノの言葉に教授の眼鏡が更に光る。

「これは一体、どういうものですか？」

「これはいわゆるタイムマシン……現在、過去、未来を行き来できるものなんです」

タイムマシン！？

ユーノ以外の発掘隊メンバーが大声を出して驚いた。

密閉された室内で声が反響する。

「タイムマシン。誰もが耳にはしますが見た事はないというのが普通ですよ」

教授の言うように、いくら次元世界の中で技術レベルがトップとも言えるミッドチルダでもタイムマシンを製作して成功した例はない。尤もタイムマシンの制作そのものは学説では否定的に飛び交っている事もある。

だがユーノはその説に関しては否定的だ。

それは彼がタイムマシン……『時の列車』を直に目にしているからだ。

どんなに立派な講釈もたった一つの現実には勝てないのが自然の摂理である。

三両編成の『時の列車』を誰もが検分する。

線路が三両分しか敷設されておらず、一両目の先端はネドケラトプスがモデルになっており、二両目はダルウィノプテルス、三両目は

T・REXとなっていた。

「デンライナーやゼロライナーとは違う車輛だ……」
ユーノは一両目に触れる。

プシツと音が鳴って、ドアが開かれた。

「あれ？お客さんかな……」

『時の列車』二両目のシートに寝転がっていたイマジンが起き上がる。

彼は『はぐれイマジン』ではない普通のイマジンだ。

契約者を持たない今では『時の列車』の中にいるため、実体化しているが外に出れば間違いなく砂状態になる。

彼がこの『時の列車』に居つてから二、三ヶ月になる。

一人で起きてはまた寝る、という行為の繰り返しだった。

一両目のドアが開く音が聞こえた。

「ど、どうしよう。僕の事怖がられたら襲い掛かってくるかもしれないし……」

イマジンは慌てふためく。

『時の列車』に足を踏み入れる音が聞こえた。

「えいっ！」

イマジンは原型を崩して、白色と青色が混じった光球となった。

ユーノは『時の列車』の一両目に足を踏み入れて、じつくりと検分していた。

その後ろに帽子を深く被った発掘隊メンバーEが同伴していた。

モニターにコントローラーとなっているバイク。

「良太郎さんが乗ってるバイクに似てるけど、少し違う」

野上良太郎の愛車であるマシンデンバード？に似てはいるが、ヘッド部分に二本の角が装備されていた。

その角の形状は一両目の先端のネドケラトプスをモデルにしているものだった。

二両目に向かうと唯一の居住空間なのか、シートがL字になって設置されてテーブルが一つ置かれているだけだった。

テーブルの上には一つの黒いケースが置いてあった。

「これって……」

手にしてカチャッと音を立てて開けて、中身を取り出す。

桜井侑斗が所持しているゼロノスカードと酷似していた。

表面は青色でBと施されており、裏返してみると白色でSと施されていた。

「侑斗さんが持っているのとは違う」

取り出したカードをケースの中に収めて、テーブルの上に置いた。

メンバーEがケースを手にして、ポケットの中に収めた。

そして三両目に向かう。

そこには青色でT-R E Xの頭部を髣髴させる装甲車輛が一台置かれていた。

「凄い……。こんな車、ミッドチルダでもそうそう見られないよ」
別段自動車好きというわけではないが、それでもわかる。

自分の眼前にある車輛はミッドチルダの技術では到底製造できないほどのスペックを誇っていると。

「……」

ユーノの耳に悲鳴のようなものが聞こえた。

『時の列車』を出ると、一体のイマジンが発掘隊のメンバーを屠っていた。

「コイツは『時の列車』じゃねえか。こんな物があるってわかつちまったら俺達イマジンに常に怯えて生きてかなきゃなくなるってもんだ」

くるまえび型のイマジン……ブローンイマジンが教授の首を掴んで持ち上げながら、こちらを睨んでいた。

「ス、スクライア君……。に、逃げてくださ……」

「うるさいよ。オッサン」

ゴキリという音が鳴ると、ブローンイマジンが教授を離した。

教授の首が折れ、そのままぐったりとしていた。

誰が見ても絶命したのだという事がわかる。

「言っておくけど、外の連中も皆殺してるからお前等を助けに来るヤツはいねえぞ?」

ブローンイマジンはユーノにしてみれば一縷の希望となる事も先に粉碎した。

「くっ……」

ユーノは中腰になって構えを取る。

「ほお。やるつてのか? 俺達イマジン相手に正面きつて構えを取るのは初めてだぜ」

ブローンイマジンは構えは取らないが、その物腰に隙はひとつもなかった。

「でもま、結果はかわらねえぜ。テメエ等はここで俺に殺されてこの『時の列車』はバラバラの木っ端微塵になるんだよ!」

ブローンイマジンは高笑いしている。

自分が人間に遅れをとることはないと本気で考えている。

「どうかな?」

帽子を深く被った発掘隊メンバーEがユーノの後ろから告げた。

ユーノを押しつけて、自前の50口径の二連式の銃を構える。

ユーノとて時空管理局に勤めている人間だ。

質量兵器ともいえる『銃』は色々と見ているからわかる。

この人物が持っている銃は『次元世界』には存在しない。

「そんなオモチャで俺を倒そうつてのか? お笑いだぜ!」

ブローンイマジンが腹を抱えて笑う仕種を取る。

対して、メンバーEは余裕の表情を浮かべていた。

「やってみなければわからない、よ!」

メンバーEは引き金を絞る。

二箇所の銃口からエネルギー弾が発射される。

ブローンイマジンは右にサイドステップして避けようと試みるが、弾丸はまるで意思があるようにして自動で追尾して直撃させた。

「ぐわあああつー!!」

ブローンイマジンは後ろに仰け反る。

発掘隊メンバーEは帽子を脱ぎ捨てる。

「誰？」

ユーノがそのような台詞を吐くのはごく自然な事だ。

彼も発掘隊に参加する際に参加メンバーの名簿には目を通しているから、人相は全て記憶している。

だが目の前にいる青年の顔は知らない。

「日本人？なのはのいる海鳴の人？それとも良太郎さんや侑斗さんのような別の世界の日本から来た人？」

ユーノの独り言じみた推測に青年は反応した。

「リョウタロウ？君は野上良太郎を知っているのかい？」

青年が今度はユーノに訊ねる。

「ええ、まあ……。仲間ですし……」

「彼の顔の広さには驚くね」

青年は銃口をブローンイマジンに向けたまま小さく微笑んだが、すぐに顔もブローンイマジンに向ける。

「貴方は一体？良太郎さんとはどのような……」

ユーノが青年の素性を訊ねる。

「野上良太郎を始めとするデンライナーの連中とは知らない間柄じゃないが、君のように『仲間』ではないね。彼等にとって僕は『敵』と認識されても不思議じゃないくらいだからね」

青年はさらりと答える。

彼の口調や声色からして嘘をついているとは思えない。

となると、チームデンライナーとは微妙な関係の人物だと推測できる。

そして青年は更に口を開く。

「僕の名前は海東大樹だ。^{かいとうだいき}憶えておきたまえ」

青年――海東が短く自己紹介を終えると、黒いケースから一枚のカードをブウンという音を鳴らしながら取り出す。

海東はカードを銃身側面中央部に設けられているカード挿入口に挿入する。

50口径二連式銃の前面を左手で前へスライドさせる。

『カメンライド』

電子音声で発しながら50口径二連式銃――ディエンドライバーにマゼンタカラーで『K A M E N R I D E』と浮かび上がり、キウンキュウンという待機音が鳴り響く。

ディエンドライバーを海東は天に掲げる。

「変身!!」

高らかに叫ぶと同時にディエンドライバーの引き金を絞る。

『ディ・エンド』

電子音声が発し、海東の頭上に紋章が浮かび上がりシアンカラーのライドプレート十三枚となる。

赤、青、緑のシルエットが出現して、海東の周りを滑るようにして移動する。

その工程を三回ほど繰り返してから、三色のシルエットが同じタイミングで海東へと入り込む。

海東の姿が黒が目立ち、ポイントカラーとして銀色と黄色が入った姿へと変わる。

そして頭上にある十三枚のライドプレートが頭部にガスガスガストと刺さる。

直後に脇、腕内側、下半身に向けてシアンカラーが走る。

両目であるディメンションヴィジョンが輝く。

身体全身から突風が吹き荒れる。

次元をまたにける戦士。

全ての世界の『お宝』を守護し、手に入れる戦士。
仮面ライダーディエンド（以後：ディエンド）が次元世界に降臨した。

「電王でもゼロノスでもない仮面ライダー……」
ユーノの呟きをディエンドは聞き逃さない。

「見ていたまえ。電王ともゼロノスとも違う僕の戦い方を」

ディエンドはディエンドライバーの銃口を向けながらプローンイマジンの間合いを詰め始めた。

第十二話 「0070年 宝を守護する者」(後書き)

次回予告

ディエンドとブローンイマジンの戦いをただ見ているしかないユーノ。

激しい戦闘に耐え切れずに、遺跡は崩壊を始める。

ディエンドは一人去り、ユーノの身体から砂が噴き出る。

ユーノは気を失い、一つの家族が彼を拾った。

第十三話 「0070年 難は去っても幸は来ず」

第十三話 「0070年 難は去っても幸は来ず」 (前書き)

いつも読んでくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。

アンケートの締め切りは一月三十一日までとします。
ただのアンケートですけど、奮ってご応募ください。

第十三話 「0070年 難は去っても幸は来ず」

ディエンドはディエンドライバーの銃口を向け、引き金を絞る。

二箇所の銃口から魔力ともフリーエネルギーとも違う別室のエネルギーで構築された弾丸が発射された。

「君は列車の中に隠れていたまえ。守りながら戦うというのはどうにもやり辛い」

「は、はい！」

ディエンドの忠告に従うようにしてユーノ・スクライアは『時の列車』へと入った。

「まずはデメエからぶっ潰させてもらうぜー!!」

ブローンイマジンはフリーエネルギーで両手に自動拳銃を出現させて、銃口を向けると同時に引き金を絞る。

「できるかな？君に」

ディエンドは左腰に装備されている黒いケース……ライダーカードホルダー（以後：カードホルダー）を開けて、一枚カードを引き抜く。

ブウウンという音を鳴り響かせながら、ライダーカード（以後：カード）を一枚手にする。

ディエンドライバーを後方にスライドさせてカード挿入口に引き抜いたカードを差し込んで、前にスライドさせる。

ディエンドライバー側面から『ATTACK RIDE』とマゼンタカラーで浮かび上がる。

引き金を絞る。

ディエンドライバー側面の文字表示が『INVISIBLE』と切り替わる。

『アタックライド・インビジブル』

機械音声が発した直後に、ディエンドの身体が赤、青、緑のシルエットに切り替わって原型をなくした。

ブローンイマジンが放った弾丸は素通りしてしまう。

「どこ行きやがった！？出て来い！！」

ブローンイマジンは二丁の銃を構えながら、周囲を見回す。

「ここだよ」

声と同時にブローンイマジンの背後に赤、青、緑のシルエットが出現して三色は一つとなってディエンドライバーを構えているディエンドが出現する。

ディエンドライバーが銃口を構えて、引き金を絞る。

一度に二発のエネルギー弾丸が発射される。

振り向いたブローンイマジンも負けじと二丁の銃の引き金を絞る。

フリーエネルギーの弾丸が発射される。

四発の弾丸が発射され、宙で同時にぶつかって相殺される。

バアンボオンと爆煙が立つ。

互いに一瞬に近いが、視界が遮られる。

ブウンという音が鳴る。

ガシャツとディエンドライバーを後方へスライドさせて、先程引き抜いたカードを挿入口へと差し込む。

『ATTACK RIDE』

ディエンドライバーの側面にマゼンタカラーで表示される。

引き金を絞る。

『BLAST』と切り替わる。

『アタックライド・ブラスト』

ディエンドライバーが発射すると同時に、銃口からマシンガンのように数発のエネルギー弾丸が発射された。

「何！？」

ブローンイマジンも対処できないのか驚きの声を挙げながら、何発かを相殺する事はできたが全ては不可能なため直撃を許してしまう。
「ぐうつー！！」

ブローンイマジンは仰け反って足を数歩さがってしまう。

ディエンドがこの機を逃すわけもなく、間合いを詰める為に駆け出

した。

『時の列車』に避難しているユーノはディエンドの戦闘を内部から見ていた。

「あの銃は単なる射撃性能だけでなく、差し込んだカードの能力を引き出す機能も備わってるんだ……。たしかに電王やゼロノスとは違う戦い方だ」

ディエンドはカードの能力と自前の身体能力を駆使して戦っている。カードの枚数だけ戦術が組めるという事になる。

それだけで電王やゼロノスよりも利点が多いという事になる。

ただし、素人にいきなりできるかといわれると確実に不可能だ。

カードの枚数＝手数となるが、素人ならではの落とし穴もあるわけだ。

冷静に判断できないと手数の多さに混乱して敵にやられるという事になる。

だがディエンドにはそのような『迷い』が一切ない。

それだけカードを駆使して実戦を乗り越えてきているという証明だろう。

「凄いですねえ。あの人」

列車内から声がする。

「そうだね。カードをいくら所持しているといっても、それぞれの特性を理解していないと宝の持ち腐れになるね」

ユーノは声に対して自然に答える。

「え？」

そこで自分が何と応対しているのか気付く。

列車内にいるのは自分以外にいないはずだ。

周囲を見回す。

前はもちろんの事、横にも背後にもいない。

「もしかして！」

そう思いながら、頭上を見上げるがただの天井で何も無い。

「気のせい、とは思えないか……」

イマジンの出現に仮面ライダーの登場とまるで、自分の中にある『平穩』を全てぶち壊すように。
今なら何が起こつても不思議ではないからだ。

ディエンドがブローンイマジンとの間合いを詰めてから、左フックを繰り出す。

ブローンイマジンにとっては避けきれない一撃ではないので、しゃがんで避ける。

「甘いね」

ディエンドライバーの銃口がしゃがんでいるブローンイマジンに突きつけた。

引き金を絞る。

二連式の銃口からエネルギー弾丸が発射される。

「！！」

ブローンイマジンは首を傾けて避けると同時に、二丁の銃をディエンドに向けると同時に引き金を絞る。

「！！」

ディエンドはバック宙をして後方へと下がって、宙に浮く。

その間に一回引き金を絞る。

そして、両脚が地面に着地すると同時にもう一回引き金を絞る。

全弾がブローンイマジンに直撃する。

「がはあっ！！」

身体からブスブスと火花が飛んで、煙が噴き出ている。

だが『やられたらやり返す』という意味が、ブローンイマジンの全身を突き動かしていた。

「潰す！！」

叫ぶと同時に銃を構えて、発砲する。

ディエンドは飛んでくる弾丸を横に走りながら避けていく。
弾丸は全て遺跡の壁に当たっていく。

頑健な造りではないらしく、めり込んだ弾丸を中心にして壁に亀裂が走り始める。

「まいったね……。長期で長引かせるわけにはいかないか」

カードホルダーからカードを一枚引き抜く。

そして、『時の列車』を見る。

「宣言はしてしまっただしね」

ディエンドライバーを後方へスライドさせてから、カードを挿入口に差し込んで手ではなく、ディエンドライバーを前に振った勢いでガシャッとスライドさせた。

側面にマゼンタカラーで『KAMEN RIDE』と浮かび上がる。走っていた両足は停まり、ディエンドライバーを構えて引き金を絞る。

『BLADE』とスペードの紋様を背景に切り替わる。

『カメンライド・ブレイド』

機械音声と共に赤、青、緑のシルエットが出現して、三方向に走ってから三色のシルエットは一つになる。

銀色と青色が目立ち、頭部はヘラクレスオオカブトをモチーフにし赤い目をした戦士が出現した。

左腰には専用武器が吊るされている。

戦士はプロンイマジンを睨んでいる。

戦士――仮面ライダーブレイド（以後：ブレイド）は一言も発することなく、プロンイマジンへと向かっていった。

「あれも仮面ライダー、かな？」

戦いを『時の列車』で覗き見ているユーノもディエンドが召喚したブレイドを強く『仮面ライダー』だと言い切ることはできなかった。何せ知らないのだから無理もないことだが。

（何が起ころうとも不思議じゃないと覚悟を決めたけど……）

ここまでとは予想はしていなかった。

召喚されたブレイドはただ目の前の敵を倒すかのようにして、プロ

ーンイマジンに殴りかかっている。

避けられてはいるものの、その事に苛立ちや焦りを感じていないのか黙々と攻撃を繰り返していた。

その攻撃には『意思』のようなものが感じられない。

「戦士の召喚まで。もうほとんど魔法だよ……」

あまりに電王やゼロノスとは違う戦いぶりに、ユーノはどのようなコメントをすればいいかわからなかった。

「あんな事まで出来るとなると、次に何が出てくるんでしょうね？」
声はどこかディエンドの行動に期待していた。

「どこにいるの？」

ユーノは声に向かって試しに訊ねるが、何も出てこなかった。

光球が出現し、ユーノの頭上に浮いていた。

ディエンドとブレイドの二対一となってブローンイマジンにしてみれば苦しい状況に追い込まれていた。

二丁の銃で狙いをつけるが、どちらがいいかわからない。

ディエンドを狙えばブレイドがフリーとなって襲い掛かってくる。

反対にブレイドを狙えばディエンドが何かをしでかしてくるのはわかってる。

「くっ！」

ブローンイマジンは結果として、一丁ずつそれぞれに狙いをつけて引き金を絞った。

だが元々射撃性能が低いので当たるはずがなく、ディエンドとブレイドは難なく避けてしまう。

弾丸は全て遺跡の壁にめり込む。

「ん？」

パラパラつと天井から土の欠片が降ってきた。

「そろそろヤバイね……」

ディエンドは周囲を見回しながら、ここがあまり長くもたないと理解する。

その直後にカードホルダーからカードを一枚引き抜く。
ディエンドライバーを後部にスライドしてから、カードを挿入口に差し込む。

そしてディエンドライバーを前へ突き出す。

同時にスライドしてブレイドの胸部に黄色でスペードの紋様と『FINAL FORM RIDE』と浮かび上がる。

そして、ディエンドはブレイドに狙いをつけて引き金を絞る。

「痛みは一瞬だ!!」

胸元が『BLADE BLADE』へと切り替わった。

『ファイナルフォームライド。ブ・ブ・ブ・ブレイド』

ディエンドライバーが発する。

ブレイドの背中に赤色のランプカードの裏面のようなものが円と
なつて出現する。

次に胴が伸びて、頭部が折れるようにして後ろへと引っ込む。

身体全身が逆立ちになりながら腰が抜れていく。

空に向かって突き立てている両脚が内股になって太股、ふくらはぎ
の裏側から刃が出現してブレイドの専用武器である醒剣ブレイウ
ザーが腰元から独りでに離れて両足の頂点に収まる。

ブレイドのファイナルフォームライド（以後：FFR）形態、ブレ
イドブレード（以後：Bブレード）である。

ディエンドはBブレードを手にする。

更にカードホルダーからカードを引き抜いて、ディエンドライバー
に差し込む。

『ファイナルアタックライド。ブ・ブ・ブ・ブレイド』

ディエンドライバーの機械音声直後にディエンドはBブレードを握
つて、プローンイマジンに切りつける。

Bブレードの刀身は青いエネルギーに覆われている。

袈裟から右薙ぎへと斬りつける。

斬った瞬間にブワツとエネルギーが噴き出て、衝撃波が生じて最下層全体に伝わる。

「ぐおわああああああー!!」

ブローンイマジンは自身に斬りつけられたエネルギー量と肉体を耐久できるエネルギーの許容量を超えているため耐え切れずに爆発した。

爆煙がたちこめ、Bブレードの姿はなくなった。

イマジンは光球となって、自分の塹^{ねぐさ}である『時の列車』に入り込んだ一人の少年を見ていた。

時折、声をかけてみるが大袈裟に驚く様子はなかった。

（魔法の世界だから、かなあ）

実を言うとこのイマジン。『時の列車』の外を出た事がない。

出たいと思わなかったというのもあるし、イマジンの本懐にも興味を見出せなかったというもある。

そもそもイマジンの本懐はどちらかというと嫌っていた。

（人の弱みにつけ込むなんて、嫌だもん）

イマジンとは思えない考えだ。

（この人、僕の事どう思うかなあ）

自分にとっては一番最初に会話をした人間という事もある。

大袈裟に驚かなかったからこそ、妙な期待感を抱いてしまう。

少年が『時の列車』から出ようとする。

「あ、待つて！待つてください！」

イマジンは光球状態で姿を現し、声のする方向に顔を向けている。

つまり今の自分と目が合っているのだ。

だがそれは一瞬でイマジンは少年……ユーノの中に入り込んでいた。

ユーノは自分が幻を見たのか疑っていた。

何かが自分の身体の中に入り込んだ感覚のようなものがある。

だがそこに論理的根拠がない。

両手を見るが、外見的な変化はない。

かけている眼鏡を外すが、視力がよくなったという事もない。

「気のせいかな……」

ユーノはドアを開いて、外を出る。

「やあ。こっちは片付いたよ」

ディエンドが軽く手を挙げる。

「今のは一体なんですか？」

ユーノはブレイドやFFRのBブレードの事を訊ねる。

「手品師にとつて、『死』に等しい行為とは何だかわかるかい？」

ディエンドが質問で返してきた。

「手品マジックの種トリックが明るみになる事、ですよね」

ユーノは自分が知りうる限りの考えをディエンドにぶつける。

「正解。僕の戦い方も同じ様なものだから聞かないでくれたまえ」

「はあ」

そう言われると、ユーノとしても黙っているしかない。

「そうだ！教授達は……」

ユーノは万に一の望みで生存者を探ろうとする。

「残念だがここにいる僕達以外は全員死亡している。この遺跡が墓地として使われたのがせめてもの救いかもしれない」

ディエンドは黙祷をささげる。

変身している以上、変身者はどのような表情を浮かべているかは想像するしかない。

「死者に敬意を払う事をいい事だが、急ぎたまえ。ここは間もなく崩れる」

ディエンドの言うように天井からパラパラと土がこぼれ、大きな瓦礫が落下を始める。

「おわっ！！」

ユーノはスレスレに落ちてきた事に驚き、仰け反る。

「ど、どうしたら……。脱出するにしても走ってたら間違いない下

敷きになる……」

（転送魔法？駄目だ。目的地を指定する時間がない！）

八方ふさがりになりつつあるユーノをディエンドは見ていた。

「それを使おうとは思わないのかい？君は『時の列車』を知らないわけじゃないんだ」

「でも……」

「使わないなら、その『時の列車』は瓦礫の下敷きになるし君もここで死ぬよ。では僕はお先に失礼」

ディエンドは忠告をすると、カードホルダーから一枚カードを引き抜く。

カードを差し込む。

ディエンドライバー側面にマゼンタカラーで『KAMEN RIDE』と表示されて、引き金を絞る。

『AGITO』と切り替わる。

『カメンライド・アギト』

機械音声と同時に赤、青、緑のシルエットが出現して上下左右に行き来してから中心でシルエットが重なると、金色と黒色が目立つ色彩で、複眼はブレイド同様の赤色で龍をモチーフにした戦士……仮面ライダーアギト（以後：アギト）が出現した。

ディエンドはすかさず、カードホルダーからもう一枚のカードを引き抜く。

そしてディエンドライバーに差し込む。

アギトの胸部に黄色で『FINAL FORM RIDE』と浮かび上がる。

「痛みは一瞬だ……」

ディエンドが引き金を絞る。

アギトの胸部がアギトの頭部を表している紋様と同時に『AGITOTORNADOR』へと切り替わった。

『ファイナルフォームライド。ア・ア・ア・アギト』

ディエンドライバーが機械音声で発する。

アギトの背中にバイクのシート部分が出現する。

跳躍した直後に、両腕と両脚に赤色と金色が目立つ装甲が出現する。その装甲が命ずるままにアギトは人型から別の型へと変形を始める。やがてアギトは愛車であるマシントルネイダーのスライダーモードと酷似した姿――アギトトルネイダー（以後：Aトルネイダー）へと変形を完了した。

ディエンドはAトルネイダーのに乗っかる。

そして、そのまま出口へと向かっていった。

残されたのはユーノだけだ。

「海東さんの言うとおりだ。このままじゃ僕は下敷きで一卷の終わりだ……」

ユーノは『時の列車』に乗り込む。

現在は一両目、車輛全体を操縦するとしたらこの車輛だけだろうと推測する。

「このバイクで操縦できると思うけど……」

ユーノは五年前の戦いの際に、デンライナーに乗車した経験はあるがどのようにして操縦しているかは知らない。

取扱説明書らしいものはここにはないし、探す余裕もない。

コントローラーとなるバイクに跨る。

アクセルを噴かす。

ブオンと鳴って前輪と後輪が回転を始める。

その直後にガッコンという音がユーノの耳に入った。

バイクの前面にあるモニターは黒い画面のままだったのに、前面の景色が映し出されていた。

「動いてる？でもこれなら！」

ユーノはバイクのグリップを思いっきり回す。

『時の列車』が線路を敷設・撤去しながら走り出した。

ガガガガガンという音を鳴らしながら、遺跡が崩れていった。

ディエンドの変身を解除した海東大樹は崩れていく遺跡を見ながら

ポケットの中にしまいこんでいたカードケースを取り出す。

「コレを『お宝』にする事が出来る人物だったのに……」

海東にしてみれば今手にしている物は『お宝』ではなく『ガラクタ』だった。

彼の言う『お宝』には様々な捉え方がある。

誰から見ても価値があり、売却した際には高額が確実に見込める『お宝』

一部の人間には大変価値があるが、一部の人間には何の価値もない『お宝』

そして、殆どの人間にとってはガラクタ同然だがたった一人にとっては何物にも勝る価値がある『お宝』

彼はそれを時には手にし、時には護っていたのだ。

今回の目的は『お宝』は『入手』と決めていた。

しかし、それは変更された。

何故ならユーノがこのカードケースを手にした時、海東には『輝き』が見えたからだ。

この『輝き』とはいわば『手にするに相応しい』と思われる人間が物に触れたときに生じるものだ。

つまり物に『輝き』を発せられる人間というのは端から見たら『ガラクタ』と思える物がその者にとっては『お宝』になるという事になる。

「コレを『お宝』にできる彼は間違いなく、これから先険しい道を辿る事になるね」

海東は確信に近い予想をする。

『お宝』を手にした者にはそれなりにリスクが訪れる事を知っているからだ。

それが、一人の人間の人生を変えるほどの『お宝』なら尚の事だろう。

「ん？」

ゴゴゴゴゴという音が鳴り響く。

その直後に砂煙が宙を舞い、巨大な影が地中から出てきた。

砂煙から線路が出現し、巨大な影――『時の列車』が出現した。プシューツと音が鳴ってドアが開き、ユーノが出てきた。

「はあ……はあ……はあはあ」

出てきたユーノは疲弊しており、その場に座り込む。

無理もないだろうと海東は思う。

ぶつつけ本番で自動車やバイクとは違う別物を操縦して、生き永らえたのだから。

「お疲れ」

海東はそう言いながら、ユーノの前に立ってカードケースを差し出した。

「コレは？」

「受け取りたまえ。コレは今から君の『お宝』だ」

「え、あ、どうも。でもどうして？貴方はコレを私物にすることも出来たんじゃ……」

ユーノの質問に海東はというと。

「僕が手に入れるのは『お宝』だけさ。そしてソレは君が持つことによつて初めて『お宝』になって、君以外には『ガラクタ』になるとわかつたから君に渡しただけさ」

「？」

ユーノは首を傾げる。

「今はわからなくてもいい。でもいずれはわかるよ」

海東はそう告げると歩き出す。

その前の風景が歪みだす。

海東はユーノに顔を向け、呟く。

「頑張りたまえ。仮面ライダーになる運命の少年」

そして今度は真っ直ぐ前を見据えて歪んだ風景の中に入り込んだ。

「あの人、何て言っただろう？」

ユーノは海東の最後の呟きを聞き取る事ができずに、首を傾げていた。

『時の列車』は空間を歪ませて、線路を敷設して走っていった。

見送ってからユーノは手にしたカードケースを見る。

「僕にとつての『お宝』か……」

海東の言っている意味が理解できない。

（これがもし、侑斗さんのゼロノスと同じシステムなら僕もなれる……）

このカードケースの中に入っているカードを用いれば仮面ライダーゼロノスに変身できるとユーノは推測する。

（でも、使えば間違はなく……）

だがゼロノスカードの効力を知っているため、その考えはすぐに打ち消されてしまう。

ゼロノスカードの効力。

それは使用者に関する記憶を周囲の者達が忘却していく事だ。

使えば二度と元の生活を歩む事はできなくなるだろう。

使用者と相手との記憶に『ズレ』が生じるからだ。

「それよりもこれからどうしよう……」

発掘隊は自分を除けば全滅である。

最悪な事に救難信号などの器具もご丁寧にブローンイマジンは破壊している。

こちらから助けを呼ぶ事はできない。

今自分がいる次元世界は臨行次元船りんこうじげんせんは一応来るが、辺境中の辺境であるため一日に一回くらいしか来ない。

事情を時空管理局に伝えたいというのも本音だが、まず自分が生き残る事が先決だ。

「港に行くにしても、地図も全部壊されちゃってるからなあ……」

こんな時自分もデバイスを持っておけばよかったと考えるが、ないものねだりをして仕方がない。

「とにかく歩こう。もしかしたらこの世界に住んでいる人に会えるかもしれない」

ユーノはカードケースをポケットにしまいこんで歩き出す。歩きたびに彼の身体からバサッと白い砂が零れ出す。

砂は独りでに集まって、上半身と下半身が逆転していた真っ白な状態のイマジンとなる。

「あの、待ってください!」

「え?」

背後から声がしたので、ユーノは振り向くとそこにはフェレットと仮面ライダーのイメージが混濁したイマジンがいた。

「人が住んでる所は遺跡から南にありますよ!」

イマジンがユーノが歩く方角は間違っていると忠告する。

「えーと……君はもしかして、『時の列車』で話しかけてくれた……」

ユーノは何故ここにイマジンがいるのかわからなかった。

後、何故真っ白で上半身と下半身が逆転している妙な姿なのだろうと。

「はい!僕は……。あ、すいません。僕、まだ名前ないんです」

イマジンが首をがっくりと落とす。

「僕達イマ진은契約者と契約を交わさないと、実体化できないんです」

現在このイマジン宇宙ぶらりんの状態という事になる。

「もしかしてその契約者って……僕?」

「はい!」

ユーノは自分を指差し、イマジンは無邪気に首を縦に振る。

「……………」

ユーノは何も言えなくなっていた。

(ここまで来ると、本格的に魔導師から離れていくね……)

イマジンに憑かれてゼロノスカードまで所持しているのだから、ユーノでなくても言うだろう。

「で、南にいけば村か町があるんだね？」

「はい！『時の列車』でこの世界の地理は大体憶えてます！」
イマジンが自信を持って言う。

「それは頼もしい」

ユーノはこの聡明だが子供っぽいイマジンを信じる事にした。

イマジンが指定した方角を歩いて三時間後。

「はあはあ……はあ……はあはあ……」

ユーノは激しく息を乱し、両肩を上下させて歩いていった。
足取りも重くズルズルと引きずっているようにも見えた。

「そういえば聞いてなかったけど、その場所ってどのくらいの距離なの？」

「えーと五十つてモニターには出てました」

「それ絶対にメートルじゃなくてキロメートルだと思うよ」

ユーノはあと何十キロもあるかなければならないと思うと、『時の列車』を手探りで操縦した事や発掘の際での緊張感などによる疲れが一気に身体に押し掛かってうつ伏せになって倒れた。

「あ、すっかり！」

「いくら身体を鍛えてても、精神的にもう……ダメ……」

ユーノはイマジンにそう呟くと完全に気を失った。

「ど、どうしよう！僕この身体じゃ運べないし……！」

あたふたとするイマジン。

上半身下半身逆転状態でその行動を取ると、とてもシユールである。
イマジンの耳に排気音と鼻に匂いが感じた。

「人が来る！これなら！」

そう言うと、イマジンユーノの身体に入り込んだ。

「行き倒れ？」

「もしかして死んでないよね？お父さん」

「まあ待て。まずは脈を取ってみる」

ジープに乗っている壮年の男と帽子を被った少年は、倒れているユーノを見つけた。

壮年の男はユーノの脈を取る。

「大丈夫だ。生きてる。ただ相当疲れてるみたいだな」

「助けるよね？」

「当たり前だろ」

壮年の男はユーノをジープの後部座席に寝かせて、そのまま自分達の村へと走らせた。

第十三話 「0070年 難は去っても幸は来ず」（後書き）

次回予告

ある村に運ばれたユーノはとある家族に手厚く看護される。

その頃管理局では発掘隊が行方不明になったので搜索チームが編成されていた。

発掘品で賄う村であり、小さくはあるがそこそこ裕福だった。

しかし、そんな村にも魔の手が迫っていた。

第十四話 「0070年 ユーノ・スクライアの情報」

第十四話 「0070年 ユーノ・スクライアの消息」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

くどいようですが、アンケートは募集中です。

第十四話 「0070年 ユーノ・スクライアの消息」

管理世界。

時空管理局が管理している世界というのが世間での常識で通っている。

その反対の意味を『管理外世界』と呼ばれている。

しかし、管理世界もピンからキリまでが平等に目が行き届いているわけではない。

そう、本拠地があるミッドチルダから離れている次元世界は結構見落しがちになっているというのがマスコミ達が時空管理局に対して批判記事を作り上げる際に最適なネタであつたりする。

『管理世界』というものに決して安全ではないと知ったのは僕はこの一件が初めての事だつた。

*

「うん……うん……」

ユーノ・スクライアは閉じていた双眸をゆっくりと開き始めた。意識がぼんやりしていることもあるからか、視界はハッキリしておらずどこかボケていた。

（眼鏡がかかつてない？外された？）

ユーノはベッドから起き上がりながら、眼鏡がないことを確認するかのように掌で顔をペシペシする。

視界はさつきと変わらないが、これは単純に視力低下によるものだ。ぼんやりとする視界でありながらも眼鏡らしき輪郭を見つけて手に取る。

眼鏡をかけることでやっと視界がハッキリする。そして周囲を見回す。

木質構造の家だと推測しながらベッドから起き上がるが、仰け反るようにフラツとしてお尻をベッドに乗つけてしまう。

「大丈夫ですか？」

ユーノの身体から砂がこぼれて、やがて形となっていく。

上半身と下半身が逆転し、フェレットと仮面ライダーが混濁したイメージのイマジンが出現した。

「何とか……ね。君は僕が寝てる間も起きてたの？」

「はい。僕は意識ハッキリしてましたから。それがどうかしたんですか？」

「じゃあ、僕を運んでくれたのはどんな人だったか説明できる？」

ユーノはイマジンにどのような人物が助けてくれたのかを訊ねる。

「ええとですね。一人は男の人でした。呼び方は『おじさん』っていう感じの年齢の人ですね。もう一人はお兄さんと同じ年くらいの男の子でしたよ」

イマジンが二人目に関してはどこか曖昧な言い方をしていた。

「自信がないの？」

「うーん。そういうわけではないんですけど、何か変なんですよ
え……」

イマジンが腕を組んで、首をかしげている。

ドアを叩く音がしたので、イマジンはまたユーノの身体の中に入り込んだ。

「はい。開いてます」

ユーノがそのように返すと、帽子を被った少年がトレイを両手に持って入ってきた。

トレイの上にはパンとコーンスープが乗っかっていた。

「よかった。目が覚めたんだね」

少年はトレイをユーノに渡す。

「……」

ユーノは少年の顔が近くなると、何かを感じた。

イマジンが何故曖昧な答えしか出せなかったのか理解できたようだ。

「ん？どいつしたの？」

「あ、いや何でもないよ。それより助けてくれてありがとう」

「いいよ。困った時はお互い様ってヤツだよ」

ユーノはその場でトレイを持ったままで失礼ではあるが頭を下げ、少年は笑顔で返す。

「食べ終わったらリビングに来てくれないかな？君の事を聞かないからね」

少年はそう言つとドアを閉めた。

ユーノはパンをかじり、コーンスープを飲み始めた。窓から見える景色で外は青空から茜色になっていた。

*

ええええええええええ！！

と時空管理局のレクリエーションルームでは大きな声が出ていた。

そのような声を出したのは高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン、八神はやてを始めとしてアルフ（幼女）、ヴォルケンリッター、エイミー・リミエッタである。

クロノ・ハラオウン、リンディ・ハラオウンは思わず耳を塞いでしまったが彼女達がそのような悲鳴を上げてしまう理由も理解できるので抗議をする気にはならなかった。

「クロノ君！ユーノ君が行方不明ってどういうこと！？」

なのはがクロノに詰め寄る。

「な、なのは。落ち着いて！」

「気持ちわかるけど、落ち着いて！な？」

フェイトとはやてが、今にも首根っこを掴みかねないのはを何とか抑えようとしていた。

「なのはちゃん！」

エイミーの一声が決めたのか、なのははクロノから離れる。

「なのはさんが取り乱すのも無理はないと思うわ。ユーノ君が参加している発掘隊は管理局が支援しているから一日ごとに定期連絡する事が義務付けられているの」

リンディがクロノに代わって説明を始める。

「その連絡がないから行方不明になっている、と？」

理解を始めたなのはにリンディは首を縦に振る。

「別の遺跡に行ったとかじゃねーの？」

ヴィータがありえそうな予想を口にする。

「それはない。別の遺跡に足を踏み入れるにしても期間を延長するにしても連絡はあるからな」

クロノが否定する。

「それがないとなると確かに心配だ」

シグナムが腕を組んで言う。

「既に搜索チームが編成されているはずよ。でも本格的な搜索は明日以降になるでしょうね」

「義母さん。何故ですか？」

皆が首をかしげ、代表してフェイトが訊ねる。

「距離の問題よ。ミッドチルダからユーノ君のいる次元世界までは臨行次元船でも片道十六時間かかるのよ」

十六時間！？

その場にいる女性陣は思わず大きな声を上げる。

「ちなみに管理局の艦を使っても十時間だ。すぐ搜索なんて事はまず出来ないだろう」

下準備に所要する時間もあるのだから当然だ。

クロノが次元航行艦を用いても六時間しか短縮できない事を打ち明ける。

「何かわかったから連絡するよ」

クロノの言葉はひとまず今日は終わり、と推測させるには十分なも

のだった。

*

食事を終えたユーノは空になった皿を乗せたトレイを持って、リビングに足を踏み入れていた。

そこには自分に食事を運んでくれた少年と幼い少女、そして壮年の男性と恐らく似た年齢だろうが若く見える女性に、一番最年長とされる老人（男）がいた。

服装は軽快なものばかりで、洒落っ気よりも機能重視というのが一目でわかった。

「やあ気がついたみたいだね」

家族の大黒柱的役割である男性が新聞を読んでいた。

「丸一日、眠ってたのよ」

その大黒柱を支える女性が笑顔でユーノが手にしているトレイを受け取った。

「お兄ちゃん。大丈夫？」

幼女がユーノを見上げるかたちで心配する。

「ありがとう。大丈夫」

ユーノはしゃがんで感謝の言葉を述べる。

「その身なりからしてお前さん。本土（ミッドチルダの事）の人間なのか？」

「ええ、まあ……」

老人の質問にユーノは当たり障りがないように答える。

民間人が時空管理局所属の人間に対して、好意的か否かという微妙な部分なのであえて伏せておく事にした。

それに自分は所属しているといっても、生粋の内勤である。事件が起こったからといって前線で活躍する権限は緊急時でも与えられていない。

「立ちっ放しもなんだから座ったら？」

少年が椅子に座るように促す。

「は、はあ……」

ユーノは促されるままに椅子に座る。

対面には新聞を読んでいる男性と穏やかな雰囲気を出している女性が座っていた。

新聞を畳んでこちらに視線を向けてきた。

「早速だが君の名前と何故あんな所にいたのかを教えてもらえるかい？俺はファータイだ」

「妻のムツティです」

二人は『人に名乗らせる前にまずは自分から名乗る』という礼儀を重ねたのだろう。

「ユーノ・スクライアです」

「僕、フィリオ」

「わたし、スール！」

ユーノが名乗った直後に子供達二人も名乗る。

「僕はグランベールじゃ」

最後に老人が名乗った。

「ところでスクライア君。君は何故あんな所で倒れていたんだい？しかも身一つで」

ファータイは発見した時のユーノの身なりに疑問を感じていた。

（早速一番難しい事聞いてきましたよ）

深層意識の中に潜伏しているイマジンが声をかけてきた。

（正直に全部話せば一番いいんだけどね）

しかし、この家族がイマジンのことを話して信じてくれるかどうか疑問になる。

それにそんな厄介な存在からどうやって生き延びる事ができたのかと訊ねられるのも確実だ。

そうになると、ディエンドの事も話さなければなくなる。

（何でだろ……。真実を話そうとすればするほど現実味がなくなっていくような気がしてならないんだけど……）

『事実は小説よりも奇なり』ということわざがあるが、まさにその通りだと思ってしまう。

（ごまかすのも辛いしなあ）

折角助けてくれた恩人に対して、嘘八百を並べるのも正直心苦しい。（どうします？）

イマジンもお手上げらしい。

（訊ねてきたら正直に答える事にして、とりあえずは当たり障りのない答えで行こう）

ユーノとイマジンの相談は終わる。

この一人と一体の会話は誰にも聞かれてはいない。

「実はある遺跡の発掘の仕事で、この次元世界に来ていたんです。でもちよつとしたトラブルに巻き込まれて遺跡は崩壊して僕以外の発掘隊のメンバーは全員帰らぬ人になりました……」

イマジンやディエンドの事を隠して真実味のある話をするにはこう言うのがベストだとユーノは考えている。

「身一つというのも命からがら逃げてきた証拠というわけだね？」

「はい」

ファアティが確認するように訊ねて、ユーノは首を縦に振る。

「可愛そうに……」

ムツティは我が身に降りかかった出来事のように哀れんでいた。

リビング内の空気が途端に重くなる。

「帰るにしても路銀はないのじゃろ？それに前さんの姓は『スクライア』なのじゃな？」

グランベールが何かを思い出したかのように、ユーノは訊ねる。

「はい。そうです」

「父さん。どうしたんですか？」

ファアティはグランベールの意図がわからない。

「お前さん、しばらく儂等の仕事の手伝いをしてくれんか？何、別に疚やましいことをするわけではないの。それにお前さんが『スクライア』なら心強いしの」

フアーティはグランベールが何故、ユーノに仕事を手伝わせようとしているのかようやく理解した。

「俺達は遺跡を発掘してその中で換金できそうな物を街で売り払って生計を立てているんだ」

フアーティは自分達の稼業を簡潔に説明する。

「なるほど。それならスクライア^僕にとってはおうってつけの事ですね」

ユーノは理解してからひとつ気になった事を訊ねる。

「でもそれって犯罪にならないんですか？」

学者的観点からだトレジャーハントは問題視されている。

何せ遺跡から発掘した物を商売のタネにするという行為そのものは立派な先人に対しての冒瀆されているからだ。

いくら時空管理局が管理していたとしても、目の届かないところでは発掘品の売買という行為は行われていたりする。

「その点は問題ないよ。闇取引でない限りは構わないという特別な措置がされているからね」

「それにここは遺跡世界。遺跡に潜ったらどんな素人でもそこその価値のあるものを見つける事ができるんだ」

フアーティの説明にフィリオが補足する。

「わたしもこの前見つけたよー」

スールも言う。

ここにいる人達は発掘品を売り払う行為そのものに罪悪感を抱いてはいない。

そもそも『スクライア』とて依頼での発掘でない限りは品を売って収益を得たりする事もあるので、彼等を批判するつもりはない。

（僕の手持ちじゃ、港に行くまで心許ないのも確かだしね）

ミッドチルダに帰る場合、自力で帰るとなると金は必須だ。

そうなる自分が取るべき行動は自ずと出てくるというものだ。

「わかりました。微力ではありますがよろしくお願いします」

ユーノは彼等の仕事を手伝う事にした。

この場にいる誰もが大いに喜んでくれた。

*

ユーノ・スクライアを始めとする発掘隊が行方不明と正式に認定されてから一ヶ月が経過した。

*

海鳴聖祥学園の屋上。

空は快晴であり、昼休みに昼食を取るには最適な環境である。

なのは、フェイト、はやて、アリサ・バニングス、月村すずかは持参したお弁当を持って食していた。

ただ一人、空とは対照的に暗い雰囲気を漂わせていたが。

「ユーノ。まだ見つかってないの？」

「なのはちゃん。あんな状態でお仕事大丈夫なの？」

アリサとすずかが、なのはの耳には入らないようにフェイトとはやてに訊ねてくる。

ちなみに四人ともまだ弁当は半分も残っていたりする。

「今はお仕事してるか、学校で授業受けてる時以外はずっとあんな感じやで」

「行方不明になって一ヶ月も経つけど、手掛かり一つもないんだもん。仕方ないよ」

いつもならガールズトークで花咲くのだがここ一ヶ月は葬式に近いくらいに暗かった。

「ユーノ君……」

なのはが呟く。

暗い雰囲気の中で言うから正直切なくなってくるといつのが聞いている側の意見だったりする。

「ユーノ君が帰って来んかぎり、なのはちゃんはあのままやるね」

「うん……。私達に出来ることって悔しいけど、ないよね」
「フェイト、はやて。あんた達がユーノを捜すのに手伝えないの？」
アリサが訊ねてみるが、フェイトもはやても首を横に振るだけだ。
「どうして？」
「捜索チームは既に編成されとつてな。私等は指名されてないんよ」
「すずかの問いに、はやてが打ち明ける。」
「あー！！もうー！！」
アリサは何もできない自分と状況に苛立っていた。
余談ではあるが、なのはは暗い雰囲気纏っていながらも弁当箱は空にしていた。

*

ユーノは現在もファアーティ達と共に遺跡世界で発掘作業をしていた。
「そろそろ切り上げようか。スクライア君」
「はい」
ファアーティの指示に従うように、作業を打ち切った。
「父さん！スクライア君！」
「はやくー」
ジープに乗っているフィリオとスールが手を振って、来るように促す。
二人も乗り込んで、発進させる。
ジープは街へと向かい、本日収穫した発掘品を売りに行く。
ユーノの取り分は収入から大体一割だ。
一ヶ月間溜めたお陰でミッドチルダに帰る為の費用はできた。
後はいつ帰るかだけだ。
（なのは達、心配してるかな……）
自分ひとりがいなくても大して世の中変わらないという思いが根底に根付いているので、今ひとつ自信がもてない。
「スクライア君。もしかして帰りたい？」

後部座席に座っているフィリオが訊ねてきた。

「どうなんだろ……。最初ほど帰りたいて思わなくなったのは確かだけどね」

この家族はとても親切で温かい。

高町家を思い出させてくれるくらいにだ。

村に到着すると、専用駐車場に停めて自宅への帰路を辿る。

村に入るといつもの穏やかな空気はなく、どこか剣呑なものだった。その証拠に質量兵器（銃器類）を手に携えているスーツ姿の男達が村の中を歩き回っていた。

新暦になった現在、質量兵器の使用は原則として禁じられている。

だがそんな法を守るのは力ある者の庇護下にいる者たちだけであつて、その庇護の外にいる者達が真つ正直に守ることはない。

「ドロール一家……」

「何ですソレ？」

ファアティから出る新しい言葉にユーノは訊ねる。

「この村を仕切っているマフィアだよ。上納金として十日に一回は僕達の稼ぎの二割をぶん取るんだよ」

フィリオが嫌悪を露にして告げる。

（どこの世界にもいるんだなあ。そういうの……）

ミッドチルダに限った事ではないがそれでもしみじみ考えさせられてしまう。

（捜索隊が来たら片がつくかもしれないね……）

ユーノ自身、現在の戦闘力ならば純粋な殴り合いでマフィア程度ならば後れを取る事はない。

だが現在、事を構えた場合不利になるのは間違いなく自分達だ。

仮に街を歩いているマフィアを公衆の面前で倒したとしたら、村人達を人質に取るのは必須だ。

自分がマフィア側ならそうするからだ。

「しかし妙だ。上納金の回収は五日前に行われたばかりなのに……」
ファアティが五日前に大金を抱えて、外を出たことをユーノは思い

出した。

「あの時のお金が上納金だったんですね……」

「まあね。戦えない者にしては金を払って身を守れるんだっただろ
れほどありがたいものはないけどね」

「……………」

ファージェイの言葉に、ユーノは何も言わない。

正確には何も言えないのだ。

彼の言葉を批判する資格は自分にはないのだから。

「どへどへどへへへ」というドロール一家のボスであるドロール
が下品な笑い声を出しながら、村の中を歩いていた。

ユーノはドロールを凝視しながら、何かを感じた。

「ファージェイさん。もしかしてドロール一家より上の組織っていた
りますか？」

感じた事を口に出した。

「スクライア君？」

「集金日でもないのにマフィアが村に押し入ってる所からしてただ
事ではないと思います。多分マフィア間の抗争が起ころうとしてる
んじゃないかと思うんです」

「まさか！？ドロールがペーシモ一家に反旗を翻すってのかい？」

「ペーシモ一家がドロール一家の上に当たるマフィアなんですね？」

「ああ。でもドロールはペーシモと上下関係といっても『信頼』や
『利害』なんてないはずだからね……………」

ファージェイとユーノのやり取りは続く。

「信頼や利害でない上下関係というと『支配』ですね……………」

「そうだよ。それより中に入ろう。いつまでも外にいたら変に目を
つけられるかもしれないからね」

「はい」

ユーノは自分達が『狐と狸の化かしあい』あるいは『欲にまみれた
バ力達の抗争』に巻き込まれたのではないかと感じた。

夜になって、ドロール一家もなりを潜めたのか静かなものだった。ユーノはベッドから起き上がり、リビングを出て外へと出る。

漆黒の夜空ではあるが、星々が輝いており美しかった。

「何を考えていたんですか？」

ユーノの身体から砂が噴き出て、上半身と下半身が逆転した白い身体のイマジンが出現する。

「少しは強くなれたと思ったけど、僕は何も変わってないって思ってたね……」

「？」

イマジンは首を傾げる。

ユーノは今から一年前に二人『恩人』を失っている。
名はティード・ランスター。

執務官になる事を夢見ていた優秀な捜査官だった。

身内は妹が一人いたらしいのだが、今はどうしているかは知らない。ポケットからカードケースを取り出して、中身を取り出す。

溝に走っているカラーは違うが形状は間違いなくゼロノスカードだった。

「使わないんですか？」

イマジンはソレがどんな効力を持っているかはわからないようだ。

「僕にとつての『お宝』らしいんだけどね……」

ユーノはゼロノスカードを裏返したり、表に戻したりしていた。

「お前さん。ソレをどこで手に入れた！？」

ユーノと同じ様に外に出ていたグランベールが両目を大きく開いて叫んだ。

第十四話 「0070年 ユーノ・スクライアの消息」(後書き)

次回予告

ゼロノスカードを持ったユーノに問い詰めるグランベール。

ドロールはペーシモに呼び出されていた。

アンビシオン一家というペーシモと対立するマフィアが
ユーノが現在生活している村を狙っていた。

夜、グランベールはユーノを起こし村を出るように言う。
そしてグランベールは自分の過去を打ち明けた。
それはユーノにとっても、他人事ではなかった。

第十五話 「0070年 戦の始まり」

第十五話 「0070年 戦の始まり」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

久しぶりに作者の独断と偏見による気になるキャラクターから。

ジョーカー(バットマンシリーズ)

彼ほど最悪にして最狂な犯罪者はいません。

ダークナイトを見た方はご存知かもしれませんが、とにかく恐ろしいとかまともじゃないという言葉しか出てこないキャラクターだと思います。

第十五話 「0070年 戦の始まり」

ユーノ・スクライアが滞在している村の夜空は幾千の星々が輝いていた。

彼が厄介になっっている家族の一人で村の村長でもあるグランベールがユーノが手にしている物を見て、大きく両目を開いてこちらに詰め寄ってきた。

「ソレを……ソレをどこで手に入れたのじゃ!？」

グランベールが指差しているのは、自分が持っているゼロノスカードの事だ。

「遺跡ですけど……」

ユーノは入手した事を大まかに話した。

ちなみにグランベールが現れた事でイマジンはまたユーノの中に戻っている。

「という事はお前さんはアレも見つけたのか？」

『アレ』が何なのかは推測するのは簡単だった。

「……はい」

正直に答えるしかなかった。

「そうか……」

グランベールは満足したのか、それ以上は何も訊ねずに家へと入っていった。

ユーノが滞在している村の近くにある街に一際豪華というか悪趣味な屋敷がある。

ドロール一家の上に当たるマフィア、ペーシモの本拠地である。

ドロールは本日、上司的存在であるペーシモに呼ばれていた。

（つたく。面倒臭えなあ）

ドロールは心底嫌そうな顔で屋敷の中に入る。

煙草を吸いたところだが、吸ったら吸ったで嫌味を言われるのは

わかってるので吸わないでおくことにした。

ペーシモの私室の前に立つと、ノックをする。

「ドロールでえす」

ご機嫌を伺うような猫なで声でいく。

「入れ」

しわがれた声が返ってきた。

ペーシモの私室は豪華といえば豪華だが、見る者にとっては悪趣味といわれても仕方がないくらいに無駄があつた。

ドロールも口には出さないが、内心では『成金趣味』と罵っていた。

「あのお、わたくしに何か御用でしょうか？」

『力』が全ての世界では力なき者が力ある者に媚びへつらつても生きていく事は特に珍しい事ではない。

「最近お前がシノギ（上納金の回収）にしている村を狙っている奴等がいてなあ……」

ダルそうな感じでペーシモは言う。

面倒ごとに関わりたくないという口振りだ。

（このヤロオ……）

ドロールは彼との会話が嫌いだ。

何故なら彼の放つ息が臭くて臭くて仕方がないのだ。

「その辺の対策、どうしてるんだあ？」

夜食の鳥の丸焼きを頬張って、くっちゃくっちゃと音を立てる。

料理特集などで芸能リポーターがそそらせるような食べ方ではない。単純でがつついていてるだけだ。

品がなくて『卑しい』という雰囲気しか出てこない。

「え、えーとですね。先月に購入した質量兵器（銃器類）を構成員全員に装備させて巡回させていますんで大丈夫だと思います。はい」
したくもないけど、ペコペコしながらドロールはペーシモに報告する。

「ほお。で、狙ってる奴等の中に魔導師がいたらどうすんだ？ん？」
ペーシモが次元世界で当然のことを告げる。

いくら銃器類で身を固めても、それ以上の『力』ともいえる魔法で太刀打ちできる保障はない。

「そ、その辺りは魔法を使う前に仕留めれば何とかなのではないかと……」

「お前の部下の中にそんな達者な奴がいたか？」

ペーシモは完全に自分の組織構成を把握している。

ドロールの部下に魔導師はいない。

ペーシモはその辺りを知っていながらわざと訊ねているのだ。

嫌がらせとしか言いようがない。

「まあ、せいぜい気張れや。お前の稼ぎとなる場所はある村しかないんだから……」

ペーシモは嫌味ったらしい笑みを浮かべていた。

ドロールは屋敷を出て、一人愚痴りながらも村へと向かっていた。

「ったく、相変わらずむかつくデブだぜ」

自分も似たような体型であるが、あえて無視する。

村に戻りながら、どうやって守るかを考えていた。

元々自分もこの村の出身だ。

一発当てるという目的でマフィアになり、一時期は飛ぶ鳥も落とす勢いで出世したのだが信用していた部下に裏切られて権力も金も女も持っていかれてしまい、現在に至る。

「あのヤロオ。俺から全部奪つてのし上がりやがって……」

いつか必ず殺してやる、と誓いながら。

だが心の中で殺人宣誓をしながらも彼はソレを実行に移す事ができない。

あるものを捕られているからだ。

外には一人の少年がいた。

（あのガキ、確かグラン爺んとこに厄介になつてガキじゃねえか）

「よお。一人で天体観測か？」

ドロールが少年……ユーノに声をかけた。

「貴方は確か、ドロールさんですよ？」

「おう。憶えてもらえて光栄だぜ」

ドロールは愛想笑いを浮かべるが、ユーノは警戒している。

「そう警戒するなよ。とって食いやしねえよ。グラン爺いやグランベールいるか？」

「家にいると思いますよ」

「ありがとよ」

ユーノに礼を言ってからドロールは家の中へと踏み入った。

ドロールに話しかけられたユーノは彼の後に付いていかたちで家に入った。

リビングではドロール、グランベール、フアーティ、ムツティ、フイリオがいた。

一番下のスールは今頃眠っているのだろう。

ドロールがグランベールと話し合っており、フアーティやムツティも聞いており、フイリオがドロールを睨んでいた。

ユーノもその場に留まり、事の成り行きを見届ける事にした。

「なあ、グラン爺。アレはどこにあるんだよ？」

「アレはこんな事のためにも使うものではない。それに中途半端な覚悟でアレを使えば間違いなく破滅じゃ」

（アレ？もしかして『時の列車』やゼロノスカードのこと……？だとしたらグランベールさんもドロールさんも何で知ってるんだろ……）

ユーノはパーカーのポケットに入っているカードケースをまさぐる。

「じゃあ何の為に置いてあるんだよ！？出し惜しみするつもりかよ！？知ってるんだぜ！あんたはアレをどこかに置いてあるってな！」

ドロールが怒鳴る。

「アレは既に儂の元から離れておる。もう今となつては儂も知らん」

「チッ！このままじゃこの村は滅ぶしかねえんだぜ！！」

テーブルを叩いて、ドロールは出ていった。

「二度と来るなあ！」

フィリオがドロールの背中に向かって怒鳴る。

「やっぱり抗争が起こるんですか？」

「この村はドロールが牛耳っておるといいうが、実際にはペーシモに支配されておるのが事実じゃ。それにドロールはペーシモにあるものを捕られている以上、逆らえんのじゃ」

「あるものってまさか……」

グランベールの口振りからして、ユーノはそれが何なのかを理解した。

「スクライア君？」

フィリオはわかっていないらしい。

ユーノの拳がぶるぶると震えていた。

*

時空管理局本局ではクロノ・ハラウンとヴェロツサ・アコースが二人で会っていた。

この部屋をセツティングをしたのはヴェロツサだ。

テーブルには紅茶が既に用意されていた。

「どうしたんだい？急に呼び出して……。しかも二人だけで話したいなんてさ」

ヴェロツサは普段のお茶らけた雰囲気がなく査察官としての表情をしていた。

「クロノ君は今、行方不明になっている『無限書庫』の司書であるユーノ・スクライアさんとは友達なんだよね？」

「友達というより腐れ縁だけだね。それが？もしかして見つかったとか？」

それならば他の面々にも知らせてあげなければならない。

「その逆だよ。見つかっていない、というより管理局は見つけるつもりはないみたいだよ」

ヴェロツサの一言にクロノの瞳の色が変わる。

「どういう意味だい？既に搜索チームは編成されて艦を用いてユーノがいる遺跡世界に向かっているんじゃない……」

「そう思ったさ。でもねこの一ヶ月間、艦は一度も遺跡世界には向かってないんだ。それどころかその編成されている搜索チームっていうのも存在そのものが胡散臭いね」

「胡散臭い？」

クロノは空いた両手の指を絡める。

「うん。会議室の使用履歴を見たんだけどね。搜索会議そのものが行われていないんだよ」

「じゃあ誰がそんなデマを……」

クロノの予想では自分達よりも上の連中の誰かが故意に行ったものだと考えている。

「それはわからない。遺跡世界に何かがあると考えてるのが定石かもしれないね」

ヴェロツサは腕を組んで、組んでいた足を組みかえる。

「何かって何だろう？」

「上の連中がわざわざこんな小細工を弄してまで隠し通したいもの。相当ヤバイものだと思うよ」

二人は同時に紅茶で喉を潤していた。

*

翌朝となり、村は相変わらずドロール一家の構成員達が銃を手に巡回していた。

仕事を一つするにもいちいちお伺いを立てなければならぬのだから面倒としか言いようがない。

『疑って当たり前』の状態であるため、ほとんどの者達が疑われて村の外に出してもらえないというのが現状だったりする。

ユーノは家の側で外の風景を見ていた。

自宅待機ではないのが幸いだ。

村の子供達も近所で遊んでいた。

ドロール一家のマフィア達に「一緒に遊んで」とねだったりしている子供もいた。

その中にスールがいたりする。

人目のつかないところに移動すると、足を止める。

「まだいるんでしょう？」

「はい。いますよ」

ユーノの台詞に反応すると身体から砂が噴き出て上半身と下半身が逆転し、身体が真っ白のイマジンが出現した。

「どうしたんですか？僕を呼び出して。もしかして契約をする気にも？」

「いや、そうじゃないよ。ただ話し相手になってもらいたくてね……」

「？。それはいいですけど何ですか？」

イマジンは特に不快に感じることなく応じてくれるようだ。

「コレだよ」

パーカーのポケットからゼロノスカードが入っているカードケースを取り出す。

「あのお爺さんが何故ソレを知っているかってことですよね？」

イマジンはユーノが何を言いたいのか察した。

「うん。それに昨日ドロールさんとの会話から考えても、グランベールさんはカードの事や『時の列車』を知っているようにしか思えないんだよね」

ユーノは昨日の会話を思い出している。

「あのお爺さんは過去にそのカードを使った事があるって事ですか？」

「でなきゃ、僕がカードケースから取り出したただけであんなに大声を上げるとは思えないよ」

ユーノはイマジンの意見に賛成している。

もちろんこれは推測であり、確たる証拠もないので立証するのは難しい。

グランベールに直接聞けば早いが逆に根掘り葉掘り訊ねられる可能性があるのでこちらからは聞かない。

「どちらにしてもグランベールさんには何かがあると思った方がいいのかもしれないね……」

「そうですね……」

一人と一体の会話が締めくくろうとした時だ。

村の広場からドロールの声がした。

広場にいと村人達が集まっており、台の上に乗っているドロールが拡声器を持って叫んでいた。

集まっている村人達の中に見知った顔の少年――フィリオがいたので側まで寄る。

ちなみにイマジンはまたユーノの内に収まっている。

「いいか！ テメエ等あ！ この村を守りたきや武器とって戦うしかねえ！ 戦う気のある奴は武器を取れ！ 戦う気のねえ奴はどんな手え使っても戦わせる――！」

何かに追い詰められているような表情をしているドロールは左手に持っているハンドガンの銃口を天に掲げて二、三回引き金を絞る。バンバンバンと銃声が響き、抗議の声を上げていた村人達が全員黙る。

そして構成員達が適当に武器を村人に配り始めた。

ユーノは家に戻って構成員に渡された武器の取扱説明書をベッドに寝転んで読んでいた。

ちなみに彼が渡されたのは二本のサバイバルナイフである。

「飛び道具が相手だったら隠れてナイフ投げて仕留める以外にないじゃない……」

発掘を生業とするスクライアはナイフの扱い方も護身術の一巻として教育課程に含まれている。

サバイバルナイフのホルスターは左右両腰に装着してから部屋を出て、リビングを出てある場所に向かう。

それはドロール一家だ。

「スクライア君。どうしたの？」

向かう中で恐らく射撃の練習をしていたのであろうフィリオが来た。そのように推測できるのは彼の身体から硝煙の臭いがするからだ。

「ドロールさんのところに行くんだけど……」

「だったら僕も行くよ。あのオッサンには一言文句言わないと！」
できれば一人でいきたかったのだが、一度言い出したら聞きそうにないのは短い付き合いでわかってる。

「わかった」

ユーノはそれだけ言うと、フィリオと共にドロール一家へと向かった。

ドロール一家のアジトに到着し、ドアをノックしようとする。

「ん？何か声がする」

「え？」

ドア越しに声が聞こえてくるので、ユーノとフィリオは耳を傾けている。

「頭あ。俺達であのデブ、殺っちゃいましょうよ！？」

「バカ野郎！下手に逆らってみろ！確実に殺されちまうだろうが！」
「！」

手下らしき男の声とドロールの声がする。

「あのオッサン。昔は骨のあるマフィアだって、お爺ちゃんと言ってたのに……。ここまで落ちぶれるなんて……」

「待つて。まだ続きが聞こえてくる……」

ドロールを軽蔑するフィリオに対し、ユーノは次の会話に耳を傾ける事に専念した。

「でもこのままじゃ、いつまで経っても俺達はあのデブのパシリ……いや奴隷ですぜ!!」

「わかってらあ! そんな事はよお! クーデター起こして俺達が死ぬのはいいぜ。こういう稼業に手をつけてる時点でしょうがねえ事だからな。だがよ……それで俺の女房やお前等のお袋さんが殺される可能性だってあるんだぞ! 何せアイツは人質や村を爆破させる爆破装置の起爆リモコンを肌身離さず持つてるんだからな!」

手下とドロールの会話を聞いているユーノとフィリオは顔を見合わせる。

「人質に爆破装置って……」

「人質と爆発物で脅す。人を従わせるには十分すぎるものだよ」
驚愕するフィリオに対して、ユーノは冷静に受け止めていた。

「スクライア君。これってもしかして……」

「今日の徴兵や上納金などは全てペーシモが裏で糸を引いていると見て間違いないだろうね」

ユーノはドアから離れる。

「スクライア君?」

「帰ろう。これ以上ドロールさん達に鞭を打つ必要はないよ」

ユーノの言葉に従うようにして、フィリオも頷いた。

*

ユーノ達の村を双眼鏡を用いて、様子を窺っている男がいた。

身長は二メートルほどあって筋骨隆々のたくましい肉体をしていた。長身なためか、長髪が似合っていた。

年齢からして二十歳前後だろう。

男の後ろには似たような格好をした男女数百名がいた。

「お頭。あの村にはドロール一家がいますぜ」

「ドロールなど恐るるに足らん。所詮は素人に毛が生えただけの連

中の寄せ集めにすぎん」

男は手下の顔を見ないで、双眼鏡越しに映る風景を見ている。

「あの村を制圧し、拠点にすればペーシモを潰す事はたやすいな」

双眼鏡で窺っている男こそ、この集団……『ソルプレーザ』の首領であるアンビションである。

「それだけじゃありません。ペーシモの権力と金を奪った後には村人から上納金を徴収して私達がこの次元世界を支配するための資金を安心して生み出す事ができますからね」

副首領ともいえる女が横から告げる。

「ああ。この次元世界を我々ソルプレーザのものにするための始まりとしてまず、この近辺を牛耳っているペーシモを潰す事だからな」
アンビションにとっては野望の一步という事になる。

*

海鳴市は既に夜となっており、三日月が我が物顔で君臨していた。

高町家は家族全員揃っているが、リビングの空気は重かった。

「ユーノはまだ見つかってないの？」

「ああ。なのはの話ではな……」

高町美由希と高町恭也が向かいに座っている高町なのはに聞こえないように話し合っていた。

「ユーノ君。大丈夫かしら……」

「わからない。正直、なのはでなくても不安になるよ」

高町桃子はユーノの身を案じ、高町士郎は娘が不安になるのも無理はないと言う。

なのはは黙々と食べていた。

一言も発しないまま。

正直普段の明るさは微塵も感じられなかった。

*

住人の誰もが寝静まった頃、ユーノは閉じていた両目を開き、ベッドから起き上がった。

ドロールから貰ったサバイバルナイフは装備している。

発掘の際、音に対して反応するトラップの対策のため音を立てずに歩く方法も心得ている。

ゆっくりと音を立てずに、ドアを閉めて駆け出す。

「待て」

静かだが、ユーノの身体の動きを封じるには十分な威力があった。後ろを振り向くとグランベールがいた。

「どこに行くつもりじゃ？」

「……………」

「答えるつもりはないという事じゃな。では儂が当ててやる。お主ペーシモのところに行くのじゃろ」

グランベールの言っている事は見事に当たっていた。

「……………わかってるなら行かせてください」

「ならぬ！！」

ユーノは行こうとするが、グランベールは大声で停める。

「お主、『殺し』の経験はあるのか？」

「……………いえ」

「どんなモノでも『殺し』を目的でそのモノの命を奪えばもう後には退けぬぞ。お主は自分の意思で自分の命……時間を停める事は許されなくなるのじゃ」

命を奪う者には『自殺』という行為は許されないと断言しているのだらう。

「そんな事はわかってます。どうせ死ぬなら僕も戦って死にたい……」

……………」

「この馬鹿者！戦って死にたいじゃと！！そんな者は中途の覚悟しかない者が言う台詞じゃ！そんな考えではお主が目指すものには到底なれぬわ！！」

グランベールの一喝にユーノは怯むが、すぐに持ち直す。

「僕が目指すもの……」

自分が目指すものとは何だろうか。

三年前に魔導師としての成長を切られ、ひたすら身体を鍛える事に専念した。

魔法拔きの純粋な戦闘ならそうそう負ける事はないと思う。

だがそれが自分が本当に目指しているものなのかどうかと訊ねられると答えられない。

違うような気がしてならないからだ。

「そのカードがお主の元にあるのは偶然だと思っているがそれは違うぞ。お主がカードを選んだのではない。カードがお主を選んだのじゃ。お主はこれからこの次元世界の時間を守らねばならぬ。だからこんな所では死んではならぬ。今は逃げるのじゃ。非情になれ」
グランベールの言っている事を聞きながらも、ユーノは背を向けたままだ。

「……ここにいる人達を見捨てる人間が次元世界の時間なんて守れるわけがないですよ！」

ユーノはペーシモの屋敷に向かって、歩き出した。

「甘い。甘すぎる……」

グランベールは非情になりきれずに若さゆえの青さを出しているユーノに呆れた。

第十五話 「0070年 戦の始まり」(後書き)

次回予告

ペーシモの屋敷に忍び込むユーノ。

しかし……

遂に始まる欲深き者達の抗争。

グランベールが明かす真実とは？

第十六話 「0070年 開戦」

特 報

モモタロス「皆さん。重大発表です」

仮面ライダー電王LYRICALシリーズ。

第四部制作決定！！

タイトルは

仮面ライダー電王LYRICAL Strikers

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3059y/>

仮面ライダー電王LYRICAL A's to Strikers

2012年1月13日23時09分発行